を聞いて又もや犇々と胸に湧いたのである。上流社會の娘といふ、皆に良人に欲しがられてゐる上流の紳士たる彼が、賤しいマスロオワに結婚を申込んだのである、だのにマスロオワはそれを待たないで看護長風情の男と痴々繰合つたのである。彼は烈しい忌々しさを覺えて彼女を見た。

『これに署名をなさるがいゝ。』と云つて彼は衣嚢より大きい封筒を取出し、それを卓の上に置いた。彼女は胸當ての端で涙を拭きながら卓に就いて、何處に何う書けばよいかを尋ねた。

彼はそれを敎へた。彼女は左の手で右の袖口を少し引上げた。傍に立つて彼は、書いてゐる彼女の肩先きから背中へかけて、時々涙を嚥込むために打震へるのを見ながら、傷々しげに思ひやる同情と面目を踏潰された憾しさと、その二つの思ひが自分の胸に相戰ふのを覺えた。——そして同情の心が遂に打勝つた。

今迄は何うであつたか、本當に心の底から彼女を憐れんでゐたのか、それともた自ゝ分の醜惡な行爲だけを感じてゐたのか、彼女の墮落を心では非難しながら要はたゞ自分の罪だけを感じてゐたのか、——それを彼は今いづれとも思出す事は出來なかつた。併し彼女が又そんな事をしたのも畢竟は誰が元だと思ふと、彼は又急に自分の罪業を思はずにはゐられなかつた、そして彼女を憐れんだ。

彼女は愁訴狀に署名し終ると、インキで汚れた指を服の緣で拭き乍ら立上つて彼を見た。

『どんな事があらうとも、私の決心は變りはしません。』とネクリュウドフは云つた。

看護長との關係なども許してやると思ふと、彼の同情の心は尙一層强くなるのであつた、彼女に對する暖かい心も湧くのであつた、彼は慰めてやり度く思つた。

『私が前に云つた事は、皆その通り履行します。何處へあなたが遣られやうとも、私も從いて行くのです。』

『そりや駄目ですわ。』と女は口早に云つた、併し其顏は悅びの色に輝いた。

『何か旅に入用な物はよく考へて置くがいゝんです。』

『何も別に要らないと思ひますわ。有難うございます。』

典獄はつかつかと傍へ寄つて來た。ネクリュウドフは注意など受けるよりと思つて、自分から別れを告げて外に出た。今迄知らなかつた何となき靜肅な悅びと平和が感じられて、彼の心は爽快な或る高い所に達した、それはカテュウシヤが何をしようとも、自分のカテュウシヤに對する愛は、決して其爲めに失せるものではないといふ意識であつた。彼女が看護長と痴々繰り合はうとも、それは彼女のする事であつた、彼は自分の爲めに彼女を愛してゐるのではなく、彼女の爲めに愛してゐるのであつた、神の爲めに愛してゐるのであつた。

＊　＊　＊

マスロオワが看護長と關係して病院から追ひ戻されたといふ噂をネクリュウドフは本當だらうと思つたのであるが、實は何でもない事であつた。それは彼女が或る看護婦に頼まれて、廊下の突當りにある藥局に咳止め藥を取りに行つた時、いつも彼女の尻を追ひ廻はしてゐたウスティノフといふ丈の高い小瘡の痕のある例の看護長が、巫山戯た眞似をしようとしたので、彼女は烈しく彼を突飛ばしたのである。看護長は瓶臺に躓けかゝつた。瓶はがらがらと音して二つは落つこちて微塵に破れた。

丁度その時廊下に來かゝつた醫員長は、瓶の破れた音を聞きマスロオワが顏を赤くして走つて行くのを見て叱りつけた。

『おい、お前は此處で又巫山戯るのか、よし、突戻す許りだ。』と云つて醫員長は又看護長に向き直り、眼鏡越しに屹と睨みつけ、『一體この態は何です？』

看護長は極り惡さうに微笑しながら辯解した。けれども醫員長は皆まで聞かず、憤然として直ぐ事務室に行つた。そして其日典獄にマスロオワの代りに別なもつと良い女を手傳ひとして寄越して呉れるやうに云ひやつたのである。カテュウシヤは男と關係したといふ口實で

病院から追ひ戻されたのが又となく憾しかつた、男に對する嫌惡の思は此前にネクリュウドフに逢つた時以來、彼女の心に絶え間もなかつた事とて、今又そんな事を云はれては堪らなかつた。自分の過去が過去であつたから、又今も淺間しい女囚の身の上であるから、誰も彼もが、殊にあの厭な看護長までが、自分をさうして弄んでいゝと思つてゐるのかしら、そして自分が撥付けるのを嘘だと思つてゐるのかしら、と思ふとそれは彼女には堪へ難い侮辱であつた。彼女は泣かずにはゐられなかつた。

ネクリュウドフが面會に來たと聞いた時は、彼女はそれを云はうと思つた、ネクリュウドフの耳にも入つた事だらうと思つて、譯を云ひ本當の事を知らして不當な侮辱を斥け度いと思つた。けれども憤然としてゐる彼の顏を見た彼女は、譯を云つてもネクリュウドフが迚も信じはすまいと思つた、却つて其辯解のために一層深く疑ふだらうと思つた。涙がこみ上げて來て喉が塞つた、彼女は默つてゐるより外なかつたのである。

彼女は今とても矢張りネクリュウドフを許してゐる積りではなかつた、今とても絶えず彼を忌み嫌つてゐる積りであつた、二度目に彼が面會に來た時云つてやつた通り、たゞ一圖に憎んでゐるだけだと思つた。併しそれは彼女だけの積りで、實はもう早くから彼女は再び彼を愛してゐるのであつた、彼の心に適ふやうに無意識に自分の事一切をさう爲してゐた位ゐ

それ位ゐ愛してゐるのであつた。酒を飲むのも止め、莫を吸ふのも廢し、嬌めき媚びる事もしなくなつて、病院に手傳ひとして行きもしたのである。それは皆たゞ彼が望んでゐたからであつた。

彼が結婚をしたいと云ひ出す度毎に、いつも彼女がきつぱりと拒絶許りしてゐたのも、實は一度否と云つた言葉の誇りをたゞ繰返し度い爲めと、主としては彼が自分との結婚によつて必ず不幸な目に逢ふだらうと思ふ爲めであつた。それで彼女は決して彼の犧牲を受け容れはしないと固く心に誓つてゐたのであるが、併し自分は彼に輕蔑されてゐるのか、矢張り今迄の賤しい女に過ぎないと思はれてゐるのか、魂を入れ代へて生れ變つた積りでゐる事も知られないでゐるのか、と思ふと堪らなく辛かつた。控訴が棄却されて愈々懲役の宣告を受けるやうになつた事よりも、病院で淫らな事をしたとネクリュウドフに思はれてゐるらしい事が、それが彼女には遙かに堪らない不幸であつた。

二八

カテュウシヤは、直ぐ次に出發する徒刑囚の一團の中に入れられて護送されさうなので、ネクリュウドフも出發の準備をしなければならなかつた。併し彼はせねばならない事がまだ澤山あるので、どんなに餘裕や時日があつても、果して一切整理をつけ得るだらうかと思つた位であつた。今と前とは全く變つてゐて、前だと自分は何をしようと考へる場合には、す可き事の中心となるものはいつも必ずドゥミトリイ・イワノオヰッチ・ネクリュウドフであつて、生活の一切の興味と意義とは皆一に其のドゥミトリイ・イワノオヰッチ・ネクリュウドフに集中してゐたのであるが、それであり乍ら一切の事物が退屈で仕樣がなかつた。それが今は何うかと云ふに、用事といふ用事は一切他人の爲めの用事であつて、決してドゥミトリイ・イワノオヰッチ・ネクリュウドフ自身の用ではないのであるのに、それだのにさうした他人の爲めの用事が彼に取つて皆興味深く意義深く、强く彼の心を惹きつけるのであつた。そしてさういふ他人の爲めの用が今の彼に少からずあつた。自分の爲めの用をするのは今も不愉快の元であつたが、他人の爲めの用をするのだと思ふと、それは誠に心持がよかつた。

ネクリュウドフが今沒頭してゐる用件は三種類で、それを彼は持前の學究癖から自分で區分し、一切の書類をそれぞれ三つの書類挾みに別に入れてゐた。其第一の件はカテュウシヤ關係のもので、それは今のところでは愁訴狀提出の事と西比利亞行きの準備の事と、此の二つに分類されるのであつた。

第二は土地處分の件であるが、パノオヲの地は百姓一同に彼等共同の利益の爲めの稅を出

させる條件で呉れる事にして置いたから、尙ほ其の協定を遂げて約定書を作り、それに署名をさせねばならなかつた。クスミンスコエの土地は自分の其時の量見通りに取りきめて置いたので、即ち彼は地代を受取る事になつてゐるのであるが、尙ほ其の期限を極めなければならず、又其地代の中のどれだけを自分の生活の爲めに納めて、何程を百姓等の爲めに殘してやれるかをも調べなければならなかつた。目前に迫つてゐる西比利亞行きに、どの位の金がかゝるか、それが彼にはまだ見當が着かないので、其地代も自分の手に收める分を半分には減じたが、未だ全部百姓に呉れるわけには行かなかつた。

第三種の書類は囚人救護に關する件で、彼等の嘆願は日毎に殖えて來るのであつた。はじめ彼は自分に縋つて救ひを求めて來る二三の囚人を相手にしてゐた間は、彼は毎度直ぐ熱心に彼等の爲めに盡力して苦痛を和らげてやる事に努めてゐたが、後には嘆願者が矢鱈に殖えて、到底その一つ一つの場合を皆救つてやる事は出來なくなつたので、おのづと第四類の用件が出來上り、昨今は其用件が最も多くネクリュウドフの頭を働かせてゐた。

それは即ち刑事裁判といふ名のある現在の愕く可き制度を調べてみる事で、そんな制度の本質は抑も何であるか、その意義は何處にあるか、價値は何處にあるか、又その起原は何うなつてゐるのか、そんな制度があればこそ監獄といふものがあるではないか、その監獄に閉ぢ込められてゐる者の一部は今は彼が現に見て知つてゐる所であるが、彼得斯堡の大監獄よりサガレン半島のそれに至るまで、たゞそんな制度のお蔭に何處にも彼處にも自由剝奪所が設けられて、其内部には此の愕く可き刑事裁判といふものゝ犧牲者が無數に苦しみ惱んでゐるではないか、何故こんな制度が存在しなければならないのであるか、とさう根本から考へてみなければならなくなつたのである。

親しく囚人等に接觸もし、辯護士等にも聞き、監獄の教誨師にも尋ね、典獄にも問うたり、又囚人の身元明細書を見たりして、ネクリュウドフは所謂犯罪者たる囚人を五つの部類に分ける事にした。

その第一部類は全く無罪の連中で、例へば不當にも放火犯の名をつけられてゐるメンシ。オフだとか、マスロオワとか、尙ほ其他若干の者のやうな、裁判の過失の犧牲者の群であつた。その人數はさまで多くなく、教誨師の觀るところでは百人中に七人位の割であつたが、此部類の囚人がネクリュウドフの注意を特に强く惹くのは勿論の事であつた。

第二の部は特殊の事情即ち疳癪の餘りとか、嫉妬に驅られてとか、醉つ拂つた揚句とかに罪を犯した者で、其數はネクリュウドフの見込みによると、全犯人の過半を占めてゐた。彼等を裁判したり罰したりする役人等とても、そんな特殊の場合には決して行り兼ねない事は殆

と疑ふ餘地もなかつた。

第三は犯人自身は尋常普通の事をした積りで、中には良い事をさへした積りで、それで罪になつた連中の部類であつた。彼等の所業は彼等の知らない法律といふものによつて犯罪の烙印を押されたのである。此部類に屬する者はブランデエや其他の商品を密賣した者とか、牧場の草を盜んだ者とか、無斷で薪を拾つた者とかで、山地の鼠賊も亦此中であつた。

第四の部類に屬してゐるのは、たゞ一般社會の水平線以上に高い道義心を持つてゐる爲めに罪人とされてゐる人々であつた。自分達の不羈獨立の侵害を防禦したり政府の暴力に抵抗したりした爲めに犯罪者とされてゐる彼等は、ネクリュウドフの推算では非常な多數に上るのであつた。

第五は社會を毒するよりも寧ろ、より多く社會の爲めに毒された者の部類で、即ち社會に繼兒扱ひにされ虐げられ苛められ誘惑されて身心共に廢頽つた、例へばあの敷物を盜んだ小僧だとか、其他ネクリュウドフが監獄の內外で見た無數の者だとかが、即ちそれに屬するのであつた。彼等は彼等の生活狀態の爲めに所謂犯罪行爲の方へ必然に次第に騙り立てられて行かざるを得ないのであつた。ネクリュウドフが昨今接觸してゐる少からぬ强盜犯や殺人犯も、彼の觀る所によれば此部類に入るのであつた。それに尙ほ仔細に觀察すれば、新しい學說で典型的犯罪者と名づけられ、そんな犯罪者が此社會にゐるから刑法も刑罰も必要なのだと云はれてゐる所のやくざ者や無賴漢も亦此部類に入るのであつた。そんな所謂やくざ者や無賴漢とても、あの社會を毒するより社會に毒された事の多い連中と別に變りはなく、今直接にこそ社會のそんな虐待を受けなかつたらうとも、間接に卽ち兩親若しくは其親の代に於て虐遇され酷待されたのであつた。

さういふ犯人の中でネクリュウドフを殊に愕かしたのは、再犯癖のあるオホオティンといふ强盜であつた。オホオティンは淫賣婦の私生兒で、木賃宿に育ち、十三の歲になるまで人間らしい人間に逢つた事がなく、子供の時から泥棒の群に墮ちてゐたが、天成の滑稽家で、いつも其滑稽で人を悅ばしてゐた。彼もネクリュウドフに保護を求めたが、其時も彼は自分の事でも、裁判官の事でも、監獄の事でも一切の法規でも、刑法でも宗教上の掟でも、何もかも茶にしてゐた。今一人フェドオロフと云ふ美男の强盜もゐた。それは或る强盜團の頭領で、部下を指揮して或る老年の官吏を殺して其金品を捲き上げたのである。百姓だつたフェドロオフの親父は全く何の理由も無しに家を他人に取られてしまつたので、フェドロオフはそれから兵になつたが、或る士官の情婦に惚れたために散々ひどい目にあつたのである。彼は大の情熱家で、どんな事をしても快樂は貪れるだけ貪らうといふのが彼の第一の願であつた。

そして又何か別な目的の爲めに快樂を制してゐるやうな人間を彼は未だ一度も見た事がなく、快樂以外に人間の生きてゐる目的がある等といふ言葉を一度も聞いた事がなかつた。豐富な天賦を有つた右の二人はたゞ社會より捨てて顧みられないので粗野になり原始的になつただけで、丁度手入れをされない草木が蓬々と勝手に矢鱈に育つたやうな者であつた　その事がネクリュウドフには鮮明に分つた。

ネクリュウドフは又一人の浮浪人と一人の女をも知つた、その二人は性が愚鈍で殘酷で、ネクリュウドフも個人としては非常に嫌つたが、その二人に就いても彼は伊太利の刑法學者の云ふやうな典型的犯罪性を認める事は出來なかつた。彼が個人として嫌ひなそんな人間を見るのは、監獄外の自由な天地にフロックを着たり制服をつけたり笹緣を飾つたりして揚々としてゐる同種類の人間を見るのと變りはなかつた。

斯樣な種々雜多な連中は何故監獄に入れられてゐるか、ちつとも變りのない他の人間どもは自由な天地に生活してゐるのに、加之彼等を亂暴にも罪に陷したりしてゐるのに、といふ問題の討究が今や又ネクリュウドフの第四の用件となつた。

はじめには其問題の解決を彼は書籍に就いて求めようと思つた、で夫れに關する著述は一切殘らず買ひ込んだ。ロンブロゾオ、ガロファロオ、フェリイ、リスト、モオヅレイ、タルドと集めて熱心に讀んだ。併し讀んで行けば行くほど、彼はますます當てが外れる許りであつた。學問の上に一廉の手柄を立てようと思ふのでなく、著述をしたり議論をしたり教訓をしたりする爲めでなく、たゞ簡單な實際生活に活用し度いと思つて學問に取りかゝつてみる者がいつも遭遇する所のものに、彼も矢張り遭遇したのである。彼の取りかゝつた學問が彼に答へるのは、多趣多樣な複雜な高尙な無數な問題の解答で、それは皆刑事裁判に關するものであつたが、彼の唯一つの問に答へるのは一つもなかつた。彼の問ひは極く簡單で、一部の人間が一部の人間の爲めに何ういふわけで又何ういふ權利によつて監獄に投げ込まれ、苦しめられ、追放され、撲られ、殺されするのであるか、そしてさうする者がされる者と何の異つた所があるか、といふのであつた。併し其問に對して如上の書籍が彼に答へるのは、次のやうな議論の形に於てするのみであつた、卽ち人間には意志の自由があるかだの、人間の頭蓋骨を度つて、其人の犯罪性を知る事が出來るかだの、遺傳は犯罪に如何なる關係を有するか、不道德が遺傳することは果して實際あるものか、不道德とは何であるか、狂氣とは何であるか、退化は實際にあるか、性情とは何であるか、氣候や食物や無敎育や模倣や催眠作用や情熱などは犯罪に如何なる影響を及ぼすか、社會とは何である、責任とは何である、曰く何、曰く何、といふ議論であつた。

さういふ議論はネクリュウドフをして漫ろに、嘗て學校歸りの小さい子供に或問をかけてみた時の其子供の答を思ひ出させた。ネクリュウドフは其子供に、君は字が書けるかと問ふと、『書けるとも。』と其子供は答へた。『よろしい、ぢやあ足といふ字を書いて見給へ。』すると子供は狡猾い笑ひ方をして、『足つて、何の足です？　犬の足？』と尋ねたのである。それと同樣な答しか、ネクリュウドフは自分の唯一の根本的な問ひに對して如上の書籍より得なかつたのであつた。

如上の書籍に就いて彼は成る程幾多の精神的な高尚な興味深い事柄を學び得た、けれどもたゞ「如何なる權利を以て一部の人間が他の一部の人間に罰を加へるのか」といふ重大な問に對しては何等の答をも與へられなかつた。さういふ答が得られないのみか、むしろ如上の幾多の議論は要するに刑罰の說明であり辯明であつて、刑罰の必要は旣に自明の公理として認めてゐるのであつた。ネクリュウドフは少からず讀んだ、偖し所々間を略かしもした、そして自分の問に對する答を自分が見出し得ないのは、自分が根本的の研究をしてゐないからだと思つた。併し追つては其答を見出し度いと思つてゐるので、果して其答が何れとならうとも今は未だ其の正不正を信ずる事を敢てすまいと思つた。

マスロオワの屬してゐる囚徒の組は七月五日に出發と確定した。ネクリュウドフも其日一緒に從いて發たうと思ふので其準備をした。其出發の一日前の夕方ネクリュウドフの姉は良人と共に弟を訪ねに出て來た。

ネクリュウドフの姉ナタリエ・イワノフナ・ラゴジンスカイヤはネクリュウドフより十歳も上で、ネクリュウドフは可なり多く彼女の影響感化を受けて育つたのである。彼女は子供の彼を大へんに可愛がつた、そして彼女が結婚するまで姉弟二人は殆ど同年の親友のやうに睦じくしてゐた。その時は彼女が二十五歳で彼が十五歳であつた。その前に彼女は彼の亡友ニコリンカ・イルテニエフに戀してゐた。ネクリュウドフも姉もニコリンカを愛してゐた、そしてそれは全人類を結びつけるところの或る美質の三人にあるのを愛してゐたのであつた。

その後は姉も弟もそれぞれ邪道に外れて行つた、彼は彼の放蕩に由つて、彼女は物質的愛の對象たる男との結婚に由つて。その男は嘗て姉弟二人に取つて最も神聖であり重大であつた或物の何であるかをも知らなければ、又隨つて、それを尊重してもゐなかつた。姉弟二人が一時抱いてゐたやうな、自己の道義的完成を圖つて人類の爲めに盡さうといふやうな努力

は、彼に取つてはたゞ我利々々の名譽心に役立つものとしてのみ首肯する事が出來るのであつた、即ちそれによつて自分を他よりも偉く見せる爲めにのみ必要なものとされるのであつた。

彼は門地も財產もなかつたが、事務には器用で、又自由主義と保守主義との間を巧く泳いで行く術を心得て居り、いつも時と場合に應じて最も利益多い自分の効果の爲めにと其二主義を自在に利用してゐた。又女達に對してもよく氣に入られるやうに始めからちやんと打算してかゝる事の巧いのが、亦彼の成功の有力な助太刀であつた。さういふ色々な方法によつて彼は法曹界に比較的顯要な經歷を辿ることが出來たのである。彼が外國でナタリエと相知つた時は、彼はもはや青年期を出ようとする年頃であつた、そして同じく娘時代を過ぎてゐたナタリエを巧く手懷け、不釣合だと云つたナタリエの母の意志には殆ど全く逆つて彼女と結婚をしたのである。ネクリュウドフは姉聟を好かなかつた、その嫌惡の情を自分でも承認したくはなく、そんな事は思ふまい思ふまいと努めはしたが、姉聟の下劣な考や我利々々な狹量には何うしても贊成は出來なかつた、殊にそんな貧弱な性格の良人の氣に入り度いために自分の姉が天成の一切の美質を棄てて熱烈な自我的な肉的の愛を捧げてゐるのを思ふと堪らなかつた。自分の姉があんな男の、頭はてらてらに禿げてゐる癖に顏にはもぢやもぢやと

鬚の多い獨り好がりの自惚の强いあんな男の女房であるのか、と思ふ度毎に彼は腹が立つて仕方がなかつた。二人の仲の子供に對しても彼は嫌惡の感を抑へてゐる事は出來なかつた、そして姉の姙娠を聞く度毎に彼は姉を憐れんだ、自分達とは精神的にまるで緣の無いそんな男の醜惡に、自分の姉が又もや傳染したかのやうに感ずるのであつた。

姉夫婦の間には男の子と女の子と一人宛あつたが、今度は夫婦きりでやつて來たのである。夫婦は一等旅館の上等室に陣取つた。そして着くと直ぐナタリエは母の昔の棲家へと馬車を走らして行つたが、弟が今は其家に居ないで何處かに間借りをしてゐるとアグラフェナに聞くと、又其處へ行つた。一種の臭氣が罩めてゐて晝間もランプの點いてゐる暗い廊下を向うからやつて來た薄汚い一人の下男は、公爵は御不在ですと彼女に敎へた。

ナタリエは手紙を書いて置き度いから弟の室に入つてみると云ふと、下男は其處へ案內した。

弟の借りてゐる小さい二つの室に入つてみた彼女は、よく氣をつけて一切を見た。すべてが淸潔にきちんと片付いてゐるのには彼女の知つてゐる弟の氣象がよく出てゐたが、思ひかけなかつた一體の質素さには彼女は愕いた。卓の上には彼女がよく見覺えてゐる靑銅製の犬のついた文鎭があり、書類挾みや書類や文具入や書籍など皆行儀よく置かれてあつた。書籍

の中には刑罰に關するものが一冊、ヘンリイ・ヂ・オヂの著作の或る英國版のものが一冊、それから佛蘭西版のタルドの著述などがあつたが、タルドの著書の間には彼女によく見覺えのある象牙の紙切りが挾んであつた。

彼女は卓に就いて、今日中に、是非旅館に訪ねて來て呉れといふ弟宛の簡單な手紙を書いた。そして見た物一切に就いて訝りながら頭を打振つて其處を出て旅館へ歸つた。

ナタリエが今弟に關して頭を使つてゐるのは二つの事柄で、彼がカテュウシヤと結婚するといふ事が其一つであり、それは彼女の町でも噂されてゐるので彼女の耳にも入つてゐた。それと今一つは土地を百姓等に分けてやる事であつたが、それも直ぐ世間に知れ渡つて一部の人からは政治的に危險なやり方だと云はれてゐた。彼がカテュウシヤと結婚するといふ事は、一面に於ては彼女は悦び、さういふ決心をしてこそ弟の弟たる所以であると思ひ、又さう思へる自分をも愉快に感じたが、又他の一面に於ては、そんな女と弟が結婚するのかと思ふと怖れ氣遣はずにはゐられなかつた。そして悦ぶ心よりも怖れる心が強かつたので、彼の其決心を翻さす可く彼女は出來るだけ說き伏せてみようと思つた、その辯到底說き伏せる事は出來ないと思つてゐた。

土地を百姓にやる事は彼女にはさまで氣にはかゝらなかつた。しかし彼女の良人がそれを非常に忌々しがり、是非弟に云ひ聞かせて、そんな事はやめさせるようにと女房に云ひつけた。そんなやり方は輕佻と云はうか傲慢と云はうか、實に言語道斷な馬鹿げた事である、强ひて其辯明をするとすれば、自分を吹聽し度いから、世間に偉いと云はれ度いからとなるだけではないか、と良人イグナティイ・ニキイフォロキッチュは云つたのである。

『土地を百姓にやつて、其地代を百姓共の一般の費用として出させるんだと？　それに何の意義があるんだ。』と彼は罵つたのである。『どうしてもそんな事をしたいと云ふんなら、農事銀行に托して賣りでもすればいゝぢやないか、それならまだ幾らかいゝ。そんな無茶な事をして何になるんだ。まるで氣違ひのやり方だ。』さう云つて彼はネクリュウドフに早速後見人を定めなければならないと思つた。そして女房をして手嚴しく其事を云はせる事にした。

三〇

ネクリュウドフは宿に歸つて、卓の上に姉の手紙の置いてあるのを見ると、直ぐ又馬車を姉夫婦の旅館へと走らせた。はや夕方であつた。良人のラゴシンスキイは次の室に睡つてゐて、姉一人であつた。彼女は黑い絹の服を着て胸には赤いリボンを飾り、黑い髮はハイカラに縮らしてゐた。それは如何にも良人の爲めに若作りをしてゐるのらしかつた。弟の姿を見

るやソファより飛び上り、衣擦れの音さらさらと急ぎ足に出て迎へた。姉と弟は接吻をしてにこにこして顔を見合つた。そこには一種不可思議な、言葉で表はせない意味深長な、ただもう一切眞實な目と目の交感がつあた。それから直ぐ言葉が交へられたが、さうなると最早その眞實は失はれてゐるのであつた。二人は母の死後今迄絶えて逢はなかつたのである。

『姉さんは肥えましたね、そして若々しくなりましたよ。』

姉は滿足さうに脣に微笑を浮べた。

『ドゥミトリイは痩せたわ。』

『ラゴシンスキイさんは何處に行つたんです？』

『休んでゐますの。昨夜眠らなかつたのでね。』

爰で二人共尙ほ云ふ可き事があつた、併し言葉は交されないで、たゞ目と目が互に話をし合つた、云はねばならない事はまだ云つてゐないと双方から話し合つてゐるのであつた。

『私ドゥミトリイさんを訪ねたわ。』

『あ、さうでしたね。私越したんです。あの家は私には餘り寂しくつてね、宏大過ぎてさ、そして餘り退屈だもんですから。私はあの家は要りません、姉さん何でも皆取つて下さつていいんです、家具調度何でも一切。』

『アグラフェナに私もさう聞きましたわ。そのお心は有り難う、だけど……。』

その時旅館の給仕人は、銀の茶道具を持つて來た。二人は給仕が居る間は言葉を途切らしたが。姉は卓の向うの臂掛椅子に行つて、默つて茶をついだ。ネクリュウドフも何とも云はなかつた。

『あのね、ドゥミトリイさん、何もかも私知つてるわ。』と姉は決心して口を切つた、そして弟の顏を見た。

『ぢやあ私も嬉しいんです、姉さんが一切知つてて呉れるんなら。』

『あなたあの人を良くならせる見込みがあると思つて？　あんな過去を持つてる人をさ？』

彼は少しも寄りかゝつたりせずに端然と腰かけて、姉の言葉を十分よく理解むべく而して正しく答ふべく注意を拂つた。つい先程マスロオワを訪ねて受けた心持が今もまだ續いてゐて、彼の心は靜肅な喜悅と暖かな人間愛とに充たされてゐた。

『あの女を良くするのぢやありません、私自身を良くしたいのです。』

ナタリエは溜息をついた。

『それなら結婚をしなくても、外に何とか方法がありさうなもんぢやないの。』

『私は結婚するのが一等いゝと思つてゐます。さうすると又私は平和な世界に入る事が出來

て、そこで意義ある生を營む事が出來るのです。』
『私はそれでドゥミトリイさんが幸福になれるとは思はないわ。』
『爰では私の一身上の幸福が問題ではないんですから。』
『そりやさうでせうさ。だけど事情が事情なんだから、あの女にも感じといふものがある以上は、それで幸福にはなれませんわ、それに又向うでは、結婚をしたいとは思はないでせうよ。』
『さうです、あの女は厭だと云ふんです。』
『さうでせうとも。だから世の中を渡つて行くには……。』
『世を渡るには何うですつて？』
『それより別な事をしなけりやならないでせう。』
『正當な義務より外の事をしてはいけませんよ。』と云つてネクリュウドフは姉の顏を見た。
姉の顏は今も矢張り美しくはあつたが、目や口の邊りには小皺が見えてゐた。
『私にはドゥミトリイさんの心が分らない。』と云つて彼女は溜息を洩らした。
『氣の毒な姉だなあ、何といふ變り方をしてゐるのだらう。』とネクリュウドフは思つて、結婚しない前の姉の事を心に浮べてみた。そして子供の時の盡きない思出を辿りながら、しみ

じみと傷ましい懷かしさを覺えた。
その時ラゴシンスキイが次の室から入つて來た。てらてらに禿げた頭を上げ胸を突き出し、髭の黑い顏に眼鏡をかけて、少し笑ひ乍ら綏りとネクリュウドフの傍へやつて來た。
『やあ、御機嫌よろしう。』と彼は親しげな調子を强ひて作つて挨拶をした、その不自然さは彼自身も知つてゐるのである。
彼は結婚後直ぐ義弟にも極く打解けた親しい言葉遣ひをしようと努めたが、それが出來ないで今も「御機嫌よう。」と簡單には云へず、「御機嫌よろしう。」と云つたのである。
二人は握手を交へてから、姉聟は傍の椅子に身輕に腰を下ろした。
『何かお話の邪魔にはなりませんかね。』
『いえ。私は云ふ事も爲る事も、誰にも隱しはしませんよ。』
姉聟の顏を見、その毛深い手を見、その獨りよがりな下卑する積りらしい語調を耳にすると、ネクリュウドフの軟かい心持は直ぐ消えてしまつた。
『丁度ね、弟の計畫に就いて話してゐたところですの。』と云つてナタリエは急須を取り、『注ぎませうか？』
『注いでお呉れ。どんな計畫の話かな？』

『囚人の一團と一緒に私が西比利亞へ行く事なんです。その一團の中にゐる一人の女に私は責任が非常にあるものですからね。』とネクリュウドフははつきりした調子で云つた。

『私も聞いてゐます、たゞ西比利亞へ從いて行くだけでなく、もつと何かあなたに計畫があるとも聞いてゐます。』

『ありますとも、女が同意さへするなら結婚したいと思つてゐるんです。』

『おやおや、矢張り本當なんですか。それではあなたが不愉快でなかつたら、どうか其決心の動機を話して聞かして呉れませんか。私にはどうも……。』

『私の動機は外ではありません、つまりあの女が……あの女が墮落した元は……。』ネクリュウドフは自分の思ふまゝを云ひ現はす適當な言葉の見出せないのをもどかしがり乍ら、『私に罪があるからです、それだのにあの女が罰を受ける事になつたからです。』

『女に罰が科せられたのなら、どうも其女に罪がないとは思はれませんね。』

『いや、全く罪がないのです。』

そしてネクリュウドフは餘計な昂奮をして仔細を殘らず話した。

『なる程、さうするとそれは裁判長の手落ちです、同時に又陪審員一同の不注意ですね。併しさういふ事のために元老院があるぢやありませんか。』

『元老院で此の控訴は棄却されたのです。』

『ぢやあ何でせう、元老院で棄却されたのなら、それぢやあ控訴の理由が薄弱だつたのでせう。』と云つたラゴシンスキイは、立證する事の出來るものでなくては眞實と云へないといふ普通周知の意見のみを飽く迄も固執してゐるらしかつた。『元老院は事件の内部に立入つて再審する事は出來ません。だから實際原裁判の過失があるのなら、陛下に愁訴狀を出さなくちやなりませんね。』

『それも出してゐます、併し其効果もなささうです。愁訴狀を出したから、司法部への御下問といふ事にはなるでせう、すると司法部はそれを元老院に質すでせう、そして元老院は又其判決した通りを繰返すでせう、そして無罪の者が當然のやうに罰を受けるんです。』

『いや、さうでない。第一に司法部は元老院に質しはしないでせう。』とラゴシンスキイは卑下したやうな微笑を洩しながら、『原裁判の一件書類を取り寄せるのでせう、そして實際過失を發見するならば、司法部は司法部としての意見によつて判決を與へるでせう。それから無罪の者は決して罰せられはしません、少くともそれは極く少い例外です。罰せられる者は皆罪のある者のみです。』とラゴシンスキイは獨り好がりな微笑を浮べて鷹揚に云つた。

『けれども私は其正反對を信じます。』ネクリュウドフは姉婿に對して次第に嫌惡の情を募ら

せながらさう云つた。『裁判によつて有罪の判決を受ける者の過半數は無罪です、私はさう信じてゐます。』

『どうしてそんな事がありませう。』

『無罪なのです、全く言葉通りに無罪です、毒殺の罪に落ちたあの女も無罪、それから先日私が知つた殺人犯の百姓も無罪、放火犯の嫌疑を受けたあの母子の者も無罪、あれは家主自身が火を放けたのです、それだのに無罪な母子二人が有罪な判決を受けて、將に其刑の宣告を受けようとしてゐたのです。』

『なるほどね、裁判の過失もあつたでせう、又今後とても無いとは云へません。人間の設けた制度に完全は望まれませんからね。』

『それから又、罪と思はないで爲た事によつて罪に落されてゐる者が非常な多數です、さういふ連中は其生ひ立つた社會が彼等のしたやうな事を罪と見てはゐないんです。』

『いや、それはあなたの云ふのが誤つてゐる。どんな盗賊でも盗むのが悪い事は知つてゐる、盗んではならない、盗むと罰を受けるといふ事は知つてゐるんです。』とラゴシンスキイは獨りよがりな靜かな併し高慢ちきな微笑を浮べてさう云つた。その調子はネクリュウドフを殊に激させた。

『いや、そんな事は知らないでゐるんです。お前は盗みをしてはいけないと他人は彼等に云ふんですが、彼等は自分達の勞働の結果を工場主だの資本家だのと云ふ者共が盗んでゐるのを知つてゐるんです、やらねばならない報酬を十分にはやらないで、即ち盗んでゐるのを現に目撃してゐるんです、又官吏だの役人だのといふ連中が絶えず盗みをしてゐる事を知つてゐるんです。』

『それぢやあもう無政府主義といふものです。』とラゴシンスキイは落着き拂つて云つた。

『無政府主義だか何だか知らないが、私は實際がさうである事を云つておきます。彼等は自分達の正當に受くべき物を役人どもに盗まれてゐる事を知つてゐます。我々地主といふ者が共同の財産である可き筈の地面を私有してゐる事を彼等は知つてゐます、そして其地面で竈に焚く薪を拾へば我々の爲めに監獄に打ち込まれ、そして貴樣は泥棒だと云はれる事を彼等は知つてゐます。』

『さういふあなたの考は、私には理解が出來ない、よし理解が出來るとしても私は贊成しない。土地は個人の所有であつてよろしいのです。今日あなたが土地を分配するとすれば、』

とのネクリュウドフといふ男は社會主義者だな、社會主義は土地を平等に分配しろと教へるが、そんな分配ほど馬鹿げたものがあるものか、そんな考なら自分が今直ぐ何の雜作もなく

拂ひ除けてみせる、とさう信じきつてラゴシンスキイは靜かに云ひ續けるのであつた。『あなたが今日等分してやるならば、はや明日は不等分になるでせう、働き方の上手な者と精を出す者が多く取るやうになるんですからね。』

『誰も土地を等分してやらうとは考へて居りません。土地は誰の所有ともすべきものではありません、又賣買したり貸付けたりすべきものでもありません。』

『所有權は人間に附與されてゐますよ。所有權がないならば誰も土地を耕作する氣にならない筈です。所有權が否定されるなら、我々は原始的な野蠻時代に逆戻りするわけですからね。』とラゴシンスキイは敎へ諭すやうな調子で云つた。

『正反對です、土地私有權が否定されてこそ、現在のやうな土地の荒廢を救ふ事が出來るのです。』

『まあお聞きなさい、ドゥミトリイさん、それはまるで無茶苦茶極まる話です。實際土地所有を現代に於て否定する事が出來ますか。あなたの云ふのはあなたの昔からお馴染の題目だといふ事は私も知つてゐます、併し私は有態に云ふが……』さう云つてラゴシンスキイは顏色が靑くなつた、聲も慄へた、この問題が彼には如何にも容易ならぬ事に思はれるらしかつたのである。『私はあなたに忠告をする、あなたが實際に土地の處理をする前に、十分この問題は考へなくてはいけません。』

『あなたは私の一個人としての仕事に口をお出しになるのですか。』

『さうです。我々にはそれぞれの地位があつて、その地位に必然附いてゐる義務を行はなくてはなりません、我々は我々の生れた身分を保護しなくてはなりません、そしてそれは親から讓られたもので、又子孫に傳へなければならないのです、私はさう考へてゐるのです。』

『私の考へてゐる私の義務は……。』

『まあ、お待ちなさい、私が云つてゐます。』とラゴシンスキイは中途に言葉を他が挾む事を許さないで云ひ繼いだ、『私は私一身や私の子供の爲めに云つてゐるのぢやありません。私の子供達の爲めの財産はちやんと安全に出來てゐます、そして私は自分や子供が心配なしに食つて行くだけの收入は、樂に勤めて得る事が出來ます。だからあなたの共の無分別なやり方に私が抗議をするのは、決して個人としての利害問題からではありません、私は主義としてあなたに贊成が出來ない、そしてあなたに勸める、もつと十分に考へるがいゝでせう、本も澤山讀んでみるがいゝでせう……。』

『私の仕事は私自身に委せて置いて貰はなければなりません、又私に何が出來ようと出來まいと、それも私の一存です。』とネクリュウドフも顏色を靑くして云つた。自分を制してゐる

事が出來なくなり、手が冷くなつたのを覺えた、それで彼は默つて茶を飲んだ。

三一

『子供達は何うしてゐます？』ネクリュウドフは少し氣を鎭めてから、姉にさう尋ねた。

姉は良人とネクリュウドフの爭論の止んだのを非常に悅んで、祖母の許に預けて來た子供達が、丁度ネクリュウドフが子供の時に三つの人形に二つを黑奴とし一つを佛蘭西の女と名づけたりして遊んだやうに、「旅行」の遊びなどして睦しくしてゐる模樣を話した。

『私の子供の時の事をよく姉さんは覺えてゐますね。』と云つてネクリュウドフは微笑した。

『そりやね、丁度ドゥミトリイさんみたいにして遊んでるのよ。』

不愉快な爭論が止んだのでナタリエは安心したが、自分と弟だけに分るやうな話は、良人の居る今の場では避けようと思つた。そして一般に知れわたつた世間話にする爲めに、彼得斯堡の最近の出來事を引張つて來た、そして例の一人息子を失くなしたカアメンスカイヤの悲みを話し出した。

ラゴシンスキイは其決鬪で一方が他方を殺して刑事上の犯罪とされないのが不服で、その事を頻りと非難した。

するとそれはネクリュウドフの反對を招いて、そこに又論爭がおつ始まつた。併し今は双方とも其論題に就いては思ふ事を十分に云はず、隨つて又相互に理解する事なしに、頑固に各自の意見を持してゐるのであつた。

ラゴシンスキイは自分がネクリュウドフに安つぽく評價され、自分の職務一切を輕蔑されてゐるのを感じたので、ネクリュウドフの考の誤つてゐる所以を證據立ててやり度く思つた。ネクリュウドフは又自分の土地分與に容喙された腹立たしさから云ふのではなかつたが、自分の遺產相續人たる權利を姉や姉聟が、其子供等の爲めに持つてゐる事をも內心思はないわけには行かなかつた。併し意識的に彼が苦々しく思つたのは、自分が全く愚劣極まる事と思つてゐる事を偏屈な姉聟が正理だ合法だと說いて、加之平靜な得々たる態度を取つてそれを固執してゐる事であつた。その平靜な悠々たる態度がネクリュウドフには何よりも癪に觸つて仕方がなかつたのである。

『裁判所がそれを何うすればいゝ筈なんです。』とネクリュウドフは尋ねた。

『決鬪で殺した方を、當り前の殺人犯として懲役の判決を下さなくちやなりませんのですがね。』

ネクリュウドフは再び兩手の冷くなるのを覺え、激しく云つた。『そんな事して何になると

いふんです。』
『正義を保つ事になるんです。』
『ふん、すると正義を保たせる事が裁判所の仕事の目的でもあるかのやうですね。』
『さうですとも、其外に何の目的がありませう。』
『實は上流階級の利益保護が共唯一の目的ぢやありませんか。私の觀る所では、裁判所といふものは我々上流社會の者に利益多い制度や習慣を擁護する道具に過ぎないのです。』
『偉い新説ですね。』とラゴシンスキイは靜かに笑つて、『普通はそれと違つて、裁判所の職分は何とかつて云ひますがね。』
『理論の上ではね、併し實際はさうでない事を私は見て居ります。實際はたゞ社會の現狀維持が裁判所の目的ぢやありませんか。一般社會の水平線以上の頭腦を持つて一般の精神生活をもつと向上させようとしてゐる者を迫害し所罰するのも、水平線以下の者を虐げてゐるのも、皆たゞ其目的があるからでありませんか。』
『社會の水平線以上に立つてゐるからそれを裁判所が罰するだなんて、第一に私はそんな考には贊成出來ません。大部分は彼等は社會の屑です、そしてあなたが云ふ水平線以下の典型的犯人と同樣、いや幾らか方法は違ふでせうが、矢張り腐敗した墮落した惡德極まる連中です。』

『私は併し裁判官連中とは比較にならない位ゐ立派な人物を彼等の中には知つてゐます。』
ラゴシンスキイは自分が口を利いてゐる間は決して、誰にも容喙を許さないと云つたかのやうな調子で、それでネクリュウドフをひどく激させながら、彼には無頓着な樣子で云ひ續けた。
『それから又第二には、社會の現狀維持が裁判所の目的だといふお説にも私は贊成出來ません。裁判所はそんな事とは違つた目的を追うて進んで行きつゝあるのです、その目的は卽ち一面に於ては社會の改良であり……、』
『監獄内のあの立派な結構なお目出度い改良ですかね。』とネクリュウドフは嘴を入れたが、ラゴシンスキイは相變らず調子を强めて云ひ續けた。
『他の一面に於ては社會の存立を危くするところの惡德無賴な、野獸のやうな人間の害を防ぐ事なんです。』
『それこそ裁判所がしないで居る事實ぢやありませんか、社會改良も危險人物の監視も兩方ともさ。今の社會には其二つともする方法がないんです。』
『何ですと？　私には分りませんね、其方法といふと？』とラゴシンスキイは强ひて笑つて

尋ねた。

『それは一體はたゞ二種の合理的な刑罰があるきりだと云ふ事なんです、それは古代に行はれてゐた通り體刑です、それから死刑です。ところが人間の道義心が次第に弱くなつた爲めにそれは流行らなくなつたのです。』

『それは何うも斬新な説ですね、そんな説をあなたの口から聞かうとは實に意外だ。』

『人間に苦痛を與へて、そんな苦痛を受けるやうな事を決して再びしないやうにしてやるのは、これは道理の分つたやり方ですからね。又社會に害毒を流すやうな人間は、その頭をちよん切つてしまふ方が、これが餘つぽど分別のあるやり方です。この二つの刑罰は立派な合理的な意義がある事なんです。それをさうはしないで、懶惰と惡習のために始末に了へなくなつた人間を監獄に打ち込んで、尙更無理矢理に懶惰の中に浸し、一層始末に了へない連中の中に置いて、それが何の意義があるんです。さうかと思ふと、何か罪を犯したからと云つて、トゥウラから西比利亞のイルクウト・スクに送る、犯人一名につき政府から五百ルウブルもかけて送りやる、或はクウルスクから……。』

『併し彼等はこの官費旅行を怖れてゐます。そして又斯ういふ刑罰や監獄といふものがないならば、我々は今爰に斯うして安穩にしてはゐられないのです。』

『あんな監獄なんぞは我々の安穩を支持して居る事は出來ませんよ、何故つてあの中に閉ぢ込められてゐる連中も決して永久に閉ぢ込められてゐるんでなく、一定の時期が經過すれば放免されるのですからね。安穩を支持するどころですか、あんな處に入れられて益々始末に了へなくなるんです、それは即ち社會を一層危險にする事なんです。』

『してみると、あなたは刑罰の制度を改良しなければならないと云ふのですね？』

『改良が出來るものですか。監獄を改良するには學校教育に要する費用よりもずつと澤山の費用が要るでせう、さうなれば國民はなほ一層負擔の重きに苦しまなくてはならなくなります。』

『併し刑罰の制度に不備の點があるにしても、その爲めに裁判所の仕事其物をやめさせる事は出來ません。』と、ラゴシンスキイは又ネクリュウドフの言葉に耳を傾けない態度で云ふのであつた。

『その不備の點は少しも除かれはしないんです。』とネクリュウドフは聲を一段と張り上げて云つた。

『それでは何うすればよいといふのです？　罪人は皆殺して了へばよいといふのですか、それとも嘗て或る政治家が云つた通り、彼等の目を瞑してやるがいゝといふのですか。』とラ

ゴシンスキイは勝誇つた微笑を浮べて云つた。
『さうですとも。さうするのは慘酷ではあるが目的に應つてゐます。今のやり方は慘酷な上に目的に背いてゐるんです。』
『さうかも知れんが、私は今のやり方に從つて勤めて行くんです。』とラゴシンスキイは顏を青くした。
『それはあなたの御勝手です。併し私には分らない。』
『あなたが分らないでゐることは、まだまだ澤ある。』とラゴシンスキイは聲を慄はした。
『私が裁判所で見た事ですが、普通な人間らしい心を持つた者には誰にも同情に値する不仕合せな或る若者を、檢事は力を極めて罪に陷さうとしました……。』
『私はさう思つたら職はやめる。』と云つてラゴシンスキイは立上つた。
ネクリュウドフは姉聟の眼鏡の內側に、何やらひかひかするものあるのを見た。「涙かしら?」と思つた。果してそれは主我の心を傷けられた涙であつた。ラゴシンスキイは窓際に行き、ハンカティイフを出して、咳をしながら眼鏡を拭き又目を拭いた。それからソファに戻つて來て、葉卷に火を點けたが、それからは何とも云はなかつた。ネクリュウドフは氣の毒になり恥しくも思つた、殊に明日は出發で、以後は再び逢はないだらうと思はれるのに、出發

間際に姉夫婦をやりこめた事とて、何となく濟まないやうにも思ふのであつた。どぎまぎと彼はきまり惡い思をし、暇を告げて馬車を宿の方へ走らせた。
「おれの云つたのが本當でもある、少くとも姉聟はもはや抗辯出來なかつたのだ。けれどもおれもあんな調子で云つたのは良くなかつた。癇癪紛れに姉聟をやりこめ、氣の毒な姉にも厭な思をさせたのだが、それで姉聟を別人にする事は出來ないのだし。」と彼は思つた。

三二

マスロオワの組は明日午後三時發の汽車で送られる事になつたので、その監獄を出るのも見て一緒に停車場に行かうと思つたネクリュウドフは、明日は十二時前に監獄に行つてゐようと思つた。
夜は荷を作つたり書類を纏めたりしたが、その際日記を手に取つて、最近に書いた二三の個所を讀んでみた。彼得斯堡へ發つ前に書いたのは次の通りであつた。
「カテュウシヤはおれの犧牲を受け入れようとしない、却つて自身犧牲にならうとする。彼女は勝利者だ、おれも亦勝利者だ。おれは彼女に心の革命が起つてゐるらしい事を悅ぶ、起つてゐるといふ確信を抱く事を敢てしない。それを敢てするのは僭越だ、怖ろしい。けれども

思つてゐるらしく見える、彼女は新たな生涯に入るらしく見える。」

その次に書いてるのは次の通りであつた。

「おれは彼女が病院で忌はしい事をしたと聞いた。おれは悲痛な思をした、あんなに迄辛からうとは思つてゐなかつた、その位ゐ辛かつた。憎さと忌はしさの思を湧き立たせながらおれは彼女と話をした、併し直ぐ又おれは自分の事を思ひ出した。彼女を今日おれが憎み嫌つたと同じ理由でおれは今迄に幾度謝らねばならなかつたらう、いや今とても心の中で彼女に済まないと思はずにゐられるだらうか。さう思ふとおれは急に自分が忌々しくなつた、そして彼女に對して同情が湧いた。それが何とも云へない嬉しい心持であつた。自分の目に梁のある事をだに直ぐ氣付くならば、我々は尙ほどれほど良い人間である事が出來るか知れないのに！」（梁云々は、他人の目には塵の入つてゐるのにも氣付くが、自分の目には梁が入つてゐても氣付かないといふ、聖書に基く成句。他人のあらは少しでも直ぐ氣付き、自分の缺點は非常に大きくても閑却してゐるの意味。）

今日の日附の部には又、

「ナタリエに會つて來た、そしておれは自分だけの心の滿足で可しとして、彼女に對しては素氣なく振舞つた、のみならず意地悪くさへ振舞つた。思へばそれは重苦しい厭な氣持であつた。しかしもう悔いても遲い、仕方がない。明日からは新しい生涯が始まるのだ。過去の生涯よ、さよなら。永久にさよなら。なほ色々澤山の印象をおれは受けた、けれどもまだ其總括的意味を見出し得ないでゐる。」

翌朝目が覺めて最初のネクリュウドフの感じは、昨日姉聟と衝突した後悔であつた。「この儘で出發するわけには行かない。行つて仲直りをして來よう。」と思つた。

けれども時計をちらと一目見ると、もうそんな事をしてゐられる時間はなかつた、囚人の組が監獄を出るのに間に合ふためには急がなければならなくなつてゐた。それでネクリュウドフは急いで身支度をして、女房に從いて一緒に西比利亞へ行くフェドッシアの夫のタラスと門番とに荷を持たせて先きに停車場にやり、自分は家を出て見付かり次第に直ぐ馬車を雇うて監獄へ走らせた。囚徒の乘る汽車はネクリュウドフの乘るのより二時間だけ早く出るのだが、彼は又戻らなくて好いやうに宿屋に勘定はとくに拂つておいた。

* * * * *

窒息させるやうな七月の暑さであつた。昨夜の蒸暑さで冷めきらずにゐる往來の鋪石や家家の石材や鐵の屋根などは、そよとも動かない暑い空氣に尙ほ暑さを添へた。印ばかりの風がちよいと動いても、それもチャンやペンキの惡臭のある埃混りの熱い風に過ぎなかつた。

往來を行く人の數も少く、行く者は皆家々の蔭を選んで歩いた。たゞ木皮の靴を穿いた鋪石工事の人足どもは強く照りつける日に顔も黑くなつて、車道の眞中の焦げた砂に切石を小さい槌で叩き込んでゐた。粗布の服を着た顰め面の巡査等は、橙色の革紐に短銃を吊して町の角々に所在なげに立つて居り、日の射す方に幕を下ろした軌道馬車は、鈴を鳴らして行つたり來たりした。

ネクリュウドフが監獄の前に來た時は、囚徒連はまだ門の外に出てはゐなかつた。囚徒受け渡しの手續きが監獄の內部で朝の四時から始まつて、まだ終らないのであつた。護送される組は六百二十三人の男囚と六十四人の女囚で、皆一々帳簿に引合はされ、病人や虛弱者は別に取り除けられ、餘は護送兵に引渡されるのであつた。新任の典獄と副典獄二人と、醫者、看護長、護送兵の士官、書記が各一人、日の射さない塀の內側に据ゑた卓に就いて、囚徒を一人宛次々に呼出して調べたり、問ひ質したり書きつけたりしてゐた。卓の上には書類やペンや鉛筆が載せてあつた。

その卓もはや半分は日の光に曝されて、暑さに一層强くなり、塀の內一ぱいに集つてゐる囚徒連の吐く息も、風の無い空中に尙ほと惱ましさうであつた。

『まだお終ひにならないのかなあ。』肩の聳えた手の短い赤ら顏の丈高い肥大つた護送士官は絕えず莫を吹かし乍ら髭の下からさう呻り出した。『おれはもう疲れてぐつたりした。來るわ、來るわ、次から次と。まだ大勢あるのかしら。』

書記は帳簿を繰つて數へてみた。

『まだ男が二十四人に、それから女囚です。』

『おい、何を愚圖々々してるんだ。早速とやつて來い。』と囚徒の一群を見張つてゐた一人の士官は、まだ調べの濟まない囚徒の群に向つて怒鳴つた。囚徒連はもう三時間以上、蔭にも入れられずに日に曝されて、順番の來るのを立ちながら待つてゐるのであつた。

そんな事は皆監獄の門の內での事で、門の外には例の通り銃を擔いだ番兵が立つて居り、それから囚徒の荷物や虛弱な囚徒を載せて行く爲めの荷馬車が二十四臺並んでゐた。一隅には囚徒連の親戚やら友達やらが名殘を惜みに來て集つてゐた、折よくば今一度話もしたく、又何か品物をやり度いと思つてゐるのもあつて、皆其處で門から出て來るのを待つてゐるのであつた。ネクリュウドフも其群に加はつた。

一時間餘りも彼が其處に立つてゐてから、やつと門の內側に鎖の音や近づいて來る足音や號令の聲などが聞えた。それは五分餘りも續いたが、其間看守は門を出たり入つたりしてゐた。それから又號令の聲が響いた。

高い音がして正門の大きい扉が開かれた。鎖の音が尚ほ近く聞えた。それから白服の護送兵の一隊が銃を肩にして出て來た。そして門の前に規定の例に從つて大きい半圓の形に整列した。すると又號令が響いて、囚徒は二人づゝ並んで門を出た。皆頭は半分だけ剃られて其上にパン菓子の形をした帽子を被り、肩からは袋をかけてゐた。片方の手では其袋を押へ、空いた方は自由に打振り乍ら、鎖の嵌つた足を重さうに引摺つた。最初は懲役徒刑の男囚の群で、皆鼠色のズボンを穿いた上に、背に印を縫ひつけた揃の長い獄衣を着て、老いも若いも痩せたのも肥つたのも、顏色の青白いのも赤いのも黑いのも髭のあるのも無いのも、露西亞人も韃靼人も猶太人も、皆鎖をぢやらぢやら鳴らし空いた手を打振つて、さもこれから遠征の途にでも就くかのやうな恰好で出て來た。けれども十歩許りで立止り、四人づゝの列を作つた。其後からは矢張り頭を半分だけ剃られた男囚が續いて出て來たが、それは足でなく手に鎖を嵌められた組で、服は同じだが移住刑の宣告を受けた連中であつた。彼等も景氣よく出て來てから、程なく止つて四人づゝの列を作つた。それから女囚の番になり、その最初は鼠色の獄衣を着て頭に布をかけた懲役徒刑の組で、其次が移住刑の女囚であつた。最後に出て來たのは自分から申出て西比利亞へ同行する連中で、服裝は思ひ思ひに田舍風にしてるのもあれば町の風にしてるのもあつた。中には獄衣の胸に乳飲兒を抱いてゐるのもあつた。

女どもの間には男の子や女の子が、親馬の間を悅んで走り廻る牧場の小馬のやうに、嘻々として跳び廻つた。男囚は皆默つて立つてゐた、咳拂ひでもするか又は簡單に何か囁く位ゐのものであつた。女の群は併し絕えずぺちやぺちやぺちや喋つてゐた。

ネクリュウドフはカテュウシヤを見かけた積りであつたが、直ぐ又見失つてしまつた。そして人間の形をしてゐるとか女の姿をしてゐるとか云ふよりも、寧ろたゞ子供を連れて袋をさげた鈍色の一團が、男囚の後ろに並んだやうに彼には見えた。

囚人の數は監獄の塀の內で既に算へてあつたにも拘らず、護送の兵等は又それを算へて、その結果を前の數と引合せるのであつた。併しそれは囚人が彼方へ行つたり此方へ來たりするのもあつて、算へ違ひ許り出來るので、仲々手間がとれた。そんなに靜かにしてゐない囚人等を兵等は罵つたり叱つたり、憎々しげに小突いたりして、又算へ直した。その算へ直しが終つて數が合ふと、護送の士官は又號令をかけた。すると一同は又動搖めき出した。虛弱な男囚や女子供は馬車の方へ走つて行つて、自分達の持つてゐる袋を成るたけ便利のよい所に載せ、それから自分達も乘るのであつた。泣き叫ぶ乳飲兒を抱いた女等も乘り、悅びはしやぐ子供等も席を爭つて乘り、窶れ弱つた男囚も顏を曇らしながら乘つた。

士官の前に行つて帽子を脫いで何やら願つてゐる男囚が二三人あつた。ネクリュウドフが

後で聞くと、それは荷馬車に自分達も載せて貰ひ度いと願つてゐるのであつた。士官は囚徒等の言葉に耳を假さず、默つて莫の煙を吸ひ込んでから、列より少し進み出て願つてゐる其囚人を打たうとした。さうではないかと思つてゐたらしい其囚人は、剃られた頭をぴよいと竦込めて直ぐ列中へ逃げ戻つた。

『よく覺えて居るやうにしてやるぞ。歩いて行せる事た。』と士官は怒鳴つた。

足に鎖を嵌められた丈のひよろ高いよろよろの老人一人は荷馬車に乘る事を許された。ネクリュウドフが見てゐると、其老人はパン菓子形の帽子を脱いで空に十字を切り、それから荷馬車の傍に行つたが、鎖が重いので老い衰へた足を擧げかねて、なかなか乘る事が出來ずにゐた。すると前に乘つてゐた一人の女が上から老人の手を引いて、やつと引上げてやつた。

どの荷馬車にも袋が積まれ、その上に許可を得た者だけが皆乘ると、士官は帽子を脱いで額から禿げた頭から、扨ては太つた赤い首筋の邊りを上等のハンカチイフで拭き、空に十字を切つて、それから號令をかけた。

『進めっ！』

兵士等は銃を肩に擔ひ、囚徒等は帽を脱いで十字を切つた。親戚や知合ひの見送人等は囚徒等に高い聲で別れを惜み、囚徒等は又それに答へた。女達の中には泣き叫ぶものもあつた。

そして兵士等に四方を護衛された囚徒の一團は、足の鎖で埃を盛に立てながら出發した。先頭は數名の兵で、次に足に鎖を嵌めた一群が四人づゝの列をなして歩み、それから手に鎖を嵌めた移住刑の群、その次は自分から申出て從いて行く一群、それから女囚といふ順で練つて行つた。袋や病弱者を乘せた荷馬車は最後に續いた。その馬車の一つに乘つてゐた或る女は、顔を深く包んで隠してゐたが、絶えず切りに泣き悲しんで叫んでゐた。

三三

囚徒の列は非常に長く、袋や病弱者を載せた荷馬車が動き出した時は、はや先頭は見えなくなつてゐた。荷馬車が皆出發してからネクリュウドフは待たして置いた馬車に乘り、列を追ひ越すやうに馭者に云ひつけた。囚徒等の中に知つた顔を見ようと思ひ、又女囚の中にカテュウシャを探し當てて、送り屆けた品物を受取つたかを聞かうと思つたのである。

暑さは一層烈しくなつて、風はそよとも吹かなかつたが、通りの眞中を行く一行の蹴立てる埃は雲のやうに立上つた。囚徒の足は隨分速いので、ネクリュウドフの馬車は少しづゝしか追ひつかなかつた。列を順々に次から次と獵つたのであるが、どの列もどの列も皆何だか見慣れない怖ろしい顔ばかりであつた。千にも餘る同じ出立ちの足が調子を揃へて歩んで行

くのであつた。手なりと自由に動かして元氣をつけようと思ふかのやうに、皆空いた方の手を打振つてゐた。大勢の事とて誰も彼も皆同じやうに見えた、そして人間といふよりも寧ろ何だか怖ろしい怪物のやうにネクリュウドフには思はれたが、その印象はたゞ懲役徒刑囚の中に殺人犯のフェドオロッフを見、移住刑囚の中に滑稽家のオホオティンを、それから尙ほ自分に救ひを求めた一人の浮浪囚徒を見たので漸く薄れた。囚徒は皆自分達を追越す馬車の方へ振返つて、内に乘つてゐる紳士のネクリュウドフを見た。フェドオロッフは頭を一寸さげて彼を見たといふ合圖をし、オホオティンは目でちらと挨拶をしたが、話を交へたりする事は出來ないと思つてゐるので、共に何とも云ひはしなかつた。

ネクリュウドフは女囚の列に追付いた時、すぐカテュウシヤを見付けた。彼女は二番目の女囚の列であつた。端に行つてるのは足の短い目の黑い赤ら顏の醜い「めかし屋」で、獄衣の帶の下を端折つてゐた。その次が姙娠の女で、それからカテュウシヤであつた。姙娠の女は歩むのが如何にも大儀さうで、辛うじて足を引擦つてゐた。カテュウシヤは袋を肩から吊して、たゞ前の方を眞直ぐに見てゐたが、その顏には決心と平靜の色が出てゐた。同じ列の四人目は短い上衣を着た若い美しい女で、頭にかける布を百姓流に卷きつけて、元氣よく歩いてゐた、それはフェドッシアであつた。

ネクリュウドフは馬車から下りて、カテュウシヤに賄り物の屆いたかを尋ね又彼女の心持をも尋ね度いと思つて、女の方へ進んで行つた。けれども列の其側を行つてゐた護送兵中の下士がそれを見ると、直ぐ走つて寄つて來て、

『もし、もし、列に近く寄つてはいけません。』と怒鳴つた。（卷末譯者の注意を參照せよ）

近くやつて來てそれがネクリュウドフであつた事を知ると、ネクリュウドフなら監獄で誰にも知られてゐるので、下士は立止つて擧手注目の禮をした。

『今此處ではどうも困ります、禁じてありますから。停車場でなら多分い〻でせう、ですから。』それから女囚の方に向いて、『停つちやいかん、進め。』と叱りつけ、そして新しい上等の深靴で此の暑さにもめげず自分の舊の位置に走り戻つた。

ネクリュウドフは歩道に戻つて、馬車には後から從いて來るやうに云ひつけ、そして一行に伴いて歩いた。一行は市民一般の怖れと愕きの注目を惹いた。車で通行する者は車上から振り向いて、見えなくなるまで一行を見やり、歩いて行く者は愕き怖れて立止り、中には近く寄つて來て施し物をするのもあつた。施し物は護衛の兵が受取つてゐた。茫然自失して一行の後に從いて行くのもあつた、けれどもそんな人々は直ぐ又立上つて頭を打振り、暫く目送してゐるのであつた。家々の戸口や、門の前には呼びかけ誘ひ合つて出て來てる者共が立

つて眺め、窓から首を差延べて見やつてゐるのもあつた。

或る曲り角で一行は、立派な一輛の馬車の邪魔をした。馭者臺の上には背中に釦の並んでゐる見事な服裝の馭者が腰をかけ、車内には後ろの方に一人の紳士と明るい色の洋傘を持つて明るい色の帽子を被つた白い痩せた妻君が腰をかけてゐた。紳士はシルクハットを被り、上等の外套を羽織つてゐた。夫婦の者に向合つて腰かけてゐるのは子供達で、飾り立てたブロンドな縮れ髪の娘は花のやうにいきいきとして居り、矢張り同じやうな色の蝙蝠傘をかざしてゐた。娘に並んで腰かけてゐる首の細長い八歳許りの男の子は、長い紐の着いた水平服を着てゐたが、その肩の骨が著しく高く出張つてゐた。

紳士は馭者が囚人の列を巧く切り抜けて向うへ行かなかつたので忌々しげに小言を云ひ、妻君はさも輕蔑するかのやうに顔に皺を寄せて、埃と日光を防ぐ爲めに蝙蝠傘を顔に引寄せた。列を切つて行くやうに明かに云ひ付けたらしい紳士の不當な罵詈を聞きながら、馭者は憤々しつゝも逸る馬を精一杯に引留めた。

其邊に居た一人の巡査は、其立派な馬車の所有者たる紳士に自分の申分なき忠勤振りを見せようと思ひ、馬車を通してやるために囚徒の一行を一寸止めようと思つた。併し一行の陰慘な嚴肅さに、彼は何となくたぢたぢした。如何にも富貴權勢の紳士とは見たのであるが、

その爲めとても此一行の妨げをしてはいけないと彼は思つたのである。それで巡査は已むなく擧手注目の禮だけで目前の富貴權勢に對し敬意を表するに止め、併し如何なる場合にも車上の人々には出來るだけの守護を辭さないと云ふかのやうに、囚徒の一行を屹とした目で睨みやつた。

そんな都合で其立派な馬車は囚徒の一行が、全部立派に行き過ぎるまで待たねばならなかつた、囚徒の荷を積んだ最後の車が行つてしまつてから、やつと紳士の馬車は行けるのであつた。最後の荷馬車の上に乘つてゐたヒステリカルな女は、それ迄に何となく幾らか氣を鎭めてゐたのであるが、その立派な馬車に目がつくと又切りに泣き出した。

上等馬車の馭者は手綱を緩めて輕く馬の頸を打ち、逸物の馬は鋪石の上に蹄の音をかつかつと鳴らして、彈條入りの護謨輪の馬車を其處から田舍の別莊の方へと曳いて行くのであつた。紳士夫婦と二人の子供とは其處へ保養に行くのである。

父も母も子供達に今見た光景の何であるかを云ひ聞かせはしないので、子供二人は各自にそれを判斷しなければならなかつた。

娘は母親の顏色を讀んで判斷した、今見た人達は自分の兩親や知人等とはまるで種類の違つた惡人といふ人間なのだらう、それだからあんな目に逢つてゐるのだ、とさう思つた。そ

してたゞ愕き怖れたが、今ははや離れて見えなくなつたので悅んだ。首の細長い男の子は併し囚徒の一行を傍目もふらずしげしげ見てゐたが、これは違つた考を持つた。誰にも敎へられたのではないが彼は今見た囚徒と自分や親兄弟其他とが全く同じ人間である事を感じた、そしてあんな囚徒などといふ者はひどい目に逢はされてゐるのである、無理なひどい目に逢はされてゐるのである、併し本當はそんな目に逢はせるのはよくないのだ、とさう思つた。彼は囚徒等が可哀さうになつた、そして彼等が鎖を嵌められ髮を半分剃られたりしてゐる淺間しい姿を見て悚然とした、彼等にそんな刑を加へた者を思つて悚然とした。男の子の口元はぴりぴり慄へた、彼は涙を零すまいと思つて我慢した、そんな事で泣くのは恥しいと思つたのである。

三四

ネクリュウドフは初めと同じ速い足で歩いてゐたが、身輕な服裝はしてゐても甚く暑さに惱まされた、殊に埃の立つた蒸暑いいきれが往來一ぱいに罩めてゐるので尙堪らなかつた。一エルストの四分の一程も行つてから彼は又馬車に乘つたが、幌のない車上は却つて一層暑いやうであつた。昨日姉聟と云ひ爭つた事を思出してみようと努めたが、それはもはや朝のやうに彼の心を惹きつけず、寧ろ囚徒一行の出發の光景を見た印象の爲めに、又殊に息の窒るやうな暑さの爲めに何處へか行つてしまつてゐた。とある樹蔭の垣の傍に、學校生徒が二人帽子を脫いで、振れ賣りの氷屋を呼止めて、はや一人は食つて居り、一人は黃色いアイスクリイムを氷屋が盛るのを待つてゐた。

『此邊に何か飲む店はないだらうか。』ネクリュウドフは我慢がしきれなくなつて、馭者にさう尋ねた。

『今直きで好え處が一軒ごぜえます。』と馭者は答へて、或る角を少し曲つて大きい看板のかゝつてゐる店の前に馬車を止めた。

店の大きい臺の彼方には肥太つた亭主が袖口をまくり上げて腰をかけ、なほ白服の汚れたのを着た給仕が二三人客の居ない卓に着いてゐたが、珍らしいお客をじろじろ見て用を伺つた。ネクリュウドフは曹達水を誂へて、汚い卓かけをかけた隅つこの小さい卓に着いた。

茶の道具ヒ透明な壜を一つ載せた別な卓には二人の男が着いて、額の汗を拭きながら何やら親密さうに相談してゐた。その一人は色の黑い禿頭の男で、後頭部の頸に近い所から兩方の耳の邊へかけてだけ黑い髮の殘つてゐるのが、丁度ラゴシンスキイの恰好共儘であつた。それを見たのでネクリュウドフは昨日の爭論を又思出した、そして今一度姉と姉聟に逢つて

行き度いと思つた。だが、さうしてると出發の間に合はない、いつそ手紙で云つてやらうと思つた。

彼は紙と封筒と切手を持つて來て吳れと頼んで、泡立つ新鮮な曹達水を飲み乍ら何う書かうかと考へた。けれどもほんの一寸の思付きつたので、纏つた手紙の文案が浮ばなかつた。

『親愛なナタリエの姉様、私は昨日兄上とあんな云ひ爭ひをして、あの忌々しい印象のまゝで出發する事は出來ません。』

それからどう書かう、昨日云つた事を許して吳れと書かうかしら。併しおれはたゞおれの信ずる通り云つただけではないか。そして許して吳れなんて書いたら、姉聟は屹度おれが後悔したものと思ふだらう……。それに又おれの仕事に餘計な差出口までしたではないか……いや、いや、そんな事が書けるもんか、と彼は思つた。再び彼は自分と全く別な己惚男に對する癇癪が腹の中に湧くのを覺えた。それで未完の手紙をポケットに捻ぢ込み、勘定を拂つて往來に出て、馬車で囚徒の一行を追つた。

暑氣は一層強くなつてゐた。塀や壁や石は熱氣を吐いてゐるかのやうで、足を鋪石の道に付けたら燒け爛れさうに思はれた。ネクリュウドフは手袋を脱いだ手でふと漆塗りの馬車の革具を握つてみたら、燒けた鐵にでも觸つたやうな暑さであつた。

馬は懶さうな單調な跑を打つて、埃だらけの凸凹の多い鋪石道を緩々と走り、馭者はこくりこくりと居眠りばかりした。ネクリュウドフは何を考へるでもなく、ぼかんとしてたゞ向うを眺めてゐた。すると或る曲り角の大きい家の門の前に、一群の民衆と、兵が一人立つてゐた。ネクリュウドフは馬車を止めさせて、其家の門番に尋ねた。

『どうしたんです。』

『囚徒が一人どうかなつたのです。』

ネクリュウドフは馬車を降りて群衆の中へ行つてみた。鼠色の上衣とズボンを着た髭の赤い鼻の低い赭ら顏の肩巾のがつしりと廣い囚徒が一人、鋪石道の車道から歩道へかけて、足より頭を低くしてぐつたりと仰臥けに倒れてゐた。雀斑の澤山ある兩手は掌を下にしてだらりと延ばしてゐた。巖丈なその胸は同じ長い間を隔いてはぴくりぴくりと痙攣り、血走つた目は空を屹と見つめ、苦しさうな息は切なげに洩れてゐた。巡査が一人陰氣さうな顏をして其前に立ち、それから振れ賣りの男、郵便配達夫、商店の手代、蝙蝠傘を持つた年寄女、空籠を抱へた散切髪の男の子などが立つてゐた。

『監獄で散々弱つてるんだもの、そいつをこんな地獄みたいに熱い日中に引張つて連れ出すんだから堪らないや。』と商店の手代は、誰にともなく訴へるやうに斯う云つたが、丁度ネ

クリュウドフが寄つて來たので彼に同意を求めるらしかつた。
『この人死ぬるわ。』と蝙蝠傘を持つた女は泣きさうな聲で云つた。
『肌衣の胸をあけてやらなきやいけねえ。』と郵便配達夫は注意した。
巡査は肥つた指を震はしながら、囚徒の筋張つた赤い首の方から肌衣を拙い手つきで開けにかゝつた。巡査は非常に昂奮してどぎまぎしてゐたが、群衆は叱つておかねばならないと思ふらしかつた。
『どうしてそんなに立つてゐるんだ。たゞでさへ風が無いのに、そんなに取卷いちや暑くて仕様がないぢやないか。』
『弱い者は皆殘しとくやうに、醫者に前以て證明さしとかなきやならないぢやないか。それだのに半分死にかゝつてるやうな囚徒を引ずり出して來るんだもの。』と手代はさも物事に通じてゐるのを自慢するらしく云つた。
巡査は囚徒の肌衣の胸をあけてやつてから身を起し、邊りを見廻はした。
『さ、もう皆去つた去つた。君等のする役目ぢやない。何だつてさう見たがるんだ。』と怒鳴つて巡査は賛成を求むるかのやうにネクリュウドフの顏を見た。けれどもネクリュウドフの賛成らしい視線を惠まれなかつたので、巡査は又同じ視線を護送の兵に向けた。護送兵は巡

査の方へは見向きもせずに、自分の深靴の磨り減つた踵を眺めてゐた。巡査のどぎまぎしてゐるのなどは兵士に取つては全く風馬牛だつたのである。
『しなけりやならない役目の者は、ちつとも何もしないぢやないか。かうして人間を苦しめて殺すのが、これが護衛とか取締とかいふものかね。』
『囚徒だ囚徒だつて餘りぞんざいにして貰ふまいぜ、囚徒だつて人間だからな。』
群衆の中にはさう口々に云ふものがあつた。
『頭を高くしてやつて、水を飲ませなくちやいけません。』とネクリュウドフは云つた。
『水は取りにやつてゐます。』と巡査は答へた。そして囚徒の腕を抱へて起しにかゝつた。
『何をやらかしたんだ。』と俄に命令口調な聲がしたかと思ふと、群衆を分けて一人の警部が足早にやつて來た。警部は非常に清潔なさつぱりした白服を着てぴかぴか光る長靴を穿いてゐた。
『去つた去つた。みんなは爰に用はない筈ぢや。』と警部は群衆を叱りつけた。何事で人集りがしてゐるかは彼はまだ知らなかつた。瀕死の囚徒を見ると彼は、豫期してゐたかのやうに頷いた、そして巡査に尋ねた。
『これはどうしたんぢや。』

囚徒の一行が其處に通りかゝつた際に、その中の一人が倒れて、護送兵の士官がそれを彼(巡査)に殘つて介抱するよう云ひつけて行つた次第を、巡査は報告した。

『さうか、それぢやあ署へ同行せい。馬車を呼べ。』

『門番が呼びに行つて居ります。』と巡査は答へて、手を帽子の方へやつた。

商店の手代は熱さに就いて又何か云はうとすると、

『其方に何の關係があるんぢや。其方は其方の爲べき事をしろ。』と警部は手代を叱りつけて屹と睨んだ。手代も其威勢に避易して默つてしまつた。

『水を飲ませなくちやいけない。』とネクリュウドフは又繰返した。

警部はネクリュウドフをも屹と見たが、何とも云ひはしなかつた。やつと一人の門番が水を德利に入れて持つて來たので、警部はそれを囚人に飲ませるやうに巡査に云ひつけた。

巡査は囚人の頭を起してやつて、水を其口に注ぎ入れようとしたが、囚人はそれを受けなかつた。水は髭を傳つて流れ、埃の積んだ上衣や肌着を濡らした。

『頭にかけてやれ。』と警部は云ひつけた。

巡査は囚人の帽子を取つて、赤い縮れ髮の上にも剃られた半分の方にも水をかけた。

囚人は愕いて尙ほ一層大きく目を開いたが、矢張身動きもしなかつた。顏一ぱいに水が流れ、それに埃が溶けて汚くなつた。囚人は身をびちびちと痙攣らした。

『あの馬車は何だ、あれは？　あれを此處に持つて來い。』と警部はネクリュウドフの馬車を顎でしやくつて巡査に云つた。更に馬車に向つて、『おい、此處へ持つて來い。』

『お客があるだあ。』と馭者は見向きもしないで不愉快さうに云つた。

『あれは私が雇つてる馬車です。』とネクリュウドフは云つた。『ですがあれをお使ひになつていゝんです。』と云つて馭者に向ひ、『さ、おれの分の賃金を拂ふよ。』

『あ、さうですか。それぢやあ、おい、お前達、何故愚圖々々してる。此奴を乘せないか。』と警部は怒鳴つた。

それで巡査と門番と護送兵と三人掛りで其瀕死の囚徒を抱へて馬車に乘せ、腰掛けに掛けさした。けれども囚徒に獨りで支へてゐる事は出來ないで、頭は直ぐがくりと垂れ、からだは全部蹴込みに滑り落ちた。

『其處に寢かせよ。』と警部は云ひつけた。

『いえ、さうしなくてもいゝんです、上官殿、私が斯うして支へて行きます。』と云つて巡査は自分も囚人と並んで腰かけ、しつかりした右の手で囚人の小腋を抱へた。兵は布を卷かずに革の百姓靴を穿いた囚人の兩足を蹴込みの内に入れてやり、警部は四邊を見廻はして、鋪

石道の上にパン菓子形の帽子の落ちてるのを見ると、拾ひ取つてぐつたり垂れてゐる水に濡れた囚徒の頭に被せてやつた。そして『進め！』と叫んだ。

馭者は忌々しさうに後ろを振り返つて見たが、頭を打振つてやがて馬を警察署の方へ進めた。兵は馬車の横に從いて行き乍ら囚人の足を蹴込みの中へ入れ入れしてやつた。頭をふらふらさせ乍らぐんなりと横にならうとばかりする囚人のからだを、巡査は絶えず支へて行つた。ネクリュウドフも其あとに從いて行つた。

三五

馬車は消防署の前を通つて警察の塀の内に入り、其處の馬車立場の前に止つた。

そこの塀内では數人の消防夫が袖口をまくり上げて、高聲に何やら喋つたり笑つたりしながら車を洗つてゐた。囚徒を載せて來た馬車が停ると、數人の巡査が寄つて來て、死人のやうになつたからだを、手や足を抱へて馬車からおろした。

囚人の傍に腰かけて囚人を半ば抱へて來た巡査は、馬車から下りると痺れのきれた腕を打振つてから、帽子を脱いで空に十字を切つた。半死のからだは建物の内へ運ばれ、二階へ擔ぎ上げられた。ネクリュウドフは從いて行つた。二階の其處は小さい不潔な室で、寢床が四つ設けてあり、その中の二つには長い服を着た病人が二人腰かけてゐた。一人は首に繃帯をした口の歪んだ男で、一人は肺病患者であつた。あとの二つの寢床はあいてゐた。その一つに新來の囚徒の半死體は横へられた。肌衣と靴下だけを着けた小男が一人、絶えず眉をぴくぴく動かし目をぱかぱか光らしながら、小刻みの早足で傍に寄つ來て、半死の囚人をしげしげと眺めるかと思ふと、又ネクリュウドフを見た、そして高い聲を出して打笑つた。それは此處の控室に入れられてゐる狂人であつた。

『皆でおれを愕かさうとしてるんだな。』と小男は云つた。『駄目だよ、さうは行かねえや。』

半死體を擔ぎ込んで來た巡査どもの後から、前の警部と警察醫心得とが入つて來た。警察醫心得は半死體の傍に近く寄つて、雀斑の一ぱいある黄色がゝつた、まだ軟かではあるが早や冷くなつて光澤もすつかり失せた囚徒の手を取つてみた、そして直ぐ又放した。その手は全く命なく胸の邊りに落ちた。

『すつかり參つてますね。』と警察醫心得は頷きながら云つた。けれども手數だけはせねばならないと思ふかのやうに、彼は死人の濡れた肌衣をあけ、自分の縮れ毛を耳の後ろへ搔きやつて、死人の黄色な動かない高い胸に耳を當てた。一同は默つてゐた。それから警察醫心得は自分の身を起して頭を打振つたが、死人の大きく見開いてゐる碧い目の縁から顆顆の方へ

右と左と片方づゝ輕く觸つてみた。

『おれを脅かさうたつて駄目だよ、おれを脅かさうたつて駄目だよ。』と云つて小男の狂人は絶えず警察醫心得の方へ向つて唾を吐き吐きした。

『で。どうなんです？』と警部は尋ねた。

『どうかと云ふんですか？』と警察醫心得は反問して、『死體室へ運ばなくちやいけませんよ。』

『そりや確かですかね、愈々相違ありませんか。』と警部は念を押した。

『相違なからうと思ひます。』と云つて警察醫心得は、死人の胸を又被うてやり、『マトヱエ・イワノオヰッチュさんを呼びにやりませうよ。』さう云つて死體の傍を離れた。

『さ、死體室へ運んだ。』と警部に云ひ付け、それから死んだ囚徒に初めから付いてゐた護送兵に、『あとで君は事務室に來るんだ、證明をせなけりやならないからね。』

『畏りました。』と兵は儀式張つて答へた。

巡査どもは又死人を抱き起して、階段から下へ運んだ。ネクリュウドフはそれに從いて行かうとすると、狂人は彼を引止めた。

『あなたはあの一味ぢやないでせうね。それなら莫を一本下さい。』

ネクリュウドフは卷莫を一本出してやつた。狂人は眉を事げ、自分は切りに暗示をかけられて苦しめられると云ふきを口早に彼に話して聞かした。『あいつ等皆私の敵なんです。そして媒介物で私を非常に苦しめるんですよ。』

『御免蒙ります。』と云つてネクリュウドフは夫れ以上耳を假さずに場内の廣場に出た、そして死體が何處へ運ばれるかを知らうと思つた。

死體を擔いだ巡査等ははや其廣場を通り抜けて、ある地下室へ持つて行つた。ネクリュウドフも續いて其處に入らうとすると、警部は呼止めた。

『あなたはこの内に何か用がおありなんですか。』

『いや、何も。』

『何もないんですか。それぢやあ此處に來てはいけません。』

ネクリュウドフは云はれるまゝに其處を出て、自分の馬車の方へ行つた、そして居眠りをしてゐた馭者を起して停車場の方へ走らせた。

併しまだ百歩程も行かない中に、一臺の荷車に護送の兵が附添うてやつて來るのに逢つたが、その上には又もや一人の男囚が、これは疾うに死んでしまつてゐるらしい樣子で載せられてゐた。仰臥になつて横はつてゐる囚徒の顏の上には、パン菓子形の帽子を被せてあつて

額から鼻まで其下に隠れてゐたが、黒い髯のある半分剃られた頭は、車のごとごとする度毎にひどく揺れてゐた。その荷馬車曳きは大きい深靴を穿いて、馬の轡を取りながら並んで歩いて來た。ネクリュウドフは自分の馬車を止めさせる可く駁者の肩先きを輕く觸つた。

『どうもやり方がひでえんでがすからなあ。』と云つて駁者は馬車を停めた。

ネクリュウドフは馬車をおりて、その荷車の後に從いて又消防署の前を通つて警察の建物の構内に入つた。消防夫等ははや車の掃除をしてしまつて其處には居なかつた。たゞ青い緣のある帽をかぶつた脊の高い痩せぎすの消防隊長が、手を衣嚢に突つ込みながら、平顎の邊りを虻や蚊にひどく螫された川原毛の馬を消防部の馬方に牽かせて自分の前を歩かせ、苦々しい顏付をしてそれを見てゐた。馬は前脚を一つ挫いて跛を引いてゐた。消防隊長は傍に立つてゐる獸醫に何やら不機嫌さうに二言三言云つた。

警部も其處に立つてゐたが、又新たな死人を載せて來た荷馬車を見ると、すぐ其方へ行つた。

『何處から載せて來たんだ。』

『ゴルバトフスキイの通りで載せて來やしただ。』と荷馬車曳きは答へた。

『囚徒かね。』と消防隊長は尋ねた。

『さやうであります。』と巡査は鹿爪らしく答へた。

『これで今日はもう二人目だ。』と警部は云つた。

『散々な始末ぢやねえ。加之こんな手合を持込むんだからなあ。』と消防隊長は云つてから、消防部の馬方に怒鳴りつけた。『隅の厩に入れとけ。この碌でなし奴、馬を滅茶々々にしてしまやがつて、何と心得てゐるんだ。貴樣みたいな奴よりや、馬の方がどれだけ好いか知れやせん。怠けもの奴。』

今度の死人も前と同樣に荷車より抱き下され、控へ室に運びやられた。催眠にでもかゝつたやうにネクリュウドフは又從いて行つた。

『あなた何か用がおありですか。』と一人の巡査は尋ねた。

ネクリュウドフは何とも答へないで、死人の運ばれる所へ從いて行つた。狂人は寢床の板の上に腰かけて、ネクリュウドフに貰つた卷莨を貪り吸つてゐたが、

『やあ、又戻つて來ましたか。』と云つて高く笑つた。死人を見ると狂人は顏を曇らして、

『又してもか。うんざりするぢやないか。』と云つたが、又ネクリュウドフに笑つて話しかけた。『だつて私も子供ぢやありませんからねえ、ねえ、あなた。』

顏を被うてあつた帽子を今や取りのけられてゐる囚人をネクリュウドフは見た。前の囚人

は大變醜い恰好をしてゐたが、今度のは立派な顔で脊恰好も姿形もよく整ひ、その上働き盛りの男であつた。頭を半分だけ剃られてゐるのは打壊しであつたが、今は生氣の全く失せた黑い目の上の額も凛として品があり、薄い黑い口髭の上の小さい鼻の曲り具合も大へん好かつた。紫色になつた引緊つた脣の邊りには微笑の影も漂ひ、頬の下部から顎にかけては薄い鬚が生え、剃られた半分の頭には形の好い耳が特に人目を惹く程であつた。顔に出てゐる一體の調子は靜肅と眞面目と溫雅であつた。心の立派な男が死んで了つたのだといふ感じは、彼を一目見た者には誰にも直ぐ起る筈であつた、それのみならず、鎖を嵌められてゐる足や手や其他五體の各部分が皆立派に釣合ひが取れて美しく發育してゐるのは、彼が如何に强壯な器用な立派な人であつたかを思はせるものであつた、消防隊長が脚を挫いたために馬方をひどく叱りつけたあの川原毛の馬などよりは、どれだけ彼がより完全に出來てゐた人間であるかを思はせるものであつた。それであるのに彼は死ぬ程に虐遇され酷使されたのである。そして誰一人として彼を人間として惜まないのであつた、一馬の癈馬を惜む程にすら惜まないのであつた。彼の死によつて人々に起る唯一の感じは、早く腐敗しない內に死體を片付けねばならない骨折に對する不平であり苦情であつた。

警察醫と其心得と警察署長が入つて來た。警察醫は支那絹の短い上衣を着て、同じ地のズボンには張りきれるやうに肥太つた膝をしつくりと包ませた、丈夫さうなでつぷり肥太つた男であつた。署長は脊の低い矢張り肥太つた男で、その毬のやうに丸い赤い顔は、空氣を吸つて兩頬を脹らし、それから又次第に吹いて出す彼の習慣によつて、尙一層丸く毬のやうになるのであつた。

警察醫と其心得は死人の横の寢床に腰かけ、警察醫は死人の手を握つてみたり、心臟に耳を當てゝみたりした。それから膝を尙ほ張りきらして立上つて云つた。

『もう死に過ぎてゐる。』

署長は空氣を吸ひ込んで口の邊りから双頬へかけて脹らました、そして又徐々に息を出して、それから護送の兵に尋ねた、『何處の監獄のだね。』

兵はそれに答へて、尙ほその監獄の名のある足の鎖を指し示した。

『鎖は取り除けささう。幸ひ署には鍛冶屋が居るんだ。』さう云つてから署長は又空氣を吸つて頬を脹らまし、戸口に行つて又徐々と吹いて出した。

『どうしてこんな事になるんです。』とネクリュウドフは警察醫に尋ねた。

警察醫は眼鏡越しにネクリュウドフをじろじろ見て、

『こんな事と仰しやると？　日射病で死ぬ事ですか。そりや、あなた、冬中運動も出來なけ

りや日の目も見せられないで閉ぢ込められてゐるぢやありませんか。それが急に日に當てられるんでせう、加之そよとの風もない今日みたいな暑い日にさ、葬々列を組まされて長い道中をさせられちやあ、やられるのは當り前でさあ。』

『だつて何故道中をさせられるんでせう。』

『それは私でなく誰か他の人にお尋ねならなくちや。一體あなたは何方です？』

『尋常の個人ですがね。』

『さうですか。失敬します、私には時がありません。』と警察醫は苦々しげに云つて、張詰めてゐるズボンの膝を尙ほ張り詰めながら患者の方へ向き直つた。そして首に繃帶をしてゐる口の歪んだ見窄らしい男に問うた、『どうだね、氣持は？』

その間狂人は自分の寢床に腰かけてゐたが、もはや莫は飲まないで、醫者の方へ向いて唾を吐いてゐた。

ネクリュウドフは其處を出て廣場を横ぎり、消防隊の馬や鷄を入れてあるところの前を通り、眞鍮の飾のついたヘルメットを被つた番兵の前を過ぎて通りに出た。そして又もや居眠りしてゐた自分の馬車の馭者を呼び起し、停車場さして走らせた。

三六

ネクリュウドフが停車場に着いた時は、はや囚徒は皆窓に格子の嵌まつた列車の中に入つてゐた。プラットフォルムには囚徒を見送つて來た人達が立つてゐたが、列車の傍に寄る事は禁じられてゐた。

護送兵等は今日は非常に忙しかつた。それは監獄から驛までの道中で、ネクリュウドフの目に留つたあの二人の囚徒の外に、又三人日射病にやられて昏倒し、そして死んでしまつたのである（原作者註＝十九世紀の初め頃、モスカウからニシュニイへ送られる囚徒の群の中、監獄停車場間の道中に五人の囚徒が日射病にかゝつて日中に死んだ）その一人は前の二人のやうに附近の警察に擔ぎ込まれ、あとの二人は驛に着いてから死んだ。護送兵等はしかし、まだまだ生きて行ける筈だつた人間を五人も殺したといふ事をくよくよ思つてゐるのではなかつた。そんな事は彼等に取つては何の痛痒をも感じしめる所以のものではなかつたのだが、たゞ彼等はそんな場合には色々面倒な八ケ間しい規則づくめの手續を履まねばならなかつた、死體の處置もせねばならず、書附も書かねばならず、死人の身の廻りの道具其他もそれぞれの所へやらねばならず、又ニシュニイへ先き廻送してある囚人身元簿より削除もせねばならないのであつた。それは面倒な煩さい仕事であつたのである。殊に暑い日中

には尙更ら一通りの骨折ではなかつたのである。

それだから其忙しさが落着するまでは、ネクリュウドフも其他見送りに來てゐる皆の者も列車の傍に寄る事は願つても許されないといふわけであつた。けれどもネクリュウドフは間もなく護送兵の下士の一人に錢を握らして、列車の傍に行く事を許された。けれども成るだけ早く話を切り上げて列車より離れるように、指揮官に見られないようにすべく條件づけられた。

總計で列車は十八臺續き、指揮官の乘る一臺の外は皆囚徒で一ぱいであつた。ネクリュウドフは列車の窓傍を通り行きつゝ、窓の內の物音や話聲に耳を傾けた。どの列車にも鎖の音、騷々しい物音、入りまじつた話聲はしてゐたが、死んだ仲間の事を話してゐる聲が少しも聞えなかつたのを、ネクリュウドフは意外に思つた。大抵はめいめいの袋の事、飲み水の事、さては座席の事などであつた。ネクリュウドフが一臺の列車の內を覗いてみると、眞中の通り道を護送兵が二三人、囚徒等の手錠を外してやりつゝ行つてゐるのが見えた。囚徒等は皆我も我もと手を差延べ、一人の兵が鍵であけて取つてやると、今一人の兵はそれを受取つて數へて集めて行くのであつた。男囚の列車の前を行き過ぎると、それからは女囚の部であつた。その二番目の列車の前を過ぎる時、彼は單調な女の呻き聲を聞いた。『おゝ、おゝ、

苦しい、神樣あ。おゝ、おゝ、苦しい、神樣あ。』

ネクリュウドフは通り過ぎて、一人の兵が教へて呉れたまゝに三番目の列車の窓の傍に進み寄つた。顏を窓に近づけると直ぐ彼は、人間の肌や息の匂ひの强くする溫氣にむつと襲はれた、そして甲高な女の聲々を聞いた。どの腰掛にも汗になつた女囚が赤い顏をして所狹く掛けながら、頻りとべちべちや喋り合つてゐた。長い短い上衣を着け、頭には布を掛けてゐるのもゐないのもあつた。窓の格子の間にネクリュウドフの顏が見えると、一同の氣は其方へ集まつた、直ぐ近くにゐた者などは直ぐ口を噤んでお辭儀するのもあつた、カテュウシヤは短い上衣を着て頭の布も卷かずに向う側に腰をかけ、それよりネクリュウドフの立つてゐる窓に近いところにはフェドッシアが微笑を浮べて腰かけてゐた。フェドッシヤはネクリュウドフを夫れと見ると直ぐカテュウシヤを輕くそつと突いて窓の方を指した。カテュウシヤは急いで立つて布を黑い髮にかけながら、汗ばんだ顏を一段とさつと赤めて急いで傍に來て格子につかまつた。

『暑いことですわねえ。』と彼女は嬉しさうにこにこして云つた。

『品物は受取りましたか？』

『えゝ、どうも有り難うございましたわ。』

『外にまだ何か要るものはありませんか。』
『有り難うございます、もう何も。』
『少し飲むものでもあるといんだけれどね。』とフェドッシャが云つた。
『さうね、飲むものでも何か少しあると好いのですけれど。』とカテュウシャはそれを繰返してネクリュウドフに傳へた。
『ちつとも水が無いんですか？』
『とつくに悉皆飲んぢまつたものですから。』
『では直ぐ、』とネクリュウドフは云つた。『護送兵に頼みませう。もうニシュニイに行かなけりや會へませんから。』
『ではあなた、本當にいらつしやるの？』とカテュウシャは、今迄は信じてゐなかつたかのやうに愕いた色を見せて、併し嬉しさうに彼の顏を見て尋ねた。
『次の列車で發ちます。』
カテュウシャは何とも云はなかつた、一寸間が經つてから彼女は深い溜息をついた。
『旦那樣、何ちふ事でございやすだね、十二人の囚徒を死なしたちふぢやございやせんか。』
陰氣な顏をした老婆が男のやうな荒く太い聲で彼にさう話しかけた。それはコラブレエワであつた。
『十二人だか何だか私は知らないが、私が見たのは二人でした。』
『十二人ちふ話でございやすんだよ。夫でさ、そねえな事を仕出來さしとく奴等に罰が當らねえもんでございやすかね、あの畜生奴等に。』
『女囚部には病人は出來なかつたんですか。』とネクリュウドフは尋ねた。
『女の方はお前さん、粘り强うございますだよ。』と別な小柄の女が云つた。『だけんどな、一人產氣づきやしてなあ、そおれ、呻き聲が聞えませうがなあ。』さう云つて呻き聲の聞えて來る次の列車の方を指さした。
『あの、何かもう用はないかつて仰しやつて下すつたのね。それは、』とカテュウシャは嬉しい微笑の洩れるのを止めかねながら、『あの、お產してゐる女を後に殘して貰ふわけには行かないのでせうかしら。あんなに苦しんでゐますもの。指揮官の人にさう仰しやつて下さらないか？』
『云ひませうとも。』
『それと、此人に御亭主を會はしてやり度いと思ふんですけれど。』カテュウシャはにこにこしてゐるフェドッシアを目で指してさう云ひ添へた。『あの、あなたと御一緒に行くタラスさ

んて人をさ。』

『もし、もし、あなた、さう話などなさつてはいけません。』と怒鳴る下士があつた、それは先きに彼を許した下士とは別なのであつた。

ネクリュウドフは其處を離れ、産婦の事とタラスの事を賴まうと思つて指揮官を探したが分らず、兵等に訊いても要領ある返辭を得なかつた。護送兵等は其時は大多忙で、或る囚徒を何處へか連れ行くのもあれば、自分達の列車内での食物を賣場に買ひに行くのものあり、荷を列車に運んでるもあり、護衛の士官と一緒に行く或る貴婦人の面倒を見やつてゐるもあつたが、誰一人ネクリュウドフの問に親切に答へるものはなかつた。

二度目の鈴が鳴つた後でやつと彼は護衛士官を見付けた。士官は口を蔽うてゐる上髭を短い手で左右に扱きやりながら、肩を聳やかして一人の曹長に何やら叱りつけてゐるところであつた。

『一體何の御用ですか。』と士官はネクリュウドフに尋ねた。

『あの列車には産氣づいた女が一人ありますね、私の考ではあれは後に殘して……』

『産をすればして構ひません。した上で何とかしませうよ。』と士官は事もなげに云つて、その短い手でひよいと調子を取つて列車に乘り込んだ。

その時車掌は號笛を手に持つてついと前を通つて行つた。最後の鈴が鳴り、號笛が鋭く鳴つた。プラットフォルムの見送人の群と女囚の列車内には泣聲と叫び聲が起つた。ネクリュウドフはタラスと並んで、プラットフォルムに立つて、一臺一臺と引續き過ぎ行く列車を見送つた。列車の窓からは半分剃られた澤山の頭が格子の内から此方を見てゐた。それから女囚列車の一番目が來た、頭に布をかけたのや掛けない女囚等が内に見えた。二番目が來た、産婦の呻き聲は不相變であつた。三番目になつた、カテュウシヤは他の女囚等と共に窓際に立つてネクリュウドフを見た、哀れつぽい微笑を湛へて見送つた。

三七

ネクリュウドフが乘つて行かうと思つてゐる夾の客車の出るまでは、まだ二時間あつた。それで彼ははじめは其時間を利用して今一度姉を訪ねようかと思つたが、午前中に見た樣々な光景の爲め非常な昂奮を覺え、又ひどく疲れてゐて、一等待合室の小さいソファに腰かけると、急にぐつたりして横になり、肘を頰に敷いて睡入つてしまつた。

フロックを着た給仕人が、手にナフキンを持つて彼を起した。

『もし、もし、ネクリュウドフ公爵樣と申しますとあなた樣ではございませんか。御婦人の

方がお訪ねになつて居りますが。』

ネクリュウドフは跳ね起きた、そして目を擦りながら自分が驛の待合室に睡つてゐた事、それから午前中に經驗した事を思ひ出した。

囚徒の行列、死んだ囚徒の事、窓に格子のある列車、その中に閉ぢ込められてゐる女囚の群、その中の一人は救ひを求める道もなく苦しみ呻つてゐた事、今一人は格子越しに哀れつぽい微笑を彼に送つた事、そんな樣々な事柄が又もやネクリュウドフの心に浮び出た。けれども實際眼前に見てゐるものはそれには全く違ひ、卓の上には壜や花瓶や燭臺などがあり、給仕人等は其間にあつて、まめやかに客の用を勤めたりして居り、ずつとさきの廣間には花瓶だの果物だの酒類の壜だのが並んだ食品棚があつて、その前にも又給仕人が居り、旅の客も數人ネクリュウドフの方へ脊を向けてゐた。

彼は寢ぼけた氣持が恢復すると、邊りに居る者が皆外を眺めてゐるのに氣付いた。彼も其方向を見ると、數人の男が面紗（エェル）をかけた一人の貴婦人を安樂椅子に載せて擔いで來るところであつた。その一等先きの男はネクリュウドフに見覺えのある玄關番で、其次の筵緣つけた帽を被つた門番も矢張りネクリュウドフは見た事のある男であつた。安樂椅子に續いて來るのは縮れ髪に布をかけた上品な附添女中で、何だか丸い物を入れた革の匣を携げ、蝙蝠傘を

持つてゐた。それから脣の厚い中氣病み宛（さながら）の首をしたコルチャアギン公爵が胸を突き出して歩いて來、その後にミッシイ、その徒弟のミイシャ、それから又ネクリュウドフの知つてゐる首の長い陽氣な政治家のオステンが續いて歩いて來るのであつた。咽佛の出てゐるオステンは、笑つてゐるミッシイに何か熱心に、併し巫山戲た調子で話してゐた。最後に從（つ）いて來るのは醫者で、不平さうな顏をして卷莫を吹かしてゐた。

コルチャアギンの一家はモスカウ郊外の邸から、ニシュニイ＝ノヴゴロッド停車場附近にある公爵夫人の妹の邸へ引越して行くところなのであつた。

椅子舁きの男等と附添女中と醫者は人々の尊敬混りの好奇心を惹きながら、婦人室に入つた。老公爵は卓に就くと直ぐ給仕人を呼んで、何か用を云ひつけた。ミッシイとオステンも其處に殘つて椅子に腰かけようとしたが、その時ミッシイは誰やら室の外に知つた女の人を見つけて、すぐ其方へいそいそと寄つて行つた。それはナタリエ・イワノフナがアグラフェナ・ペトロフナを連れて來てゐるのであつた。ナタリエは其入口にやつて來て邊（ほり）りを見廻はすと、ミッシイとネクリュウドフを殆ど同時に見つけたのである。先づミッシイの傍に行つたが、ネクリュウドフにもにつと頷き、そしてミッシイに挨拶をし接吻（キッス）を交してから、直ぐ弟の傍に行つた。

『やつとのことで見つかつたわ。』と彼女は云つた。

ネクリュウドフは立つてミッシイ、ミイシャ、オステンに挨拶をしてから、なほ少しの間何やかと話を交へた。ミッシイは此地の邸が火災に罹つたので、家族一同叔母の家へ引越さねばならない由を語つた。その火事の時にあつたといふ何か滑稽な出來事を、オステンは今が幸ひと話し出した。ネクリュウドフはオステンの話には耳を傾けないで、姉に向ひ、

『姉さんが來て下さつたので、私非常に嬉しい。』

『もう私さつきから來てたのよ。そしてアグラフェエナさんと二人で探しましたの。』と云つて姉はアグラフェエナを指した。アグラフェエナはネクリュウドフに何か邪魔にでもならないようにと思ひ、少しどぎまぎしながら柔和らしい品位を見せつゝ頭を下げて挨拶した。

『私は此室で睡り込んでしまつてゐたのです。あ、あなたが來て下さつたので、私は非常に嬉しい。』と彼は又繰返した。『私姉さんに手紙を出さうと思つて書きかけたのですよ。』

『本當？』と姉は怪しんで尋ねた、『どんな用で？』

ミッシイは姉と弟の間に内輪話が始まつたと思つたので、保護の役目のオステン等と一緒に其場を少し外らした。ネクリュウドフは姉と共に、窓際にある天鵞絨張りのソファの他人の鞄だのプレイドだの匣だのの置いてある横に腰かけた。

『昨夜あなた方の宿を出てから、私は又引返して仲直りに行かうかしらと思つたのです。併し又それでは義兄さんが何と思ふだらうと思ひましてね。』とネクリュウドフは云つた。『どうも私の話し方はよくなかつたのです、それが甚く氣になるものですから。』

『そりや私も知つててよ、ドゥミトリイさんが別に悪い氣で云つたのぢやない事は、そりや知つててよ。でもねえ、私の身になれば……。』

涙は彼女の目から溢れた。そして彼女は弟の手を取つた。その云ふ事は如何にも女らしい情けの籠つた暖い心で、弟にも彼女の心持はよく分り、そしてその言葉には幾らか感動されないわけに行かなかつた。飽く迄も良人の爲めを思ふ心の外にも、弟を思ふ心とても決して等閑なものではないから、二人の間に爭ひが起つてはどんなに辛いか知れない、といふ意味の言葉であつた。

『有難うございます、そんなに云つて下さつては、どうも有難うございます。』と云つてからネクリュウドフは午前に見た二人の死人を急に思出した。『あゝ、今日は本當に、何てものを見たんだらう。姉さん、囚人が二人殺されたのですよ。』

『何ですつて？　殺されたつて？』

『さうです、確かに殺されたのです。此の暑いのに引摺り出されたので、日射病に罹つて死

んだのです。』

『どうしてそんな事がありませう。今日ですつて？　今さき？』

『えゝ今さきです。私は現に死體を見たのです。』

『だけどどうして殺されましたの？　誰が殺しましたの？』

『無理やりに引摺つて連れて來た者が殺したのです。』ネクリュウドフは、姉が良人と同じ目で觀察してゐるのを知ると、又少し激してさう云つた。

『おや、まあ、本當にねえ。』と少し近く寄つてゐたアグラフェナは嘆いた。

『さうなんですよ。あんな不仕合せな人達がどんな目に逢つてゐるか、我々は少しも知らないでゐるんです、頓着しないでゐるんです。これは併しよく知つてゐなければなりません。』

とネクリュウドフは尙ほ云ひ添へて老公爵を眺めた、老公爵はナフキンを胸に當てて卓に着きながら何か清涼な飲料を飲んでゐたが、丁度その時、又ネクリュウドフの方を見やつたのである。

『ネクリュウドフさん。』と呼びかけ、『どうですね、冷いのをやりませんかな。旅には好いものでございますよ。』

ネクリュウドフは『有り難う、もう澤山です。』と丁寧に挨拶して斷り、そして又姉の方に向いた。

『それで、あなたはどうすると云ふの？』とナタリエは續いて尋ねた。

『私に出來る限りの事をするんです。何が出來るか私自身には分りません、併し私は何かしなければならないと感じてゐるのです、それで出來るだけの事をするのです。』

『そりやさうね、私にも分るわ。そして、あの、』と姉はコルチャギンの方を目で指して、『あの關係は本當にすつかり止してしまつて？』

『すつかり止しました。そして彼方も此方も少しも思ひ殘すことがありませんから、好都合です。』

『惜い事ねえ、私はあの娘さんは好きよ。でもね、それは夫れとしてさ、今の話をそれにどうして結びつけておいでなの？』と姉はおづおづしながら尋ねた。

『どうしてあなたは旅をするの？』

『せねばならないからします。』とネクリュウドフは簡單に屹として云つた、もう其事は續いて冗々云ひ度くないといふ調子を見せたのである。

併し又彼は直ぐ自分が姉に對して冷かな態度になつたのを自分で責めた。「思ふ事を殘らずおれは姉に何故云へないのだらう。アグラフェナが傍で聞いたつていゝぢやないか。」と

思つた。

『姉さんは私がカテュウシヤと結婚し度いと思つてる事を云ふのでせう？　それはね、姉さん、私の決心です。けれども彼方はしつかり拒絶するのです。』その事を云ふ時の彼の聲はいつも屹度慄へるのであつた、今も亦同じく慄へた。『むかうは私の犧牲を取り用ひないのです、寧ろ自分の身に取つて耐へ難い筈の犧牲を捧げるのです。併し私とてもそれを受容れてゐる事は出來ません、ですから私は從いて行きます。そして彼女の居る所に私も居ます、又出來る限りの事をして助けてやる積りです、彼女の運命を輕くしてやる積りです。』

ナタリエはそれに對して何とも答へなかつた。アグラフェナはナタリエの心を忖りかねるやうな氣持で其顏を眺めた。

その時さつきの椅子舁きの一組は婦人室からさつきの安樂椅子を舁いて出て來た、それは伊達者の玄關番フィリップと門番で、椅子の上の人は公爵夫人であつた。夫人は椅子を停めさせてネクリュウドフを招き、泣きさうな顏をして指環の一ぱい嵌まつた其白い手を差延べたが、强く握られはしないかとそれが心配らしかつた。

『Epouvantable（嚴しうございますのねえ。）』と夫人は暑氣の事を云ふのであつた。『私たまりませんわ。Ce Climat me tue（こんな時候ぢや私死んぢまひますわ。）』そして夫人は尙ほ少し露西亞の氣候の惡い事を云つた上で、ネクリュウドフに自分を訪ねて來て呉れるやうに云ひ、それから椅子舁き等に舁いて行くやうに合圖をした。『是非々々お訪ね下さいな、ね、ね。』と尙一度夫人はネクリュウドフに共長い顏を向けて云ひ添へた。

ネクリュウドフはプラットフォルムの方へ行つた。椅子舁き等は右へ曲つて一等客車の方へ舁いて行つたが、ネクリュウドフは自分の荷を持たしてゐる男や袋を持つてゐるタラスと一緒に左へ行つた。

『この人は私の道連れです。』とネクリュウドフはタラスを指して姉に云つた。タラスの身上話は彼ははや前に姉にして置いたのである。

『だけど、三等車で行くんぢやないでせうねえ？』ナタリエは弟がある三等車の前に立つて荷擔ぎとタラスが夫れに乘つたのを見た時、さう尋ねた。

『此車で行きますよ、タラスと一緒に行くのが氣樂で好いんです。それから尙一つ云はなくちやならない事は、まだクスミンスコエの地所は百姓達に遣つてしまつてはゐませんから、私が死んだら姉さん達の子供が相續する事になるんです。』

『ドゥミトリイさんてば、そんな事お云ひでないよ。』

『私が又遣つてしまふにしても、地所の外にまだ色々な物がありますから。そして私の結婚

も果して出來るかどうか分りませんし。又結婚はしても子供は迚も出來ませんから、だから何卒そのお積りで……。』

『ドミトリイさん、私お願ひですから、どうぞそんな事はもう云はないでゐて頂戴。』とナタリエは云つた。けれどもナタリエがさう聞いたので悅んだ心持は、ネクリュウドフには直ぐ分つた。

一等客車の前にはまだ少し人集りがして、公爵夫人が其内へ運び入れられる樣子を珍らしさうに見物してゐた。その他の旅客ははや車内に乘り込み、遲れた者はプラットフォルムの板を踏み鳴らして急いで走つて來た。驛員は入口を閉めて歩き、旅客には直ぐ車内の席に着くやうに、見送人には少し後へ退るやうに注意した。

ネクリュウドフは日に照りつけられた暑い而して惡臭のる車室に入つたが、直ぐ又出て來て入口の臺の上に立つた。

流行の帽子を被つて肩衣を掛けたナタリエは、アグラフェナと共に其列車の前に立つて、何がな話題をと考へるらしかつたが何も思ひつかなかつた。「Ecrivez! (手紙を何卒ね。)」などといふ別れの際の常套な空文句は、昔弟と二人で馬鹿にして笑つてゐたので、今も又さうは云へないのであつた。金錢問題と遺産相續に就いての會話は、折角いくらか恢復された二人の間の姉弟らしい親しい暖い心持を又もや打壞してゐたのである。輕い隔意が二人の間にはひり込んでゐた、列車が動き出すと姉は悅んだ、たゞ顏を見合はせたり頷いたりして親しさうな悲しさうな顏つきをして『さよなら、御機嫌よくね、さよなら。』とさへ云へばそれでよいのであつた。列車が行つてしまつて全く見えなくなると、彼女はたゞ良人に弟と交へた會話をどう話さうかを考へた、そして眞面目な幾らか面倒臭さうな顏をした。

ネクリュウドフも姉に對しては心より親しい感じを持つてゐたのでもあり、又何事も隔てなく打明けて云つたのではあるが、それでも今さき姉と向き合つてゐると何となく氣の詰るやうな不愉快を覺え、一刻も早く離れて行き度いと思つてゐたのである。昔は自分と同氣相投じた高潔な若い女性であつたナタリエが、今はもはや夫れでない事を彼は感じた、今は寧ろ自分の考などとは非常に遠い、不愉快な色の黑い鬚面の良人の奴隷となつてゐる事を彼は感じた。それは彼が彼女の良人の悅びさうな事を云つた時にのみ嬉しさうな輝きが彼女の顏に出たので明かに察せられたのである。卽ち土地を百姓にやる事について其他の財産の點や其相續の事を云つた時にのみ、彼女の顏は輝いたのであつた。それを思ふと彼は不愉快であつた。

終日照りつけられてゐる滿員の三等車の暑さは非常なもので、ネクリュウドフは内には居たたまらず、入口の臺にばかり立つてゐた。そこととても息の窒るやうな暑さではあつたが、列車が漸く町を出て東風がさつと吹いて來て、はじめて彼はほつとした。

「さうだ、彼等が殺したのだ。」と彼は先程姉に云つた自分の言葉を思ひ出して心に繰返した。そして其日のあらゆる印象の中、二度目に見た死んだ囚徒の美しかつた顏が又もや彼の思出に浮んだ、脣には笑みを湛へ、額には威があり、半分剃られた頭蓋の下部に見えた耳の形の愛らしく立派であつた事などが、まざまざと浮び出て來るのであつた。

「そして最も怖ろしい事は、彼が殺されたといふ事である、そして誰が殺したか誰も知らないといふ事である。けれども兎に角彼は殺されたのである。マスレンニコフの命令によつて、彼は他の囚徒等と共に引出され歩かせられたのである。マスレンニコフは規定に由り例に從つて命令書を出したのであらう、あの頭文字を刷つてある用紙にあの愚にもつかない書き判の花文字で署名をしたのであらう、そして此の不幸に對して勿論少しも責任を感じはしないのであらう。囚徒の健康診斷をした監獄醫も自分の所爲とは思はないであらう。きちんと役目だけの事をして、弱いのは選り分けたのである。又あんな烈しい暑さにならうとは誰も豫め思つてゐなかつたに違ひなく、又あんなに出發が遲れやうだの、あんなに密集した行列にならうだのとも誰も豫期しなかつたのである。ではあの典獄はどうだらうか？　あの男としてもたゞ、何月何日に何程の徒刑と移住刑の男女囚を云々といふ命令を規則通りに行つた許りであらう。あの護送兵の指揮官とても、たゞ何程の囚徒を受取つて何々の場所に屆けるやうにとの命令を規則通りに慣例通りに行つただけで、あの二人の囚徒等のやうに强壯な男が持耐へないで急に死なうとは豫期しなかつた事であらうし、自分に責任があらうとは感ずる事も出來ないであらう。してみれば罪は誰にも無いのである、責任は誰にもないのである、——それでも兎に角彼等は殺されたのである、責任の無いかのやうに見えるあんな役人等の爲めに殺されたのである。」——

「それは斯ういふ所から來てゐる。」とネクリュウドフは考へた、「知事も典獄も警部も巡査も彼等が眼中に置いてゐるのは人間ではない、人間に對する人間としての義務ではない、たゞ役目と職掌である、人間として爲ねばならない事よりも、たゞそんな外形的の役目や職掌を何よりも大切にしてゐるのである。それが彼等の無意識な殺人の根本である。一切の惡は其處から由來してゐるのである。」

ネクリュウドフは考に熱中して、天氣の變るのには氣づかずにゐた。日は切れ切れになつた低い雲の裡に隱れ、西の方からは又灰白色の濃い一團の夕立雲が襲來し、其下になる所には森に田畑に文目(あやめ)も分らぬ兩脚を立てて降り注いだ。風は颯と濕氣を送つて冷々(ひえひえ)した。雲間には折々電光が閃き、轟き行く列車の音には遠くの方での雷鳴も屢々混つた。雲は刻々に近くなり、風に吹かれて横さまにぽつりぽつりと打つて來るものがあるかと思ふ間もなく、雨はざあと音をたてて列車の乘臺を濡らしネクリュウドフの外套を濡らした。彼は風の當らない側に行つて、新鮮な濕つた空氣や永らく雨を望んでゐた田畑の匂ひを心行く許り吸ひ込みながら、過ぎ走り行く植込や森や、黄色くなつた裸麥の畑や、まだ綠な燕麥の畑や、花盛りの馬鈴薯畑の黑ずんだ畦などを眺めやつた。すべてが鮮かに洗ひ出されて、綠の色は尙一層綠に、黄色は彌增しに黄色く、黑は尙又黑さを增してゐた。

『もつと降れ、もつと降れ。』ネクリュウドフは獨語(ひとりごと)つて、雨の惠みに蘇つた田畑の眺めを又なく悅んだ。

けれども雲は次第に切れて少しづゝ明るくなり、それから霽れる前の一村雨がざあつと來た。太陽が再び姿を見せて、野も山も又新しく輝いたかと思ふと、東の空には目の覺めるやうな虹がかゝり、その一方の足は薄れて消えてゐたが鮮かな紫が殊に美しく出た。

「おれは何を考へてゐたつけ。」とネクリュウドフは又自分の心に尋ねてみた。その時ははや天氣の變化は終つて、汽車は或る緩傾斜の切割の中に差しかゝつてゐた。「さうだ、あの役人連中の事だつた。典獄だの、指揮官だの、あの連中も根は大體に於て善人なのだ、それがあのやうに冷淡に無情になるのだからなあ。」

彼は監獄內の實狀を聞いても冷淡だつたマスレンニコフの態度を思ひやつた、新任典獄の嚴酷振りを思ひ出した、病弱者を荷馬車に載せもせず又產婦の苦惱に一顧をも與へなかつた指揮官の慘忍を追想した。彼等は皆人類の同胞的感情に沒交涉な手合としか思はれなかつた。「切石を敷詰めてあるあの傾斜の下の土壤が雨に沒交涉なのと少しも變らない。」とネクリュウドフは、色々の石を敷詰めてある切割の傾斜面を眺めながら思つた。傾斜面に降り注ぐ雨は其下の土壤へ浸み行く事は出來ないで、たゞ小さい澤山の凹みを傳うて下へ流れる許りであつた。「切割に石を敷詰める事は必要でもあらう、併し其爲めに草木の生えなくなつた下の土壤は思つても氣の毒なものである、切割の上の同じ土壤には穀物も灌木も草花も榮えてゐるのに、そしてそれ等は切割の下の土壤にも生ひ茂る事が出來る筈であるのに。人間でもさうだ。――人間が人間に對するに、愛が無くてもよい事情や場合がある、と思ふのが誤りの本なのだ、それが惡の元なのだ。無生物に對してなら愛がなくてもよからう、薪を割

つたり煉瓦を作つたり鐵を鍛へたりする事なら愛がなくてしてもいゝだらう、けれども人間に對しては愛なくしてはいけないのである、蜂を飼ふにすら愼重な取扱ひが必要なのではないか。蜂を飼つてそれを亂暴に取扱ふならば、それは蜂をも害ひ自分をも害ふ事になるではないか。人間とても同樣である。相互に愛を持つて行く事が人類生活の根本原則で、それは變らないのである。なるほど人に愛を强ひて持てと云つても、それは駄目である、併しそれだからと云つて愛無しに人に接してよいといふ事にはならない、殊に相手に愛を要求する場合には尙ほ更である。お前が若し人に對して愛を持つてゐない時は、その時は離れてゐるがよい。」とネクリュウドフは自分の心にさう云つた。「そんな場合は自分だけの事をするがよい、さもなくば何か無生物の相手の事をするがよい、斷じて人間相手に事をしてはいけない。丁度何か食べたいと思ふ時物を食べて始めて無害有益であるやうに、愛がある時にのみ人に接して始めて人生に毒を流さず幸福を增進させる事が出來るのだ。昨日おれが姉婿に對して振舞つたやうに、愛なくして人に對するならば、それはおれが今日目擊したやうな慘忍と野蠻を生む所以であるのだ、なほ夫れ以上どれだけの慘忍と野蠻とを募らせる所以であるか知れないのだ、そして又それは自身にどれほどの害を加へるか量り知れないものであるのだ、それも亦おれの今迄の生涯が嘗めて來た事であるのだ。」——

「さうだ、さうだ、確にさうなんだ。」とネクリュフドフは思つた。「その考が本當なものだ、立派なものだ。」と心に繰返した。窒息させるやうな苦熱を免れた淸々しさと、長い間心に蟠つてゐた疑問を徹底的に解決し得たといふ意識とで、彼は二重に愉快な氣持を覺えた。

三九

ネクリュウドフが席を取つた列車は、定員の半數位の乘客で、日傭取り、職人、勞働者、肉屋、猶太人、手代、職工の女房などといふ客の一種で、尙ほ兵卒が一人と、稍服裝のいゝ女が年增と若いのと二人、年增の方は露出しの腕に腕環など嵌めてゐた、それからコカルデの付いた黑い帽を被つた氣六ケ敷げな顏の紳士風な男も居た。皆それぞれ席を取つて落着くと、穩かに安らかに腰かけながら、向日葵の種を嚙んでるのもあれば、卷莨を吸つてるのもあり、何やら隣席の者と陽氣に話し合つたりしてゐるのもあつた。

タラスは中央の通りの右側に腰かけて、ネクリュウドフの席を特に氣をつけてちやんと空けて置いて、にこにこしながら向側の男と何やら盛んに話してゐた。上衣の釦を外して胸をあけてゐる筋肉の逞しさうな其男は、あとでネクリュウドフの聞いたところでは庭作りださうで、何處かに新たに雇はれ度いと思つて旅してゐるとの事であつた。ネクリ、ウドフはタ

ラスの傍へ行かうとして、一寸白い髭の生えた品のある老人の横で立止つた。南京上衣を着た其老人は、田舍向きの服裝の若い女と何か話し合つて居り、女の横には袖無しの上衣を着たブロンドの髪を組んだ七歳許りの女の子が腰かけて絶えず向日葵の種を嚙んでゐたが、その足は下には達かなかつた。老人はネクリュウドフを見ると、自分一人で樂に腰かけてゐた席を半分だけあけて、『さ、どうぞおかけなせえまし。』と云つた。

ネクリュウドフは有り難うと云つて其處に腰をかけると、女は一寸途切らしてゐた話を直ぐ又初めた。それは町に良人に會ひに行つた話で、今はその歸るところであつたのである。

『斷肉祭の時も私行つてましたがな、有り難え事には又行きましただ。神様の思召せえよけりやあ又此のクリスマスにも逢ひに行きますだよ。』

『良え事ぢやのう。』と老人はネクリュウドフの方へ向きながら云つた。『行くが良えさ、さうしてよう氣を付けてやるが良え。あんな若え男が町に居るちふと、兎角つまんねえ遊び事にも引つ掛らうちふもんでなあ。』

『違ふよ、お爺さん、私の亭主はそねえな男でねえからねえ。つまらねえ遊び事なんぞしやしましねえよ。おとなしうてなあ、そりや娘つ子みてえな性質の人だあもの。稼えだけあ一文殘らず家さ送るんだよ。そして此の娘を見た悦び方ちふたら、そりや何とも云へねえくれえでなあ。』と女は嬉しさうに打笑つた。

小娘は默つて聞きながら、嚙んだ向日葵の種を吐き吐きしてゐたが、老人とネクリュウドフを時々見上げる悧巧さうな靜かな其目は、母の言葉を確かに其通りと保證するかのやうに見えた。

『感心な男だのう。夫だら愈々結構だあなあ。』と爺さんは云つたが、中央の通りの向う側に腰かけてゐる勞働者らしい夫婦者を目でそれと指して、『ぢやあ、あねえな事もしねえ方だのうし。』

指された其男はブランデエの壜を口に當て、ぐびりぐびりと長いこと喇叭飲みを續け、その女房は其壜の入つてゐた袋を手に持ちながら、一心に亭主の顏を見てゐた。

『いんにや、我夫は酒も莨も飲みましねえ。』さう云つて女は尙ほ一度自分の亭主を褒める機會を握つた。『ねえ、お爺さん、酒も莨も飲まねえやうな男は滅多にや居ましねえよ、我夫は其方だけんどね。』そしてネクリュウドフの方へ身を向けた。

『夫だら愈々結構だあな。』と老人は繰返しながら、飲んでゐる勞働者夫婦を眺めやつた。

自分の分だけ飲んでしまつた男はその壜を女房にやると、女房もにこにこして頭を振つてから、同じく壜の口を自分の口に持つて行つた。男はネクリュウドフと老人の視線が自分に

注がれてゐたのを見ると、直ぐ二人の方に向いて、
『ねえ、旦那、旦那は手前共が飲んでるのを魂消て見さつしやるかね。手前共が働くのあ誰も見て呉んねえけんど、飲むちふと直き皆が見やすだからなあ。手前働えて貯めやしたでなあ、そんで飲むんでがあすよ、そんで鼻にも振舞うてやつとる譯でがあすよ、手前の鼻だあもの、他人の鼻ぢやあなし。』
『さう、さう。』ネクリュウドフは別に何と答へていゝか分らなかつたので、たゞさう云つた。
『本當でがあすよ、旦那、手前の鼻は丈夫な女でな。この鼻で手前は滿足でごぜえやすだよ、よう手前の事をして呉れやするでなあ。なあ、マフラ、さうだんべえ?』
『さあ、お取りな。私もう澤山だあ。』と云つて女房は亭主に堰を戻しながら、『何ちふ下らねえ事ばさくだよ、此人は。』
『なあ、旦那、聞いてお呉んなせえ、』と男は尙ほも云ひ續けた。『好え女でがあすよ、だけんどな、油の絶れた車輪みてえにきいきいぼさきやすだよ。なあ、マフラ、さうだんべえ、なあ。』
マフラは醉拂つた手つきで、笑ひ乍ら男に何ともつかぬ合圖をした。『もう澤山だあよ…。』
『さうでがすだよ、好え女でがあすよ、全くでさあ。だけんどな、時々はな、手綱を少うし

緩め過ぎるちふと、そりや勝手なひでえ事やらかしますだあよ、その態つたら口でも云えねえ位でなあ。なあ、さうだんべえ、マフラ、なあ。御免なせえよ、旦那、手前醉つ拂つたもんだで。だけんど、もう仕方ねえやなあ……。』さう云つて勞働者は笑つてゐる女房の膝にぐんなりと頭を置いて眠りかけた。
それからネクリュウドフが尙ほ少し其處に腰かけてゐる間に、老人は、自分は竈職人で、もう五十三年このかた仕事をして、今迄に拵へた竈の數は幾らとは算へきれない位ゐあるが、もう老後の休養といふ事にしたくても、どうも思ふやうには行かないと云ふ事、今迄町に居て、子供達に仕事を讓つて來たといふ事、今は故郷の村に親類を訪ねに行く所であるといふ事など話した。その話を聞き終るとネクリュウドフは立つて、タラスが空けておいて呉れた席の方へ行つた。
『さ、旦那、此處にお掛けなせえまし。』とタラスに向合つて腰かけた庭作りの男は親切さうに云つて、ネクリュウドフの顏を見上げた。
『些とべえ窮屈でも此の方が具合が好えだ。』とタラスは冴々しい聲で云つて、自分の重い袋を羽毛でも上げるやうに樂々と强い手に取つて窓際に押しやつた。『これで十分だあ。なあに、本當は手前は些とぐれえ立つてゝもえゝだけんど、腰掛の下に寢ても好えだけんど。そ

りや氣樂だでなあ。これで喧嘩しつこなしだあ。』さう云つて彼は人の好さゝうな親切深げな顏をにこにこさした。

クラスはしらふの時は言葉が思ふやうには少しも出ないが、ブランデエを少しやると何でも自由に喋るんだと自分で云つたが、實際その通りで、飲まない時は彼は無口でばかりゐた。けれども飲んで少し醉が來ると、と云つてそんな事は滅多にはなかつたが、又何か特別な場合ででもなくては餘り飲む事もなかつたが、――一旦飲んで醉が廻つて來ると、彼は非常な話上手になるのであつた。豐富に、巧みに、簡潔に、無駄がなく、虛飾がなく、殊に正直で柔和な凉しい目には如何にも親切な調子を湛へ、口元には心からの笑みを浮べて話すのであつた。

今日も彼は上機嫌で、ネクリュウドフが來たので一寸話の腰を折つたが、袋をのけて彼に腰かけさせると、自分も亦もとの所に腰かけ、その强壯な兩手を膝について庭作りの顏を眞正面に見ながら、それ迄の話のさきを續けた。女房に就いての事、どうして女房が徒刑なんぞになつたか、又彼が何故從いて一緒に行くか、それを今新しく出來た知合ひに話して聞かせるのであつた。

ネクリュウドフは其話の細かな點は今迄まだ聞いた事がなかつたので、彼も亦少からぬ感興を持つて耳を傾けた。それは毒殺騷ぎが已にあつて、フェドッシアがそれをした事が家中に分つたといふ個所からであつた。

四〇

『私あ悲しかつた事話しとりますだ。』とタラスはしみじみと懷しさうにネクリュウドフを見て云つた。『この人にも此人の悲しい事がありやしてなあ、私この人と話がよう合ひまするだ、それだで私の事を話しとりやす所でごぜえやすだ。』

『よからう、よからう。』とネクリュウドフも贊成した。

『夫でな、お前、そねえな事になつちやつたんだ。お母が其パン菓子を取り上げてな、「うら警察に行く。」云ふだよ。爺は年は取つてるが分別が深えでな、「待つた、嫁はまだほんな嬰兒だあよ、何爲ただか自分や知らねえだ。可哀さうだあ。今に自分から考え付くだから。」さう云ふだよ。だけんどお母が從かねえでさ、「この女放つときや、今に私達みんなを毒蟲みえに螫し殺しちまふぞ。」云うてな、そんでさ、お前、警察さ行つただあよ。そんで直きと事が擡つたらうでねえか。』

『そんで、お前どうしたつてんだね？』と庭作りは尋ねた。

「そりやなあ、私あがつかりしただ。辛えの辛くねえのつて、話にやなんねえさ。目が暈うてくらくらするでねえかな。爺は車に馬をつけて、フェドッシアを載せて警察に行つてな、それから裁判所に行つただよ。しるとだ、女房は直き一切合切白状してな、何處で砒素を手に入れたちふ事も、パン菓子をどうして拵えたちふ事も、みんな其處で云うたんだね。「何故そねえな事をしたのだ。」つて判事さんが尋ねるとだね、女房が云ふにやあ「何故つて、私あの男が嫌ひだから、あの男と一緒に暮す位なら、西比利亞へでも遣られる方がましでごぜえます。」つてさ、さう云うただよ。あの男つて私の事さ。』とタラスは打笑つて一寸註を入れた。

『そねえな具合で何もかも白狀しると、勿論女房は直きと監獄に入れられてな、爺だけが戻つて來ただよ。ところが又收穫時になつてな、働けるなあお母一人だけんど、もうお母も年が年だし、弱つてるだよ。そんでな、どうしたら好かんべと家中吟味して、保釋で女房を出して貰えねえかと思つただよ。それから爺は役人の所に行つて頼んだだね。だけんど駄目さ。又外の役人に頼みに行つただ。そねえな具合で五人の所へ行つただがね。それからはあきらめて、もう何もしねえ事にしただよ。しるとひよつくら裁判所の書記さんが家に見えただがな、その人は滅多にねえ悧巧な男でな、その人が云ふには「五ルウブル出しなさい、するとおかみさんを出られるやうにしてやる。」と斯うだ。それを三ルウブルにまけさして、私あ女房の麻布を質に入れ、金を拵えてやつただよ。しるとな、その書記さんが書附書えて呉れたかと思ふと、はや何うだろ。』とタラスは語を延べて、覘つた的をうまくすとんと打當てた恰好を云はうとするかのやうな調子で、『直きと一遍で思通りに行つたらうでねえか。私のからだ具合も其時は癒うなつてたで、直きと女房を受取りに町に行つたのさ。そんで、町に着いて、馬を宿屋に預けといて、書附持つて監獄に行つただね。「何の用で來た？」つて役人が聞くだからね、これこれだつて私は云つたさ、「此監獄に私の女房が入つとるだから。」つてな。「書附を持つてるか。」云ふで、私書附を出して渡しただ。役人はそれを見てから、「少し待つて居るがよい。」と云うだ。私は其處の腰掛にかけて待つただよ。もう十二時過ぎになつただ。しると上役人が來てな、「ワルグウショフてのはお前か。」と訊くだろ、「へえ、私がワルグウショフでごぜえやす。」と返答しただよ。「よろしい、それでは受取るがよい。」そして戸が開いて、女房は連れられて來ただよ、監獄の服なんぞ着ねえでさ、そりやさうでなうてはなんねえだものなあ。私あ女房に、「さ、行かう。」云ふと、「お前さん歩いて來なすつたのかね？」て訊いただよ。「いんにや馬車で來た。」それから宿屋に行て勘定を拂ひ、馬を着けて、殘つた秣は袋に入れてな、女房は腰かけて布を頭に掛け、そして二人村の方へ來ただよ。女房は其間何とも云はねえし、私も默つてをつただ。家に近くなつてから女房はやつと口を利いてな、「お母さんは

生きてゐるかね？」と訊くでねえか。「うん、生きとるだよ。」と私が云ふと、「爺さんは生きとるだかね？」「うん、生きとるだよ。」「私すまねえ事しました、許して呉んされ。私何うしただか自分でもよう分らねえだもの。」さう云ふだね。「疾うにお前にや許しとるだ、何のかの云ふ事ねえだよ。」それから女房も何とも云はねえで、そして家に歸つただよ。歸ると直き女房はお母の足元に倒げて泣くぢやねえかな。「神様の思召次第でお前も許されるぢやろ。」とお母は云うただ、爺は慰めてな、「もう過ぎた事云ふでねえ、ただ好え嫁になつて呉んな。今そねえな事云うとる暇ねえや、野良あ行かにやならん。よう鋤を入れて肥料をかけたで、神様のお蔭で裸麥がうんと茂つた。鎌や棒で分けて間を通れねえくれえになつた、實が張りきるくれえ入つて畑一ぺえに寢てるだ。刈らなきやなんねえ。おめえも明日タラスと一緒に出かけて刈りるだぞな。」さう云うただよ。それからな、お前、その時からてえもの女房働くわ、働くわ、不思議なくれえさ。其時分私共で借りてた地面は三デッシエティンぢやがな、神様のお蔭でさ裸麥も燕麥も今迄にねえくれえの出來よ。私が刈れば、女房が束ねる、それから又一緒に刈りるだがね、私も業は巧えんだが、女房の巧さ早さは又一段でな、何をしてもよくやるしなあ。そりや若うて手つ取り早うて好え女だあよ。そしてな、お前、私が止めにやなんねえくれえ働くでねえかな。それから家に歸つてだあね、手も腕もぐんなりしちよるで、もう休まなきやなんねえだろ、夫だに女房は晩食も食はねえで、直きと小屋に行て、翌日の爲めに縄を綯ふちふ働き振だあよ。全く變つたもんだなあ。」

「ぢやあ何ぢやろな、お前にも親しうするやうになつつらうなあ。」と庭作りは尋ねた。

「そりや云ふ迄もねえ事よ、親しうなつてなあ。二人ぢやけんど、一心一體さ、そして私が思つちよる事は、女房ようく覺るでなあ。腹を立てちよつたお母も後であな、「家のフェドッシアは人間がまるで別物になつただ、まるで違うた女になつただ。」云うて嬉しがつただよ。一度は二人で野良に出かけた時、車の上に二人並んで、私が斯う云うただよ、「フェドッシア、どうしてお前あねえな事考えただかね。」かう訊いただよ。しるとな、「私お前さんと一緒に暮らすのは厭だと思うたで、それよか一層死ぬべえ思うたで。」——「夫で、今はどうだね？」——「今はお前さん、私の心の中に入つてるだもの。」と斯うさ。」

タラスは其處で口を噤んで、滿足さうに頭を一寸振つたが、少し經つと又口を利いて、「それから野良で燕麥を水に浸してな、そして家に歸つただがな、しるとだ、——裁判所へ出頭せいちふ書附が來ちよるでねえかな。その事はもう私どもすつかり忘れちまうてたんだがなあ。」

「そこに惡魔がやつて來やがつたわけだあな。」と庭作りは云つた。「誰が自分の魂を滅茶滅

茶にするやうな事をするものかな、ねえ。私等の所でもな……』と云つて庭作りは自分の知つてゐる或る話を始めようとした。が、丁度その時列車が止つた。

『何處ぞの停車場だあな。どら、水飲んで來べえ。』と庭作りは云つた。

話は其處で切れた。ネクリュウドフも庭作りに續いて列車を出て、プラットフォルムの濕つた板の方へ行つた。

四一

ネクリュウドフはまだ列車から出ない前に、驛の前に立派な三頭立や四頭立の上等馬車の止つてゐるのに目が留つた。その馬はどれもよく逞しく肥つて、頸につけてある鈴を鳴らしてゐた。プラットフォルムの板の濕つて黑ずんでゐる所に來ると、又一等客車の前に一團の人だかりのしてゐるのが目についた、その中でも高價な鳥の羽毛のついた帽子を被つて雨外套を着た脊の高い肥つた貴婦人と、自轉車乘用の服裝をした脛の細い脊のひよろ長い若い男が營養佳良な大きい犬を連れてゐるのとが取り分け際立つて見えた。その二人の後ろには主人等の外套だの蝙蝠傘だのを持つた三太夫と馭者が立つてゐた。皆出迎へに出てゐるのであつた。その一團は肥つた貴婦人から馭者に至るまで、皆得意と贅澤の看板を額に掲げてゐた。

馭者は自分の長い上衣の兩端を左の手でしかと抑へてゐた。又その周りには赤い帽を被つた驛長や、憲兵や、玻璃球のついた露西亞服を着た痩せた娘や、電信技手や、二三の旅客や、なほ其他男や女や富貴權勢の崇拜家と好奇心をもつ連中は皆そこに集つてゐた。

大きい犬を曳いてゐる若い男は中學に行つてゐるコルチャアギンの息子で、肥つた貴婦人は今コルチャアギン一家を迎ふる公爵夫人の妹であつた。金筋入りの服を着て長靴を穿いた上席車掌が列車の扉をあけて、如何にも敬意を表してゐますと云ひたげに其扉の柄を抑へてゐると、玄關番のフィリップは白い前垂をかけて運搬夫と二人で、顏の長い公爵夫人を其椅子に載せたまゝ用心に用心を重ねて徐かに舁き出した。夫人と公爵の妹との間には挨拶が交はされた。公爵夫人が幌馬車で行くか幌無しに乘るか、どちらを夫人が望むかといふ事などが佛蘭西語で喋られた。そして其一團は蝙蝠傘と匣を持つた附添女中を殿りにして、待合室の出口の方へと練つて行つた。

ネクリュウドフは又會つて又別れの言葉をかけるのが厭さに、待合室の出口の方へ行く道の手前に立止つて、公爵の一行の早く行つてしまふのを待つた。公爵夫人、その息子、ミッシイ、醫者、附添女中は先きに行き、老公爵は妻の妹と並んで後より續いた。その歩きながら利き合ふ佛蘭西語の空口は稍離れて立止つてゐるネクリュウドフの耳に途切れ途切れに入

つたが、時としてよくある通り、其時老公爵の云つた一寸した言葉がその聲の調子諸共に特に彼の記憶に殘つた、それは、

『Oh ! il est du vrai grand monde, du vrai grand monde. (おゝ、あの男はそりや實際上流社會の出なんだがな。)』と老公爵が例の高い得意げな聲で云つたのであつた、そして公爵は妻の妹と肩を並べて、頻りに敬意を表してゐる車掌等や運搬人等を後ろにぞろぞろ從へながら出口の方へ行つた。

その時プラットフォルムの彼方からは木皮の沓を穿いて毛皮混りの上衣などを打掛けた出稼人の一團がめいめい袋を背にかけながらやつて來た。そしてどやどやと一等室に乘らうとすると、直ぐ車掌に叱りつけられて追つ拂はれた。それで彼等は其次の車にせかせかと急いで、互ひに足など踏み合つたり袋を扉や角に打つつけたりしながら乘らうとしたが、プラットフォルムに立つてゐた又別な車掌は夫と見るや直ぐ又荒らかに叱り飛ばした。その時ははや二三人は中に入つてたのもあつたが、叱られたので直ぐ慌てて飛び出し、そして一同は又其次の列車卽ちネクリュウドフの乘つてゐた車の方へ急いでやつて來た。すると又他の車掌が其車にも入れまいとした。で彼等は又その次の列車へと行かうとしたが、それを見たネクリュウドフがまだ空席があるから其列車に乘るがよいと云つたので、云はれるまゝに彼等は其車に乘つた。ネクリュウドフも彼等の後から續いて乘つた。そして其出稼人等が席に着かうとすると、コカルデのある帽を被つた紳士風の男と貴婦人めかした二人の女は、彼等が同席しようとするのを自分達の人格を傷け恥しめるものででもあるかのやうに思つて、彼等に席を與へまいとし、出て行けがしに露骨に振舞つた。二十人許りの其出稼人は老若色々打雜つたが、皆痩れ衰れて弱つて居り、顏は日に燒けて黑くなつてゐた。さう振舞はれると自分達が惡かつたとでも思ふらしく、又彼方へずんずん行かうと思つては、腰掛や壁や扉にめいめいの袋を打つけたりし乍ら、命令なら仕方がないから世界の涯までも行かうと思ふかのやうな、そして釘の席にも坐れとならば坐らうと思ふかのやうな、おづおづした恰好であつた。

『何處へ潛り込む積りだい、この野郎共。其處にすつこんでゐろい。』彼方から來た車掌はさう怒鳴りつけた。

『Voila encore des nouvelles ! (又變つた事があるわ。)』と貴婦人作りの女の若い方のは云つた、それは如何にも佛蘭西語をさう巧みに云つたので屹度ネクリュウドフの注意を自分に惹いたに違ひないと思ふらしかつた。併し腕環を嵌めた年增の方はそれには何とも答へず、顏を顰めてたゞぶつぶつと、あんな厭な臭のする百姓どもと一緒に腰かけてゐなければならないのかと呟いた。

出稼人等は併し危險を遁れえた者のやうなほつとした安心を覺え、重い袋を肩から外したり、それを腰掛の下に押し込んだりして、其處此處に席を求めて腰かけた。

タラスと話してゐた庭作りは自分の席を變へて、自分の隣とタラスの向ひとに三人腰かけられるやうにしてやつた。それで三人そこに腰かけようとしたが、其時ネクリュウドフが其處に來たので、彼等は彼の立派な服裝を一目見ると愕き怖れて立つて行かうとした。ネクリュウドフはそれを止めて其處に腰かけさせ、自分は中央の通りに接する腰掛の肘掛にかけた。

四二

その中の一人で五十許りになる男は同じ連れの一人の若いのと愕き恐れた視線を交へた。ネクリュウドフが紳士連の多くが普通するやうに彼等を罵つたり追ひやつたりしないのみならず、彼等に自分の席をさへ讓つたので、彼等は呆氣に取られたのである、そんなに丁寧にして貰ふのは實は却て何かひどい目に逢はされる爲めではないだらうかと思つたのである。けれどもそれらしい何等の樣子も見えず、そしてネクリュウドフは少しの蟠りもない坦々たる調子でタラスと話してゐるので、彼等も安心した、そして其若い男を自分の袋に腰かけさして、ネクリュウドフにもとの席に着いて呉れるようにと願つた。ネクリュウドフに向合つて腰かけた年取つた出稼人は、はじめの程はぢつと小さくなつて、木皮の靴を穿いた兩足もくつつけて縮め、紳士たるネクリュウドフに觸りでもしては變だと思つてびくびくしてゐた。併し間もなくタラスにもネクリュウドフにも打解けて心措きなく話すやうになり、後には自分の話の何處かに特に注意を拂つて貰ひ度いと思ふ時は、開いた手の甲で彼の膝頭を輕く叩いたりするやうにさへなつた。その話は自分の生涯の樣々な事柄で、ある泥炭の沼の仕事なども細々と語られた。そこに彼等は二ケ月半働いて、今自分達の家へ歸る所なのであつた。働いて得た金は、仕事前に借りた分を差引かれたので、皆めいめい十ルウブルづゝを家へ持つて行くのであると云つた。尙ほ彼の話す所では、彼等は朝早くから夕方まで、間に正午の休み時間の二時間を措いて、餘は絶えず膝まで水につかつて働くのだといふ事であつた。

『慣れねえちふとそりや辛え仕事でごぜえやすけれどな、』と彼は云つた、『一つ奮發してやつてみるちふで譯はねえ事で、へい。はじめは賄えが惡いで弱りやしただが、そんぢやあ堪んねえいうて皆がこぼしやしたで、へえ、それから好うなりやしただよ。そんで仕事も樂に出來るやうになりやしただよ。』

それから彼は尙ほ自分は二十八年このかた毎年出稼ぎに行つてゐるといふ事、その稼いで貰つた金はいつも屹度家にやつてゐるといふ事、それは初めは親父に後には兄に今は甥の手

に渡して家の百姓仕事の助けにしてゐるといふ事、その甥が今は家の事を切り盛りしてゐるといふ事、彼自身は一年中に五十ルウブルか六十ルウブル稼いだ中から莫代やマッチ代に二三ルウブル取る許りだといふ事などを話した。

『そんでもなあ、餘り疲れたりしやすると、些とべえブランをやりやするだ、こりや惡い事でごぜえやすだなあ。』相濟まないといふやうな調子で輕く笑つてさう云ひ添へた。

尙ほ又彼は、家の内部の事は女どもが一切切り盛りをしてゐるといふ事、出稼ぎ先きの請負人が彼等の發つ前にブランデエを半樽あけて彼等に振舞つたといふ事、それで一人は餘り飲み過ぎて死に、一人は病氣になつて今一緒に田舍に連れて行かれる所だといふ事を話した。その病人は同じ其列車の一隅に腰かけてゐた。それは若い男であつたが、顏に血色がなく、脣は紫色になつてゐた。ネクリュウドフはその傍に行つてみたが、その若者が非常に苦しげな鋭い目で彼を見るので、彼は何か問うたりして煩さがらせる事を敢てしなかつた。そして同行の年上の男に、幾那を買つて若者に飲ませるやうにと云つて、小さい紙ぎれに其藥の名を書いてやり、それから又錢をやらうとした。しかしそれは自分が錢は出すと云つて其男は紙ぎれだけを貰つた。

『私も今迄にやあ隨分となあ、』と其男はタラスに向つて云つた、『隨分と方々廻つて來ただが、あねえな紳士樣はじめて見やすだあ、私等に拳固の一つも食はせるぢやあなし、反對に自分の席あけて呉れさつしやるでねえかな。紳士樣いふが色々あるだあなあ。』

「さうだ、全く新しい異つた世界だ。」ネクリュウドフは彼等一同の筋肉の引緊つた手足や節節、手織手縫の彼等の服、日に燒けて黑くなつた疲れた溫良な彼等の顏などを見たり、又勞働に充ちた人生の實生活の悲みも悅びも一切切實な意味として嘗めてゐる全く新しい人間たる彼等の間に自分が今居る事を思つたりして、漫ろにさう思はざるを得なくなつた。

「これこそ le vrai grand monde（眞實な大きい世界）だ。」と彼は先刻のコルチャアギン公爵の空言を思ひ合せた、そして公爵等の無爲懶惰な贅澤な世界の貧弱さと無意義さを思ひやつた。

彼は湧き來る嬉しさを覺えた、恰も、探檢旅行家が美しい未知の新天地を發見した時のやうに。

第三編

一

カテュウシヤの加はつてゐる囚徒の一行は、はや五千キロメエトル許りも來た。ペルムまでは彼女も他の刑事犯と一緒に汽車や汽船で來たが、ペルムでネクリュウドフの請ひによつて國事犯の部隊に入れて貰へる事になつた。それは其部隊に居るボゴドゥウコフスカイヤがネクリュウドフに、さう盡力するやうにすゝめたからである。

ペルムまでの旅はカテュウシヤに取つては物質的にも精神的にも非常に堪へ難いものであつた。物質的には狹い處に大勢と一緒に入れられ、不潔に惱まされ、蠅や蚤に責められる辛さで、精神的には又絶間なく彼女の尻を追ひ廻す執拗い男等の居る事であつた。彼等も蠅や蚤が責めると同樣に何處に行つても煩さく絶間なく、夜毎に替りはするのであるが、一寸でも彼女をぢつとしてはおかなかつた。男囚、女囚、看守、護送兵、それ等の間には淫猥極まる風が出て來て、若い女などは夜の目も眠らず警戒してゐなければならないのであつた。その不斷の氣遣ひと苦勞は一通りの事ではなかつた。

カテュウシヤは殊にその美貌と過去が過去であつた事とて一倍煩さく附纏はれた。そして

今は彼女はそんな事は一も二もなく嚴しくはねつけるので、はねつけられた男等が怒るのは云ふ迄もなく、殆ど全部の男に恨みを買つたのである。

さういふ中でフェドッシアとタラスが近くに居て呉れる事になつたのが、先づ何よりの助けであつた。タラスは自分の女房にも似寄つた凌辱が脅かしつゝある事を耳にすると、自分も願つて囚人待遇にして貰ひ、ニシュニイ以東は一緒に囚人團と混つて女房を保護する事にしたのである。

それから國事犯の部隊に組入れて貰つたので、今はカテュウシヤの都合は萬事につけて良くなつた。國事犯になると宿舍も清潔であり、食物も稍好いものを當てがはれ、取扱ひも餘り粗暴にはされないのであつた。併し彼女が何よりも助かつたのは男等に尻を追ひ廻はされないやうになつた事で、又隨つて自分の過去を絶えず思はせられてゐた辛さを逃れるやうになつた事であつた、それは彼女が忘れ度い忘れ度いと始終思つてゐる事なのであつた。又併し彼女の周圍がさう變化した事の最も大きい意義は、彼女が自分の運命に決定的な或る影響を受けるやうになつた事である、さういふ影響を與へる若干の人達を知るやうになつた事である。

宿舍や其他は、國事犯の部と共にさせて貰ふ事になつたのであるが、併しカテュウシヤも徒歩の行程が始まると共間だけは强壯な女として、普通刑事犯の囚人團の部に組入れられるのであつた。それでトムスク以東は彼女は絶えず歩かなければならなかつた。國事犯で彼女と共に徒歩で行く者が尙ほ二人あつた。その一人はマリア・パウロフナ・シュチェティイニナと云つて、ネクリュウドフがボゴドゥウコフスカイヤを監獄に訪ねた時目に着いた仔羊のやうな柔和な目を持つた美しい娘で、今一人はヤクウトゥスクに遣られるシモンソンといふ男であつた。シモンソンも監獄でネクリュウドフの目に着いた男で、あの時襤褸の服を着て色の黑い顏をしてゐたのがそれであつた。マリア・パウロフナは或姙娠女に車上の自分の席を讓つてやり、又シモンソンは自分が優遇されるのは不當だと云つて、共に歩いて行くのであつた。

それで三人は後から船や車で出發する國事犯の部隊と別れて、刑事犯の團と一緒に朝早く立つのであつた。ある大きい町に着く直ぐ前にもさうして彼等三人は發足した。その町で囚人一同の護送指揮官は新しいのに交替するのであつた。

それは或る曇つた九月の朝早くであつた。雨が降つたり雪になつたりして、風が冷く颯々と吹いた。男が四百人と女が五十人許りの全部の囚人ははや宿舍の構内に集つた。年とつた下士の一人は二日分の食料購入券を渡した。犇々と詰めかけて我先きにと購入券を貰ふのもあれば、はや貰つて構内に來てゐる物賣女達より買ふのもあつた。囚人等が購入券を數へた

り買物したりする聲と、物賣女等の喋り立てたりふれ立てたりする聲とが混り合つてがやがやと騒々しかつた。

大きい深い靴を穿いて毛依雜りの上衣を着て其上に肩掛け代りの布を卷きつけたカテュウシヤとマリア・パウロフナは、宿舍の寢室を出て、圍ひ內の物賣女達の方へ行つた。物賣女達は風を避けて北側の塀の內に腰かけ、燒立てのパン、肉入パン、煮肴、素麵、麥粥、菓子、牛肉、兎肉、牛乳、扨ては燒豚までも列べて客を呼んでゐた。

シモンソンは雨外套を着、護謨靴を木綿の靴下の上に穿いて其上を紐で結び、やはり圍ひの內に出て出發を待つてゐた。彼は不殺生論者で、動物の皮で出來た物などは決して着用しないのであつた。入口の所に立ちながら彼は其時何か浮んだ考を手帳に書き留めてゐた。「黴菌が人間の指を觀察し點檢するとすれば、極小な彼等は人間の指を決して有機體とは思はないであらう。我々人間が此の大地の地殼を觀察するにも亦其通りで有機體とは視ないのである。それは誤つてゐる。」と。

カテュウシヤは卵とビスケットと肴と燒立ての小麥パンを買つてそれを皆袋に入れ、マリア・パウロフナは又何か買つた金を拂つてゐると、其時囚徒の間に動搖めきが起り、それから皆が默つたかと思ふと、又動搖めいて一同整列し始めた。士官が出て來て出發の命令を下した。

例に依つて人員の調査、手錠や足錠の調査があつた。と俄かに士官の怒り罵る聲と子供の泣き聲がした。それで、其瞬間はひたと動搖めきが止んでしんとなつたが、直ぐ重く鈍い呟き聲が囚徒一同の間に起つた。カテュウシヤとマリア・パウロフナは罵聲の起つた方へ行つてみた。

二

二人は其處に行つてみると、ブロンドな大きい上髭を生やした横太りのした士官が、額に青筋を立てて切りに惡罵を極めてゐた。その前に立つてゐる脊のひよろ長い痩せた、頭の半分を剃られてゐる、短い上衣に尙短いズボンを穿いてゐる男囚は、切りに泣き喚いてゐる小さい娘の子を布に包んで抱いてゐた。

『貴樣がしなきやならない事を敎へてやつてるんだ、さ、早く其子供は女どもに渡すなり何なりしろ。』と士官は怒鳴つてから、兵士に向ひ、『さ、手錠を嵌めろ。』

その男囚は從いて來た女房がトムスクで窒扶斯に罹り其子を殘して死んだので、それからは今迄自分が抱いて來たのであつた。士官は手錠を嵌めてやると云ひ、囚徒はそれでは子供

を抱いて行けないと云つて、機嫌の悪かつた士官を尙一層怒らしてゐるのであつた。

その囚徒に向合つて一人の兵と又別な一人の囚徒が立つて居り、その別な囚徒は鬚の黑い頑丈な男で片手に手錠を嵌められてゐたが、顏を曇らして士官を見てゐるところは、子供を抱いてる囚徒をも早く共まゝで自分等と一緒にして出發さして呉れないかと待つてゐるのであつた。

士官は又もや兵卒に其囚徒の抱いてゐる子供を取り離すべく云ひ付けた。囚徒等の中の不平の呟きは次第に高くなつた。

『トムスクから此方その男に誰だて手錠を嵌めさせやしねえぞなあ。』と、後ろの方から細い聲で叫ぶ者もあつた。

『手錠嵌められりや子供を何うすりや可えだな。』

『無法な事しやがるない。』といふ聲もした。

『何だと？』と士官は火のやうになつて囚徒の群の中に掻き分けて行つた。『無法か無法でないか、貴樣に見せてやる。何奴だ、今云つた奴は？　貴樣か？　貴樣か？』

『誰だて云うてまさ、餘りだあもの……。』横太りのした頑丈さうな一人の囚徒はさう云つた。

『貴樣等は一揆をやらかす積りか。』と士官は怒鳴つた、それから兵に、『この子供を取離して彼方へやれ。』そして、『今に貴樣等にはひどい目を見せてやる……。』

囚徒の群は默つた。一人の兵は無性に泣き叫ぶ女の子を引き離して取り、今一人は靜かに差出した父なる囚徒の手に錠を嵌めた。

『その子は女どもの所へやれ。』と士官は子供を抱いた兵に云ひつけて、自分の劍の緒の縺れを直した。

小さい女の子は包まれてゐる布ぎれの中からやきもきして兩手を差出し、顏を眞赤にして絶えず泣き叫んだ。群れの中からマリア・パウロフナは進み出て、

『あの、士官樣、私があの娘を抱いて參りませうと思ひますが、どうでせう？』

子供を抱いて行かうとしてゐた兵は立止つた。

『お前は誰なんだね？』

『私は國事犯でございますの。』

目の丸く大きいマリア・パウロフナの美しい顏は、士官が護送を受次ぐ時から其目に止つてゐたので、それが今は効力があつた。考へるやうな恰好をして士官は彼女を默つて見た。

『お前が抱いて行き度けりや抱いて行つてもいゝ。その子を可哀さうと思ふのは、そりや好

い事さ、だが其兒が可哀さうだからと云つて此男に錠を嵌めないで逃げられでもしたら、その責任は誰にあると思ふね？」

「まさか子供を抱いて逃げはしませんでせうよ。」とマリア・パウロフナは云つた。

「私はお前達と話をしてゐる時間がない。あの子抱くなら抱くがいゝ。」

「此の女囚に抱かせるのでありますか。」と兵は士官に尋ねた。

「さうだ、渡してやれ。」

「さ、おいで。」と云つてマリア・パウロフナは子供を受取らうとした。

けれども子供は絶えず泣き叫んで、兵の手から親父の方へと許り行かうと蹶き、マリア・パウロフナに抱かれようともしなかつた。

「それでは、マリア・パウロフナさん、私には來るかも知れませんわ。」とカテュウシヤは云つて、袋からビスケットを出して見せた。

その娘の兒はカテュウシヤの顏を見覺えても居り又ビスケットをも見たので、やつとそれでおとなしくなつた。

囚徒の群も穩かになつて、一體に靜まつた。門があいて、一同は外に出て並んだ。兵士等は囚徒の組を分けたり、袋を荷車に積ませたり、それを確と縛げたり、病弱の囚徒だけを上に載せたりした。カテュウシヤは娘の子を抱いて女囚部の方に行き、フェドッシアと列んだ。默つて始終の様子を見てゐたシモンソンは、今や何やかと夫れ夫れ云ひ付けも指圖も了つて自分の馬車に打乘らうとしてゐる士官の方へ、確とした大股な歩で進み行き、

「士官さん、今のやり方はよろしくありませんです。」と云つた。

「お前はお前の列に着け、そんな事云ふのはお前の役目ぢやないんだ。」

「それをあなたに云ふのは私の役目です、そして確かに云つて置きます、あなたのやり方はよろしくなかつた。」さう云つてシモンソンは濃い眉の下から屹と士官を見据ゑた。

「さ、準備はよいか。出發！」と士官はシモンソンには頓着なく、さう號令を下した。そして馭者の役を勤めてゐる兵の肩に手をかけて、ひらりと其後ろに乘つた。全部隊は進行し出した、そして兩側に堀のある泥濘の道を向うへと行くのであつた。その道は深く繁つた森の中をずつと先きへ行つてゐた。

三

この六年といふもの贅澤な安逸な懶惰な月日を送り、なほ二ケ月間囚人と監獄に同居した後で、今國事犯の人々の中に入つて起居を同じくしてみると、色々骨折る事も辛い事もある

とは云へ、カテュウシヤは何とも云へない愉快を覺えるのであつた。食物がよくて毎日二十乃至三十エルストを歩くのと、そして二日歩いては一日休むといふ規定とは、カテュウシヤのからだを强壯にした、又新たに得た同行の人々と交る事は、彼女が今迄に夢にも思ひ及ばなかつた新たな生涯の意義を彼女に覺えさした。

彼女は、新たに得た道連れの人々には、皆それぞれ多少の感激を寄せずにはゐられなかつたが、「マリア・パウロフナ」に對しては殊にさうであつて、深い深い敬愛を捧ぐるやうになつた。三ケ國の言葉を使ふとかいふ或る富裕な將軍の家の娘でありながら、さも極く下賤な工女か何ぞのやうに自分で身をさう保つて行つてゐるマリア・パウロフナを、彼女は愕きの目を睜つて眺めた。金持の兄より送り越す樣々な品を、マリアは皆他人に分けてやり、自分の服裝などには少しも頓着しないで、常に質素といふよりは見窄らしい樣子をしてゐた。殊に人に媚びるやうな所などは少しも無くて、而して他人の爲めに自分には薄くばかりしてゐるのが、カテュウシヤには取り分け感激の元であつた。マリア・パウロフナが自分の美貌を知つてゐる事、そして夫れを幸福と思つてゐる事、それはカテュウシヤには分つてゐた、併し又その美貌が男達に與へる印象を、彼女自らは悅んでゐるでなく反對に恐れてゐる事、そして男達が挑みかゝつて來るのを忌み嫌つてゐる事、それもカテュウシヤは觀て取つた。マリア・パウロフナを知つてゐる同行の國事犯等は、いつも彼女に惹付けられるのを感じてはゐたが、けれども夫れと彼女に見せる事は敢てしなかつた、彼女に對しては男に對すると同樣な態度をのみ取つてゐた。けれども彼女をそんな女と知らない者は、屢々彼女に挑みかゝる事があつた、そんな時は彼女はたゞ强い自分の腕の力で身を救ふのであつた、それは彼女自ら語つた所で、力の强いのを彼女は又自ら誇りとしてゐた。

『一度はね、』と彼女は笑ひ乍ら話した、『どこの紳士だか往來を歩いてた人が來ましてさ、そりや私に執拗くするつたらありやしないの、だから私、うんと挑ねつけてやつたわ、するとね、其男びつくらして逃げて行つてしまひましたのよ。』

それから彼女は、子供の時から上流生活が嫌ひで下級民を好きであつた事、それで女中部屋だの臺所だの馬小屋だのに遊んでゐてよく叱られた事、座敷だの廣間だのは大嫌ひであつた事などを話した。

『私は臺所の人達だの馭者達だのと一緒に居る方が氣持がよかつたのよ、紳士だの貴婦人だのと交際ふのは厭で厭で。』と彼女は話すのであつた。『物心つくやうになつてからはね、上流社會なんていふ私どもの生活が丸つきり誤つたもの惡いものといふ事が分りましたの、私には母はありません、父は私嫌ひですの。十九の時友達と一緒に家を出てね、ある工場の女工

になりましたわ。』

其後彼女は田舍に暮し、それから又町に出たのである、そして拘禁され、懲役徒刑に處せられたのである。彼女がさうした罪人になつたのは、他人の罪を自分が着たので、それは彼女自身の口からは話さなかつたが、カテュウシヤは他より聞いたのであつた。

カテュウシヤは彼女と知合ひになつてから、彼女が自分の爲めとては一度も何事も考へず、いつも他人の爲めに何事にも力を添へてやつてゐるのに氣付いてゐた。今の同行の一人で、ノヲドゥヲオロフといふ男が彼女の事を戯れに、彼女は慈善を道樂としてやるのだと云つたが、全くその通りで、獵師が獲物をあさるやうに、彼女の生活の一切の興味は何がな他人の爲めにしてやる機會を探す事に集注されてゐた。そしてその道樂は、彼女の習慣となり生涯の目的となつてゐた。そして彼女のする事は極く自然であつた、彼女を知つてゐる誰もが夫れを無論自明の事とするくらゐ彼女のやり方は自然であつた。

カテュウシヤが國事犯の部に組み入れられて來たはじめには、マリア・パウロフナはカテュウシヤを嫌つた。それはカテュウシヤも氣付いた。併し、後にはカテュウシヤに對しても、殊に親切にするやうに努めた、それも亦カテュウシヤに分つた、で、そんな並ならぬ人の親切を受けることを思つてみると、カテュウシヤは心の底から感激せずにはゐられなくなつた、そして知らず識らず彼女の一切の意見を自分も抱くやうになり、何事につけてもおのづから彼女を模倣するやうになつた。さう懐かれ從はれてみると、マリア・パウロフナの方と雖も亦それに感激して彼女を心より愛するやうになつたのである。

その外にも、二人を固く結び付けたものは、肉體の愛に對する二人共通の嫌惡の情であつた。一人は肉體の愛の醜惡無慙な所を知つてゐるからであり、一人はそれは知らないが、何にしても不可思議な、そして厭な、人間の品格を傷ふものと觀てゐるからであつた。

四

マリア・パウロフナがカテュウシヤに感化を與へたのは、カテュウシヤが彼女を愛したからであつた。今一つの感化はシモンソンのそれで、それはシモンソンがカテュウシヤを愛したからであつた。

あらゆる人間の一切の營みは自分固有の思想に從ふのと他人のそれに依るのとあるが、人間同志の間に存在してゐる極めて重大な差異の一つは、果してどれだけ自分の思想によつて生きて行くか何れだけ他人のそれに支配されて生を營んで行くか、その程度の差に依つて生ずるのである。或者は多くの場合に自分本有の思想に從ふとは云へ、それはたゞ精神的に遊

戯をするやうなもので、その所謂自分の分別を働かせる事宛ら調帶の脱れた動力の輪が廻轉すると同じく、實際の行爲に於ては風習、慣例、法律などといふ外部の思想を奉じて行くのである。しかし或者は自分の本當の考を自分の一切の行爲の根元とし、いつも自分の內心の要求に從ひ、他の定めた事柄にはたゞ細心な批評的考慮の後に於てはじめて從ふのである。そしてシモンソンは即ち此の後者であつた。彼は萬事を自分の理性に訴へて決定し、一旦決した以上は必ずそれを實行するといふ男であつた。

既に彼は高等學校時代の時、嘗て或る監督局の役人であつた自分の父の財產が正當な方法に出つて得られたものでない事を確めると、彼は父にそれを百姓等に戻すべく說いたのである。けれども父はその言葉には耳も傾けず、そして叱り飛ばしたので、彼はもはや父に衣食の費を貰はないで生活すべく家を出たのである。そして社會現在の腐敗は、盡く民衆に敎育が足りないからだといふ確信に到達した彼は、大學を中途で去つて民衆の間に混り、ある田舍の小學敎師となつて生徒に又百姓達に、自分が正と信ずる事は極力それを鼓吹し、不正と思ふ事は何處迄も大膽に難詰し否定した。その爲めに彼は拘引されて、法廷に喚び出された。

審理を受けてゐる間に彼は、法廷が彼に判決を下しなどする權利のないといふ確信に到着した、そしてさう公言した。けれども法官連はそれでは承知せず、なほ審理を續けて行つた、それで彼は返答無用と決心して、以後何と問はれても默り通した。その結果彼はアルハンゲルスクに徒刑となつた。其處で彼は一種の宗敎を自分で築き上げ、それで自分の一切の行爲を律した。それは地球上にある萬物は皆生きてゐるもので、死物と云つては一つもなく、我が死んでゐる無機物であると考へるものでも實は或る大きい有機體の一部分で、その有機體の何であるかを我々が理解し得ないだけである、であるから人間の爲すべき職務は、矢張その大きな有機體の一部として其全體の命を、又生きてゐるあらゆる部分を維持して行く事にある、といふ敎なのであつた。それ故彼は生きてゐる者の命を取る事を罪惡とした。彼は戰爭、死刑、その他一切の殺戮行爲、それは啻に人間に對して行はれるもののみでなく禽獸蟲魚に至るまで、苟も生あるものに對して行はれるさういふ行爲の敵であつた。婚姻に就いても彼の考は彼一流の理論であつて、それに依ると生殖は人間の最下劣な作用である、最高の作用は既に現存してゐる同胞の爲めに盡す事にある、といふのであつた。血液中に二種の血球が存在してゐるのがその何よりの證據であると彼は思つてゐた。で結婚しないでゐる人には、彼の意見に從へば、其の血球であつて、血球の任務は有機體の病弱な部分を救助して行く事であつた。彼は自身やマリア・パウロフナをさやうな血球だとしてゐた。

カテュウシヤを愛するとしても、それは其理論を妨げはしなかつた、といふのは彼はカテュ

ウシヤに理想的愛（プラトニツクラブ）を捧げてゐるからで、さういふ愛は決して弱者を救ふ事の妨げでないのみならず、寧ろそれを促進させる所以のものであつたのである。

彼は道德上のあらゆる問題をいつも彼一流の方法で解決してゐる通りに、又日常凡百の實際行爲をも彼特有の流儀で處理してゐた。日に幾時間働いて幾時間休むべきか、如何に衣食す可きか、煖爐は何うして焚けばよいか、ランプは點火（ともし）すには何うせねばならないか、とそんな事まで彼はきちんと規則を設けて定めてゐた。

彼は極く小心な愼み深い男であつた。併し彼が一旦事を決して夫れを行はうとする時は、誰もそれを制し得る者はなかつた。

さういふ男たる彼がカテユウシヤに決定的な感化を及ぼしたのは、カテユウシヤを愛する事によつてゞある。カテユウシヤはそれを女性の敏感によつて直ぐ知つた、そしてそんな非凡な男の愛を惹き得た事を思ふと、彼女は自分が偉くなつたやうな氣持を覺えずにはゐられなかつた。ネクリユウドフは寛仁な心から彼女に結婚を申出たのである、そして過去の償ひをしようといふのである。シモンソンは併し今たゞ在るが儘にして愛するのである、たゞ愛し度いから愛するのである。

又彼女は自分がシモンソンに非凡な女と觀られてゐる事を感じた、何か崇高な道義的性質を具へてゐて、それに由つて他のすべての女に秀れてゐると思はれてゐると感じた。その道義的性質を何とされてゐるかは彼女に分らなかつたが、兎に角彼女は彼に失望させ度くはないので、自分がよいと信ずる限りの身心内の一切の性質を發現させる事に努めた。出來るだけ彼女は良い人間になるようにと努力した。

それははや監獄でからの事であつた。彼女は國事犯同志が監獄で集つて話などする時、シモンソンの無邪氣な溫良な濃く靑い目が自身をぢつと見つめてゐるのを知つた事もあつた。その時すでに彼女は彼を非凡な人だと思つてゐた、そして自分が一種特別な目つきで見られてゐる事にも氣付いてゐた、又その時蓬々と亂れた髪の間から眉を引寄せて何となく奇異の思を起させるやうな目で見寄越（みおこ）した彼の表情には、子供々々した溫和と無邪氣とが籠つてゐた、それをも彼女は見落しはしなかつたのである。

それからは又別れ別れになつてゐたが、トムスクで彼女は國事犯の部隊に組入れて貰ふ事になつて、再び彼と顏を合はせるやうになつたのである。そして二人は少しも口を利き合ひはしなかつたけれども、互に尊重し合つてゐるといふ告白は見交はす目と目に見えるのであつた。後になつてからも取り立てゝ云ふに足るやうな會話が、二人の間に交はされたのではなかつたが、彼女は彼が自分の近くにゐる時は彼の云ふ言葉は常に自分に向けられてゐるも

のであり、自分の爲めを思つての言葉であり、出來るだけ自分に解るやうにとの言葉である事を感知するのであつた。けれども二人が尙一層接近するやうになつたのは、彼も刑事犯と一緒になつて徒歩で行くやうにしてからの事であつた。

五

ニシュニイからペルムまでの間に、ネクリュウドフがカテュウシヤに會へたのは二度であつた。一度はニシュニイで囚人一同が金網張の短艇に載せられる前、一度はペルム監獄の事務室であつた。二度とも彼女は、鬱いだやうな差控へたやうな調子で彼に對した。彼が彼女の健康の具合を問うたり、何か必要なもの欲しいものは無いかと心配したりすると、彼女はそれを煩さがるかのやうな、又敵意を持つてゐるのではないだらうかと思はれるやうな、前にもさうあつた不平らしい調子で應答したのである。その陰氣な氣持は、男等にしつこく付きまとはれるので起つた事であつたが、ネクリュウドフはそれで少からず惱んだ。彼は彼女が苦しさの餘りに、又長い道中の間置かれてゐる不道德極まる四圍の狀態の影響の爲めに、又もや以前のやうな自暴自棄の境に墮しはしないであらうか、それで自分に對しても亦辛く當つたのではないだらうか、そして萬事を忘れる爲めに莫もブランデエも飲み出すのではないだらうか、と恐れ氣遣つた。けれども、それから暫くは彼女に會ふ事が出來ないので、彼も何として彼女の爲めを計つてやりやうもなかつた。併し、彼女が國事犯の部に組み入れられる事になつてから、彼は自分の心配が杞憂であつたのを知つたばかりでなく、彼女と會ふ度毎に彼女の心の立派な變化が、自分の願つてゐる通り愈々立派に進行しつゝあるのを認めるのであつた。

はやトムスクで先づ會つた時の彼女は、丁度出發前の彼女であつて、彼を見て顏を曇らせなかつたのみか、いそいそと悅んで寄つて來たのである、そして彼の樣々の心盡しに禮を述べ、殊に國事犯の部に組み入れて貰つた世話の禮を述べた。

徒歩進行を二ヶ月も續けた後は、彼女の心の變化は外部にまで現はれて來た。少し痩せ、色は日に燒けて黑くなり、一體に何となく老けて見えるやうになつた。顴顬と口元には小さい皺も出來た。彼女はもはや髮を額に垂らすやうな事はしなくなり、頭は布で包んだ、そして服裝にも髮の結ひ振りにも立居振舞にも、以前のやうな艶めかしさなどは少しも出さなくなつた。彼女がそんな具合に變つたのは、尙ほ今も變りつゝあるのは、ネクリュウドフに少からぬ悅びを味はせるものであつた。

彼は今迄に覺えた事のない感じを彼女に對して覺えた。それは最初の詩的空想や、後に覺

えた官能的戀着などと共通なものではなく、又裁判の終了後に彼女と結婚すべく決心した獨りよがり式滿足の混じた義務遂行の意識感に似寄つたものでもなかつた。

彼の今の感じは彼が最初監獄で彼女に會つた時の同情と殆ど同じものであつた、なほ又其後彼女が看護長と關係したといふ話を聞いて、むらむらと湧いた嫌惡の念を抑制して而して一層強い哀憐の情を覺えたそれとほゞ同じであつた。看護長との關係云々は、其後間もなく無實な事が分明した。彼の今の感じは以前のそんな感じと同樣なものであつたが、たゞ異つてゐる所は以前のは一時的であつたが今は確立した永存的のものであるといふ事であつた。何を彼は考へようとも、又何を爲さうとも、今は彼を動かすものは同情と哀憐と親切とであつた、それは彼女に對してのみならず、すべての人に對してさうであつた。

その感じはネクリュウドフの魂の内で今まで堰き止められてゐた愛の流れを切つて落したやうなものであつた、その流れは今は會ふ人毎に向つて注がれるのであつた。

道中の始めから終りまでネクリュウドフは深い感激に基いて、會ふ人毎に思ひやり厚く思慮深く對するやうになつた、馭者や護送兵から典獄や知事に至るまで、すべてに對してさうなつた。

カテュウシャが國事犯の部隊に組み入れられるやうになつた結果、ネクリュウドフは多くの國事犯と知合ひになつた。最初はエカテリイネンブルクで、國事犯一同が大きい室に入れられて寛大に取扱はれた時であつた、それから道中で五人の男と、カテュウシャが屬してゐる四人の女と相知つた。

近く附合つてみると彼等も彼等自身で思つてゐるやうな惡黨でも英雄でもなく、たゞ普通な人間で、何處にもある通り中には良いのも惡いのも又中くらゐのもあるに過ぎない事をネクリュウドフは知つた。中には又利己的な虚榮心に驅られたものもあつた、併し多くは戰爭時のネクリュウドフによく覺えのある冒險心、血氣な青年にあり勝ちな一か八かの心に動かされた者であつた。

ますます近く附合つてみると、彼等は一般の普通人と少しも異らない事をネクリュウドフは知つた、たゞ異る所は彼等の中の良い者は普通人よりもずつと良く、彼等の中の惡い者は普通人よりもずつと惡いことであつた。亂暴で始末に困るやうな大、言壯語好きな傲慢な我利々々亡者の連中も居たのである。それでネクリュウドフは新たに知り合つた彼等の若干に對しては、立派に其人格を尊重して附合つたが、或者に對しては冷淡以上に疎外的態度を取つた。

カテュウシャ所屬の部隊には「クリルツォフ」と云つて肺病の青年が居たが、ネクリュウドフは

殊に彼を好きになつた。既にエカテリイネンブルクでネクリュウドフは彼と相知つたが、その後も道中で二三度彼と會つて話などしたのである。

夏の或る休憩日の殆ど全部をネクリュウドフは宿舍の中で彼と話し合つた事があつた。その時クリルツォフは彼に自分の話をして聞かした。監獄に入る迄の話は短かかつた。彼の父は南部露西亞の富裕な地主であつたが、彼の子供の時に亡くなつたので、彼は母の手に育てられた。高等學校でも大學でも彼は成績がよく、數學科の首席で卒業した、そして尙ほ大學に殘つて研究を續けるべく勸められ、外國留學の途にも着かせられるべく相談されたのであるが、その頃、彼はある娘と戀に落ちてゐたので何れとも決しかねてゐた。結婚して田園生活を初めようかとも考へてゐた。その時彼は大學時代の或る友人から、或る一般民衆の爲めの事業に金を出して呉れないかと云はれた。その事業の何であるかを彼は知つてゐて、又當時の彼はまだそんな事業の目的に興味を持つてゐるのでもなかつたが、友誼的な心と、又其事業に關係するのを恐れると思はれるのも厭だといふ心とから、彼は金を出してやつた。ところが、金を出して貰つた連中が拘引に逢ひ、家宅捜索の結果一通の書狀が發見され、それによつて金の出處がクリルツォフであると知られると、彼も亦引張られて監獄に打ち込まれたのである。

彼は放免になると直ぐ南方へ行つたり彼得斯堡へ行つたり外國へ旅したり、又キエフだのオデッサだのへ行つた。然るに自分が十分信任してゐた或る友人に密告されて、彼は又拘引され法廷に据ゑられたのである。そして二年間又獄に押込められた揚句、死刑の宣告を受けたのであるが、後減刑されて無期徒刑となつたのである。

彼が肺病になつたのは獄中での事で、なほ又今の狀態で行くならば、せいぜい一二ケ月くらゐしか彼の命の續かない事は分りきつてゐた。彼自身もそれは知つてゐた。

六

出發間際に子供の件で士官と囚徒連の間に一場の紛紜があつた日は、ネクリュウドフは宿屋で寢過した、そして尙ほ次の縣廳所在地で出す積りの手紙を一二通書いたので、宿を出たのは平常よりも遲く、隨つて囚人の部隊に途中で追ひ付く事は出來なかつた。それで件の部隊が宿舍を張つてゐる村に着いたのは、夕方になつてからであつた。首の非常に肥つて白い老婆が采配を振つてゐる宿屋に着いて、彼は雨や雪に濡れた服などを乾かし、聖像だの其他の額だのを澤山飾つた清潔な一室に落着いて茶を飲んでから、囚徒部隊の宿舍に行つて面會の許可を士官に乞ふべく出かけた。

その時まで六ケ所の宿舍では、どの士官も度々交替はしたが、ネクリュウドフを宿舍に入れる事は許さなかつたので、今は彼は一週間以上カテュウシヤに逢はずにゐるのであつた。そんなに事が嚴格になつたのは、監獄制度に關係ある或る高官が其地方を通過するからであつた。併しその高官は囚徒部隊の宿舍は巡檢しないで行つてしまつたので、もう可からうと思はれた。で、その日の朝指揮を引繼いだ士官も今迄の數人の士官と同樣面會を許すだらうとネクリュウドフは思つた。

宿の女主人は其宿舍は村端れにあるのだから馬車で行きなるさがよからうと勸めたが、ネクリュウドフは歩いて行く事にした。樺の脂を塗つた大きい長靴を穿いた肩幅の廣い體格の雄偉な若者が彼を案内した。靄が濃くて暗が深いので、若者は二三歩前に行つてゐるのであるが、その姿がネクリュウドフに見えない位であつた、通りの家々の窓の燈りも見えなかつた、たゞ、若者が大きい長靴で泥濘の中を行く音が聞えるのみであつた。ある寺院の前を過ぎて明るく照らされた或る長い通りを抜けると、彼は案内者と共に村端れに來たのであつた。そこは又暗かつた。併し又程なく暗の中に、靄を透して來る赤い燈影が見え出した、それは囚徒宿舍の燈であつた。その燈は次第に大きくなり、塀が見え、番兵の黑い姿が見え、燈の着いてゐる柱が見え、番兵小屋が見えた。番兵は例によつて誰何した。そして二人が共宿舍に無關係な者である事を知ると、非常に嚴格に構へ、塀の外に待つ事すら相成らぬと云つた。併し若者はそれでぶくともしはしなかつた。

『何だとえ？　何をお前さん憤々しちよるだあね。』と若者は番兵に云つた。『下士官さんを呼んどくなされ、それまで待つちよるだ。』

番兵はそれには何とも答へなかつたが、門の内に向つて何とか叫んだ、そして其處に立ち乍ら、體格の偉大な件の若者が燈の下でネクリュウドフの長靴の泥を木の片で落してやるのを屹とした目つきで見た。塀の内側では男女の聲が混り合つて聞えてゐた。二三分も經つと錠前をあける音がして小さい門が開き、外套を着た下士が暗の中から出て來た、そして用件を尋ねた。ネクリュウドフは用意して來た名刺を渡した、それに彼は個人としての用で士官に面會したい旨を書いておいたのである。

下士は番兵ほどに嚴格ではなかつた、その代りに切りに好奇心を募らした。彼はネクリュウドフが何ういふ人であるか、又何の用で士官に會ひたいかを知り度がつた、又何がしか心付けを貰ひ度がつてゐる樣子であつた、そして取り逃がしてはならないと思つてゐるらしかつた。ネクリュウドフは或る特別な用で士官に會ひ度いから、會はして貰へば屹度禮を述べる由を云ひ、名刺を取次いで貰ふやうに賴んだ。下士は名刺を受取り、打頷いて塀の内へ行

つた。少し經つと又その小さい門が開き、樺の皮で作つた桶樣のものだの籠だの甑だの袋だのを持つた三四人の女が、西比利亞の方言混りにべちやべちや喋り乍ら出て來た。女達は一人も田舍風をしてはゐないで、皆都の者のやうな服裝をし、外套を着てるのもあれば毛皮をつけてゐるのもあり、裾は高く端折つて頭には布を卷いてゐた。物珍らしさうに彼女等はネクリュウドフと其案内人を見た。その中の一人は若者と出逢つたのを悦ぶらしく、西比利亞風の語調で直ぐ冗談の惡口を浴せかけた。

『何しちよるだあね、こねえな處でさ。妖怪みてえにさ。』

『お客樣をお連れして來ただあ。』と若者は答へた。『お前さんは何持つて來ただあね。』

『牛乳よ。明日は又早う來るだよ。』

『泊つてけたあ云はれぢやつたかね？』

『又彼樣な事べえ……。このお喋り。』と女は笑つて叫んだ。『そねえな事云はねえで私ども村まで送つて來な。』

若者は其女に又何か云つて、女達を笑はした許りでなく、番兵をも笑はした、そしてネクリュウドフに向ひ、

『お客樣お一人で歸り道は分りやせうなあ？　迷兒になる事なかんべえなあ。』

『うん。おれ一人で分るよ。』

『お寺の前を通り抜けさしやつたら、それから三階屋がありやして、その二軒目を右側ですからな。さあ、この杖あげときやするだ。』と云つて彼は自分が杖いて來た人丈け程もある杖をネクリュウドフに渡した。そして彼はその大きい長靴で泥濘の中を女達と一緒に闇の裡へ消えて行つた。なほ少しの間は、若者の聲は女達の聲と雜つて聞えた。そこに再び小さい門があいて下士が出て來た、そしてネクリュウドフを士官のところへ連れて行くべく内へ入れた。

七

一行の宿舍は大きいのも小さいのも皆、廣い西比利亞街道に沿うて上の尖つた柱で柵を廻らしてある廣い一構への内に並んでゐた。その構への内には、二階なしの家が三棟あつた。その一等大きいのには窓に格子が嵌めてあつて、そこに囚徒が入れられて居り、次のには護送の兵士が、又別なのには士官や事務員が詰めてゐるのであつた。

三棟の家の内には皆燈が點されてゐて、いつも其内では殊に明るく照らされてゐる室々では何かさも娯しい愉快な事でもありさうに見えるのであつた。どの入口にも球燈が點つてゐ

たが、その外にも柵内には五つの燈が點されてあつた。

下士は板の上を踏んでネクリュウドフを一等小さい家の入口の階段の前へ連れて行き、その段を三つ登つて夫れからはネクリュウドフを一人先きに行かせ、煤けたランプに照らされてゐる石炭の匂ひのする玄關の室に通した。そこには粗い布の肌着を着て、襟布をつけ黑いズボンの上より長靴を片方だけ穿いた兵卒が、煖爐の傍に腰かけて片方の靴でサモワアルの火を煽いでゐた。

ネクリュウドフを見るとサモワアルは其儘にしておいて直ぐ彼は其の外套を脱いでやり、そして次の室へ行つた。

『お客が來られました、閣下。』

『ちやあ此處へ通せ。』とがみがみ云ふ聲が聞えた。

『どうぞ此室へ。』と兵はネクリュウドフを案内してから、直ぐ又サモワアルの火を煽ぎに取りかゝつた。

次の室は吊ランプで明るく照らされてゐて、食物の殘りや二本の壜などが載つてゐる卓の彼方に、赤い顏をしてブロンドな上髭の多い士官が、胸から肩へかけて丸みを持たせて張つてゐる塡太利式の短い上衣を着て椅子にかかつてゐた。室内には、莫の匂ひの外にも一種鼻を突く厭な臭氣があつた。士官はネクリュウドフを見るや立上つて、物を粗略にするやうな賤むやうな目付で、彼の樣子恰好を見上げたり見下ろしたりした。

『どんな御用ですかね。』と尋ねたが、その答を待たずに戸口の方へ向つて怒鳴つた。『ベルノフ、サモワアルは何うした？　まだか？』

『直ぐであります。』

『貴樣の「直ぐであります」が當てになるか、覺えつくやうに夫れこそ直ぐ打叩いてやるぞ。』と士官は目を光らして叫んだ。

『只今持つて參る所であります。』と云つて兵卒は實際サモワアルを持つて入つて來た。

ネクリュウドフは兵卒が茶器を据ゑてしまふまで待つた。その間に士官は兵卒の何處を撲つてやらうかと探すかのやうに意地惡げな小さい目で見てゐた。

サモワアルが据ゑられると、士官は茶を立てた。そして旅行用鞄よりコニャクの入つた四角な壜とビスケットを出して卓の上に置き、そして又ネクリュウドフに向つて尋ねた。

『で、どんな御用ですかね。』

『ある女囚に面會を許して戴き度いと思ふのです。』とネクリュウドフは椅子にはかけないで云つた。

『國事犯の女囚にですか。國事犯なら法律で禁じられてゐます。』
『國事犯ではありません。』
『さ、どうぞおかけ下さい。』
ネクリュウドフは腰かけた。『國事犯ではありませんが、特に乞うて國事犯の部に組み入れて貰ふ事に許可された女です。』
『あ、さうですか、分りました。』と士官は彼の言葉を中途より奪つて、『あの色の黒い小さい女ですね。よろしうございます。どうですお茸は。』
さう云つて彼は卷茸の入つた小さい匣をすすめ、又二つの茶碗に注意して茶を注ぎ、その一つをネクリュウドフの前にやつた。
『どうぞ。』と彼はすすめた。
『有り難う。その女囚に私は面會したいのですが……。』
『まだ時間がありますよ。呼びにやりませう。』
『呼んで戴かないで私が行く事は出來ますまいか。』とネクリュウドフは尋ねた。
『國事犯の部にですか。それは禁ぜられてゐるんです。』
『以前には幾度も許されましたがね、そして若し又私が何か内密に品物でも彼等に遺るとの

お疑ひなら、それは彼女だけに會へても彼女に賴んで遺れるわけですからね。』
『いや、さういふ譯ではありません、女囚の方は身體檢査を受けるのですから。』と士官は一種卑陋な笑ひ方をした。
『では、私の身體檢査をして貰ひませう。』
『それは不必要です。』と云つて士官は壜の栓を拔いてネクリュウドフのグラスの方へ持つて行き乍ら、『如何です？　では、どうぞ御自由に。此の西比利亞で教育のある者が暮して行く事は何うもえらいものでしてなあ。我々の勤めといふものは、御存じの通り辛いものでしてな、他方面の事に趣味だの理解だのを持つてゐると、こんな職務には實にやりきれませんよ。さうして世間では何と云ふかと云へば、護送兵の士官なんてものは無教育な粗暴な者に過ぎないといふんですからね、他方面の天禀を持つてゐるかも知れないなどといふ事は考へてみても呉れませんからね。』
士官の赤い顏と、其つけてゐる香水香油の匂ひと、幾つも嵌めてゐる指環と、殊にその不愉快な笑ひがネクリュウドフには堪らなかつた。けれども此道中の始めから萬事に質實な謙抑な心持でゐる彼は、何人に對しても輕卒な態度は取らない事にして居た、今も亦その積りでゐるのであつた、寧ろ、相手に應じて調子を合せて行かうと思つてゐるのであつた。それ

で彼は士官の云ふ事にも耳を傾け、その精神的態度がどんな程度にまで進んでゐるかを理會した上で、屹とした口調で云つた。

『あなたの職務では、人々の苦しみを輕減してやつて、そこに滿足を感じられさうなものと私は思ひますね。』

『人々の苦しみつて、どんな苦みなんです？　囚徒連中と來てはそりや始末に了へない者共ですからね。』

『始末に了へないつて、何うして特に始末に了へないんです。他の一般人と異りはないぢやありませんか、中には無罪な者もあるぢやありませんか。』

『そりやさうです、あらゆる人間が居るんです、そりや無論です。だから憐みをかけてゐますよ。餘人は彼等の云ふ事をちつとも聞き入れてやりませんが、私は何うかして良くしてやらうと許り努めてゐるんですよ。私は彼等を苦しめるより自分で苦しむ方がましなんです。餘人は細かい事にまで規則を振廻はして嚴しくするのですが、私は彼等には同情してゐるんです。如何ですか、茶は？』と云つて彼は尙一杯茶を注いでやり、『その、あなたの御面會なさらうといふ女は一體どんな女なんです？』

『不仕合せな女です。全く罪はないのですが、毒殺の犯人として宣告を受けたのです。併し實際極く善良な女なんです。』

士官は頭を傾けた。

『えゝ、そんな事はありますね。カザンでも一人ね、エンマと云つて匈牙利生れの女がありましたよ、全く波斯風の目を持つてましてね。』と士官は云ひ續けながら、思ひ出し笑ひを禁じかねつゝ、『それに樣子恰好がまるで伯爵夫人とでもいひさうにしてゐましたよ……』

ネクリュウドフは士官の言葉を中途で遮つて、前の話にした。

『あなたに權力が委ねられてある限りは、あなたは今のやうな人達の境涯を樂にしてやれるぢやありませんか、さうしてさういふ事をなさるのが屹度あなたの愉快だらうと私は信じます。』とネクリュウドフは、外國人か子供にでも話すやうに、出來るだけ分り易くと努めてさう云つた。

士官は目を輝かしてネクリュウドフを見つゝ、彼が一刻も早く云ひ終るやうにとさも待ち兼ねるらしく、そして波斯風の目を持つた匈牙利女の事を早く話し續け度さうであつた。その女の事が今最も強く彼の回想に浮び出て居り、さうして最も強く彼の感興を惹いてゐるのであつた。

『さうです。あなたの仰しやる通りです。私も氣の毒に思ひます。併し私はそのエンマと

いふ女の事を話さうと思つてゐました、……その女がどんな事をしたか、……それを……。』

『そんなお話には私は興味を持ちません。』とネクリュウドフは云つた。『私も以前は今とは全くちがつた人間でしたが、今は婦人關係の事は嫌ひです、これはきつぱりあなたに云つて置きます。』

士官は愕いてネクリュウドフを見た。

『いま一杯茶を如何です。』と尋ねた。

『いえ、もう澤山です。』

『ベルノフ。』と士官は呼んだ。『此のお方をワクウロワの所へ御案内せい。さうしてワクウロワに云ふんだ、このお方を國事犯の別室にお通しするやうにな。點呼までは彼處においでになつていゝんだからな、其積りで云つとけ。』

八

兵卒に案内されてネクリュウドフは再び球燈の光の少い廣場に出た。

『何處へ行くんだ。』と向うからやつて來た一人の兵はネクリュウドフを案内して行く兵に尋ねた。

『五號室だ。』

『此方からは行けないよ、戸が閉つてる。彼方の入口から行かなくちや駄目だ。』

『何故此方は閉めてあるんだい。』

『曹長が閉めたのだ、そして村へ行つたよ。』

『さうか。ぢやあ、どうぞ此方へ。』

兵はネクリュウドフを板敷の道を踏んで別な入口の方へ案内して行つた。まだ廣場を行く頃から、内部の人聲が蜂の呻つてるやうに聞えたが、次第に近くなつて其の入口の扉が開くと、聲は一層高くわあつと響き、互に叫び合ふのと罵るのと笑ふのが混り合つて溢れてゐた。ぢやらぢやらと鎖の鳴る音も聞え、例の厭な重苦しい臭ひもぷんと人の鼻をつくのであつた。

耳に來る其騒々しさと鼻を打つ悪臭とがネクリュウドフには息を窒まらせるやうな感じを覺えさせた。それは道徳上の嘔吐感で、とりもなほさず實際の嘔き氣を催させ、一方は他方を刺戟して互に愈々堪へ難く募り行くのであつた。

入つて直ぐの室には悪臭の強い大きい桶があり、其室から向うへずつと廊下があつて、其廊下に小さい入口が又幾つもついてゐた、それが囚徒の入れられてゐる室の入口なのであ

る。最初の室は夫婦者連の室で、その次の大きいのが獨身者どものであり、廊下の端の二つの小さいのが國事犯の室とされてゐた。收容の定員百五十名とある建物に、今は四百五十名を容れてゐるのであるから、囚徒等は室の内ばかりに居る事出來ず、廊下にも溢れ出てゐるといふ有様であつた、腰かけてゐるのもあれば、床の上に寢てゐるのもあり、茶瓶の空いたのや入つたのを持つて行つたり來たりしてゐるのもあつた。

タラスも其中に居たので、ネクリュウドフの方へやつて來て嬉しさうに挨拶した。彼の柔和な顏は鼻の上や片方の目の下を引つ搔いた痕が靑く赤くついて變になつてゐた。

『どうしたんだね？』とネクリュウドフは尋ねた。

『なに、一寸べえ何しやしてなあ。』とタラスは笑つた。

『此奴等いつも喧嘩ばかりするのであります。』と兵は彼等をさも賤しむやうに云つた。

『痴話喧嘩だあ、』とタラスの後から從いて來た一人の囚徒は云つた、『盲目のフェエドカと夫婦がゝりで打ち合うたでさあ。』

『フェドッシアは何うしてゐるね。』とネクリュウドフは尋ねた。

『壯健で居りやすだ。私今茶瓶を持つてつてやる所でどぜえやす。』と云つたタラスは、夫婦者連の室に入つた。

ネクリュウドフは戸口から内を一寸覗いてみた。内には男や女が寢床の上にも下にもうようよしてゐて、濡れた着物を乾かしてゐる匂ひが一ぱいであつた。ひいひい云ふ女の聲が絶えず聞えた。

次の戸口は獨身者の室に入るのであつた。その室は尙ほ一層こんでゐた。戸口の邊りにはじめじめと濡れた服を着けた囚徒等が、何やらがやがや騒いでゐた。何か相談でもしてゐるといふ具合であつた。

兵卒がネクリュウドフに話して聞かせる所によると、それは食券を分けて貰つてゐる所であるが、囚徒等はそれを前以て古トランプで拵へた札で賭をして負けたのが大分あるとの事であつた。ネクリュウドフと兵卒がやつて來るのを見ると、近くの者どもは直ぐ口を噤んで、疑ひ深い憎さげな目で見迎へ見送つた。その一群の中に、ネクリュウドフは知つてゐるフェドオロフといふ囚徒の居るのにも目がついた、なほ又一層厭らしい痘痕顏で鼻の無い浮浪者も目にかゝつた、その浮浪者は西比利亞の荒野に逃げて或る仲間の肉を喰つた事のある男だといふ事であつた。濡れた獄衣を、一方肩から引つかけて廊下に立つてゐた其浮浪者は、ネクリュウドフを蔑すむやうに圖々しげに見て、道をあけてやらうともしなかつた。ネクリュウドフは避けて通つた。

かうした光景ははやネクリュウドフの十分に知つてゐる所ではあつた、又彼はこの三月が間に彼等刑事犯人のありとあらゆる狀態を親しく視もした、炎暑の中を鎖を引摺つて埃の雲を捲き起しながら歩いた道中の樣子も、休み日の彼等の起居動作も、暖い日などに構ひ內の隅などで彼等が言語道斷な眞似をしたりするのも、今迄にネクリュウドフは十分視たのであつた、——それでも彼は彼等の中に來てみる度毎に、囚徒一同の注視を受けるのを感じていつも同樣な壓倒されるやうな羞恥と、彼等に對して相濟まないといふやうな毎度同じ心持を覺えないわけには行かなかつた。

殊に彼が堪へ難く感ずる事は、さういふ羞恥とさういふ相濟まない心持とには屹度又制する事の出來ない嫌惡の情が附いてゐる事であつた。斯樣な境涯に置かれてゐる以上、彼等がより良い人間になる事の出來ないのは、ネクリュウドフにも分つてゐた、それでもネクリュウドフは彼等に對する嫌惡を抑制する事は出來なかつた。

『あの仕事無しか、あの男は結構なもんさ。』ネクリュウドフが國事犯の室に近く來た時、さういふ聲が後ろの方でした。そして尙ほ毒々しい惡口が附加へられた。

續いて意地惡い嘲笑がどつと起つた。

獨身者共の室の前を通り過ぎてから、案內して來た兵卒はネクリュウドフに、點呼前に呼びに來ると云つて引返した。兵卒が引返して行つたかと思ふと、一人の囚徒が鎖を音のしないやうに手で抑へて忍び足に併し急いでネクリュウドフの直ぐ傍にひたと寄つて來た、酸つぱいやうな匂ひを漲らしながら。

『旦那さあ、どうぞお助け下せえまし。』さう囚徒は內緒聲で囁いた。『あいつ等皆であの若えのを誑らかしやしただ。酒飲ませやしてな、醉つ拂はせやしただ、そして今日の點呼にカルマアノフだて名乘れ云うてやすだ。どうぞ、旦那さあ、あの若えのを助けて下せえまし。私にや出來やしねえだ、私が云ひやすだと皆で私を叩き殺してしめえやすだから。』と囚徒は心配さうに四方に目を配つて云つた、そして直ぐ引返した。

それは懲役囚のカルマアノフといふのが、自分に顏のよく似た移住刑の若者を自分の身代りにすべく巧く說き伏せたのである。

ネクリュウドフは其話は旣に知つてゐた、一週間前に今さきの囚徒より聞いてゐたのである。それで彼は、分つた、よし、出來るだけの事はする、といふ知らせに肯いて見せた、そ

して後見返りはせずに向うへ行つた。

今の囚徒はネクリュウドフはエカテリイネンブルクで彼は、自分の女房が自分に從いて來たいと云つてゐるから其願を聞屆けて貰ふやうに盡力して下さいとネクリュウドフに賴んだのである、そして自分の罪に落ちた不思議な話も其時して聞かしたのである。彼は三十年輩の普通の百姓風な中肉中脊の男で、殺人强盜未遂犯として懲役徒刑に處せられたのである。彼はマカアル・デイエフキンといふ名であつた。彼の犯罪は非常に奇異なもので、彼自身がしたのでなく、全く惡魔の所業だと云つてネクリュウドフに話したのである。彼の親父の許に或る旅人が立寄つて、四十エルスト距ててゐる次の村まで三ルウブルで橇を賴んだので、親父はマカアルに旅人を載せて行くべく云ひつけた。マカアルは馬をつけて服を着かへてから、旅人と一緒に茶を飲んだのであるが、その時旅人は、モスカウで働いて得た五百ルウブルを懷中してこれから婚禮の場に行くのだと話した。それを聞くとマカアルは外に出て、斧を一挺持つて來て、橇に載せた藁の下に入れたのである。

『何しに斧持つて來やしただか、私にも分りましねえで、へえ、』と其時マカアルはネクリュウドフに話したのであつた。『たゞねえ、「斧持つて行きねえ。」さういふ聲が何處かでしやしただあよ、夫で持つて行きやしただ、へえ。それから橇に客人と一緒に乘つて出發しやしただ、そして大分行きやしたがな、もう私斧の事は忘れてやしただあ。それから、はや村に近うなつて、もう六エルスト許になすりやとな、道が少し登りになつてやすだ。そんで私だけ降りて橇の後から從いて行きやするとな、「何考えるだ、此處登つちまへば人が多勢居るだぞ、それから直き村だぞ、しると客人は金持つて去んで終ふだ、早くやつちめゑ、愚圖々々しる事ねえだ。」又さういふ聲がしやすだよ。私は蹲んでな 藁をよう直すやうな風をしやしただよ。しるとな、斧奴が丁度自分から私の手にへえり込んで來たやうでごぜえやしただ。客人は振り返つてな、「何しちよるだね。」さう云ひやしただ。私は斧を振り上げて打つてかゝらうとしやしたがな、向うは强え人でな、橇から飛降りて私の腕をしかと捕まへやしただよ。「何爲るだあ、この惡黨奴。」さう云うて私を雪の中に投げ込みやしただ。そんでも私は手向ひしねえで、される通りになつてやしただよ。客人は私の手を自分の帶で縛り上げて、又橇に打ち載せて、さうして警察へ橇を走らせやしただ。私は拘留されやしてな、それから裁判所へ引張り出されやしただ。村の者は皆、私の爲めに好えやうに云うて呉れやしてな、良え男だ、惡い所ちつともねえだ、さう云うて呉れやするだし、私が奉公しとりやした親方達もさう云うて呉れやしただけんどな、金がねえで、へえ、辯護士賴む事出來ねえもんで、へえ、

そんで四年の懲役にされやしただあよ。』

その男が今、危きを冒して同村の若者を救はうとするのであつた。自分が告げ口をしたと皆の者に知られれば、屹度縊め殺されるにきまつてゐる程の祕密を、今ネクリュウドフに洩らしたのであつた。

一〇

國事犯の收容されてゐる所は狹い二室から成つてゐて、その入口の前の廊下は別に仕切つてあつた。ネクリュウドフは其仕切りの内に入ると、すぐシモンソンが目に着いた。シモンソンは短い上衣を着て竈の前に蹲み、一束の薪を手にして丁度焚きつけてゐる所であつた。あけてある竈の口から熱氣はかつかつと外に出てゐた。

彼はネクリュウドフを見ると、蹲んだまゝ手を差延べて握手を求め、濃い眉毛の下からネクリュウドフを見上げて、

『あなたが來て呉れたので大變よかつた、是非あなたにお話せねばならないことがあるんです。』と如何にも重大な用がありさうな顏つきをして云つた。

『どんな事です。』とネクリュウドフは尋ねた。

『後で云ひます。今は仕事をしてゐますから。』

そしてシモンソンは又竈の方に向き直つた。彼は竈をも彼一流の理論によつて出來るだけ薪を少く費して熱を多く起させるやうに努めてゐるのであつた。

ネクリュウドフは其處を通り過ぎて最初の入口の前に行かうとすると、丁度その時次の入口からカテュウシヤが身を屈めて塵を竈の方へ小さい箒で掃いて出て來た。白いジヤケツの上に繡ひをした上衣を着て、頭は塵を避けるため布を深く被つてゐたが、ネクリュウドフを見ると顏を眞赤にして立ち上り、慌てて箒を傍に置き、上衣の端で手を拭いて其前に來た。

『お掃除ですか。』と云つてネクリュウドフは握手を求めた。

『えゝ、私の昔の役目ですわ。』と彼女は微笑みながら云つた。『本當にそりや穢くつてね、想像もつかない位なのでございますわ、でもすつかり掃除しましたの。』

それからシモンソンに向つて、『プレエドは乾いて？』

『大抵いゝでせう。』と云つてシモンソンは一種變つた目付で彼女を見た、その目付にはネクリュウドフも氣が付いた。

『さう、ぢやあ今度は上衣を乾しませうね。』それからネクリュウドフに、『みんな其方の間にゐますの。』と云つて、自分は又出て來た戸口に入つた。

ネクリュウドフは其戸をあけて小さい室に入つた、其處は低い臺の上に載せてある金屬製のランプでぼんやり照らされてゐた。冷々して、埃や莨の匂ひが漂ひ、またじめじめした。ランプに近い所だけは明るかつたが、寢床は皆暗く、壁には人の影が大きく動いてゐた。

食糧の心配をしに而して湯を取りに男が二人出てゐるきりで、餘は皆その室に居た。ネクリュウドフの以前からの知合のエエラ・エフレモフナも例の不安さうな大きい目をして、額には青筋を見せながら、一段と痩せ細り一段と黄色くなつて、短い髪をして鼠色の上衣を着てゐた。莨を載せた新聞紙を前において、拙さうな手つきで卷莨を拵へてゐた。

國事犯の中でネクリュウドフに一等愉快な感じを與へるエミリエ・ランツェエワといふ品の良い女も其處にゐた。彼女は内部の家事を處理してゐる方で、こんな亂雜な裡でも物事を温い家庭的なものにして行く女らしい器用さと嗜みを持つてゐて、今もランプの傍に腰かけながら、袖を捲つて日に燒けた赤い腕を出し、皿や茶碗を巧みに拭き、臺の上に擴げた布の上に並べてゐた。彼女は格別美しい女ではなかつたが、悧巧さうな温和な顔つきをしてゐて、又笑ふ時は其顔はいつも急に冴えて生き生きとなり、陽氣にもなり魅力をも帶びるといふ特長を持つてゐた。今も同じ其微笑を嬌と浮べて彼女はネクリュウドフに挨拶した。

『もうあなたは露西亞の方へお歸りになつたのでせうつて、皆さう思つてゐましたわ。』

マリア・パウロフナも隅の方の物蔭にゐた。そして髪のブロンドな小さな娘が、何やら頻りにあどけない聲で喋つてゐるのに相手をしてゐた。

『まあ、あなた本當によく來て下さいましたわね。カティヤさんにお會ひになりまして？』

とマリア・パウロフナは尋ねた、『御覽なさいまし、お客が出來ましたの。』さう云つて娘の子を指した。

アナトオル・クリルツォフも居た。羅紗の靴を穿いた兩足を組み合せて、寢床の隅に坐りながら、蒼白い顔をして痩せ衰へて前屈みになつて慄へてゐた。兩手は毛皮雜りの上衣の袖口に互ひに差し入れて、熱が出てゐさうに目を輝かしてネクリュウドフを見た。

ネクリュウドフはクリルツォフの方へ行かうとしたが、戸口の右側に雨外套を着た赤い縮れ髪の眼鏡をかけた男が腰かけて、袋の中に何やら探しながらグラアベッツといふ嫵々顔の美しい女と何か話し合つてゐた。その男はノヲドゥヲオロフと云ふ名であつた。ネクリュウドフは急いで其男の方へ行つて挨拶した。それは國事犯全部の中で彼のみがネクリュウドフには不愉快な人物だつたので、なるたけ早く挨拶の手數だけを濟さうとネクリュウドフは思つたのであつた。ノヲドゥヲオロフはびかびかする眼鏡越しに、ネクリュウドフを其碧い目で見て、幾らか陰氣らしい顔つきをしながら其細い手を差しのべた。

『どうです、御旅行は面白いですか。』と彼は諷刺的な調子で云つた。
『えゝ、いろいろ有益な事を知りました。』とネクリュウドフは諷刺の調子には氣付かないかのやうに、たゞ親密として受入れたかのやうに答へた。そしてクリルツォフの前に行つた。
表面はネクリュウドフも平靜の態度を裝つた、けれども決して穩かではあり得なかつた。何がなネクリュウドフが不愉快に思ふやうな言を云つてやらう爲てやらうと、如何にも努めるらしかつたノヲドゥヲオロフの言葉は、ネクリュウドフのそれ迄の安靜を妨げた。彼は窒息させられるやうな陰鬱な氣持を覺えた。
『どうです、健康狀態は？』とクリルツォフの慄へてゐる冷い手を握り乍ら彼は尋ねた。
『まあ何うにか落着いてゐます。けれども溫まらないのには弱つてゐますよ、そしてじめじめしてね。』そしてクリルツォフは直ぐ又手を引いて毛皮混りの上衣の袖口に入れた。『そして此處の寒さつたらありませんからね。あの窓は壞れてるし。』と云つて玻璃の二枚破れてゐる窓を指した。『あなたは如何です。どうして今迄は來なかつたんです？』
『面會を許されなかつたんです。規則が六ケ敷くてね。やつと今度あの士官が割合に親切にしてくれたのです。』
『さうだ、本當にあの士官は親切ですね。』とクリルツォフは反語を使つた。『マアシヤ（マリ

ア・パウロフナ）さんに聞いて御覽なさいよ、今朝あの士官がどんなことをしたか。』
マリア・パウロフナは同じ處に腰かけたまゝで、今朝出發の際に娘の子の事で擾つた一條を話した。
『私は皆が團結して抗議しなくちゃいけないと思ふわ。』とエエラ・エフレモフナは屹とした聲で云つた、けれども妙に落着かない曖昧な不安な顏つきで他の人々の顏を見た。
『抗議したつて何になります。』クルリツォフは忌々しげな顏を見せた。彼は彼女の人爲的な虛飾的な調子と神經質な所とを以前から好かなかつたらしかつた。『カテイヤさんに會ひ度いのでせう？』と更にネクリュウドフに向つて、『カテイヤさんはいつもよく掃除をして呉れますよ、何でも綺麗にして呉れますよ、今は男の室を掃除して終つたので女の室にかゝつてゐます。たゞ蚤だけがあの人の手にもあまるんですね、どうも蚤の食ふには困つちまふ。それはさうとマアシヤさんは何をしてゐるんでせうね？』マリア・パウロフナの居る隅の方を頭で指し示すやうにして彼は訊いた。
『養子娘の髪を梳いてやつてらつしやるのよ。』とランツェエワは答へた。
『また此方へ虱なんか飛ばすんぢやありませんかね。』とクリルツォフは尋ねた。
『いえ、大丈夫、十分用心してそつとやつたわ。もうすつかり綺麗になりましたの。』と云つ

てからマリア・パウロフナはランツェエワの方へ向いて、『この娘を預つて下さいな。私カテュウシヤさんに手傳ひに行くから、そしてプレエドを持つてつてやるわ。』

ランツェエワは娘を受取り、母親らしく親しげに、娘の肥えた小さい手を引き寄せて、そして砂糖の塊りを一つ握らせた。

マリア・パウロフナは出て行つた。と直ぐ入れ代りに、食糧を買ひ込んで湯を持つて來た二人の男が入つて來た。

二

その一人は脊の高い瘠せぎすな若者で、毛皮混りの上衣の釦を詰め、長靴を穿き、すたすたと輕い急ぎ足に入つて來た。湯氣の立つてゐる大きい茶瓶を兩手にさげ、小腋にはパンを布に包んで持つて來た。

『やあ、公爵が又お見えになりましたね。』さう云つて彼は茶瓶を茶碗の間に置き、パンをカテュウシヤに渡した。『えらいものを買つて來ましたよ。』と云ひ〳〵彼は上衣を脱いで、人々の頭越しに寢床の隅の方へ抛り投げた。『マルケルは牛乳と卵を買つて來ました。これで御馳走が出來やうてわけだ。キリロフナさんが、例の品の好い立派なお手並を見せて下さるだらう。さ、茶を立てゝ貰ひますよ。』さう云つてランツェエフの方を見た。

彼の外貌も擧動も聲も目つきも、一切が殆んど快濶その物であつた。

今一人の男も瘠せぎすで頰骨の出た、淺黑い顏をしてゐたが、脊は幾らか低く、靑味を持つた大きい目は美しく、脣は上品であつた。はじめの男とは反對に彼は陰氣な顏つきをしてゐた。綿の入つた古い外套を着て、長靴にはカバアを嵌めてゐた。

壺を二つと樺の皮で編んだ籠を二つ持つて來た彼は、それをランツェエワの前に置き、絶えずネクリュウドフを見ながら頭を下げて挨拶した。そして汗ばんだ手で躊躇勝ちに握手に應じ、それから食糧を籠などの中からそろ〳〵取り出した。

この二人の國事犯は下層社會の出で、前のはナバアトフと云ふ百姓であり、後のは職工でマルケル・コンドラティエフと云つた。マルケルが革命運動に加はつたのは三十五歳の時で、ナバアトフは十八の時であつた。ナバアトフは學校の出來がよく、小學から中學に進み、學費は自分が他に教へる事によつて拵へ、中學を出る時は金の賞牌を貰つたが、大學には入らないで自分の出た下層社會に戻つた。それは一般に閑却されてゐた自分の同胞の啓蒙事業に力を盡す可く、中學第七級の時から彼の決心してゐた事なのであつた。最初は彼は或る大きい村の書記を勤めたが、間もなく拘禁されて八ケ月間自由を失ひ、それから監視付きとして放

免された。その後すぐ又他縣の或る村に入つたが、そこでも亦捕へられて、今度は一年と八ケ月獄に入れられた。

その拘禁が終ると今度はベルムに送られ、ベルムでは一度は逃げ出したが、直ぐ又捕はれて七ケ月間の監禁の身となり、それから更にアルハンゲルスクに送られた。そして今度アルハンゲルスクから又彼は西比利亞中で一等寒い荒涼たるヤクウツクに遣られるのであつた。

そんな具合に彼は半生を獄に入れられたり追放されたりして過したが、そんな經驗は少しも彼の意志を沮喪させなかつた。寧ろ彼は其の爲めに愈々奮ひ立つた。彼は何物をも悔いなかつた、そして未來を見る事をしなかつた。自分の凡ゆる精神力と實際的聰明とを以て彼は現在の事に盡した。自由な身である時は彼は自分の目的として据ゑてゐる所の啓蒙事業の爲に、勞働者殊に百姓階級の一致協同といふ事の爲に盡した。獄にある時は又獄の外との交際の爲に、そして現狀の許す限り獄内の改良の爲めに、それも自分一人の爲めでなく全部の爲めに倦まず撓まず骨を折つた。何と云つても彼は公衆幸福の爲めの戰士であつた。彼は自分の爲めには何物をも要求しなかつた、自分の生活には簡素を極めた、併し同志全體の爲めには多きが上の多き幸福を求めた、そして肉體的の勞働にも精神上の仕事にも寢食を忘れて勵むのであつた。

彼は百姓としては勤勉に、聰明に、器用に、謙讓に、そして禮儀厚く、他人に對しては其の感情を尊重する許りでなく、又その意見に十分の敬意を拂ふ男であつた。

今も存命の無教な百姓女たる彼の母親は、多くの迷信の所有者であつたが、ナバアトフは自由な身の時は何時も彼女に力を添へてやり、彼女を教へ導く事を努めてゐた。家に居る時は彼女の些細な事にまで氣を配つてやり、仕事の手傳ひをし、又子供の時の友達だつた村の若い者や子供等ともよく附合ひ、彼等と一緒に百姓煙草を吹かしたり相撲を取つたり冗談を云ひ合つたりもした。

彼の考へによれば國民生活の根本の形は變革されてはいけないのであつた。その點に於て、彼はノヲドヲヲオロフ及び其弟子分のマアケルとは見解を異にしてゐた。家全體を壞してはならないのであつた、壯麗な確實な巨大な家其物は彼が熱愛してゐる所のものであつて、たゞ其内部の設備だけを改めなければならないのであつた。

宗教に關しても彼は純然たる百姓式の百姓で、嘗て形而上の問題を考へた事なく、萬物の起源や死後の生などゝ云ふ事にも思ひを廻らしてみた事はなかつた。神は彼に取つては物理學者アラゴオに取つてと同樣に假定であつて、彼は今迄その假定の必要を感じなかつた。世界が何うして始まつたかと云ふ事は彼には今迄何の關心事でもなく、彼の同僚の重大視してゐるダルキンの進化論などは彼には一種の精神的遊戯であつた。

世界が何うして出來たかの問題が、彼に取つて何等の興味もなかつたのは、その世界の中に何うして生活するのが最も好い方法であるかの問題が遙かにより重大に思はれるからであつた。死後の生をも彼は考へなかつた。彼は凡ての百姓に共通な、先祖より受繼いだ鞏固な平靜な信念を持つてゐた、動物界にも植物界にも死滅といふものがないやうに、そしてたゞ或る形が他の形に變ずるのみであるやうに、例へば肥料が種になり、種子が鷄の體に入り、蟲が蝶になり、樫の實が樫になるやうに、人間にも決して死滅はない、たゞ變化があるのみだといふ信念を持つてゐた。それで彼は死に面してもいつも大膽であり快濶であり、死に導く苦惱をも凛として耐へ忍ぶのであつた。けれども彼はそれを言葉として云ふ方法を知らなかつた、又云ふを好みもしなかつた。彼はたゞ働く事が好きであつた、そして絶えず實際上の仕事に鞅掌し、同志をも實際上の仕事に勵ますのであつた。

二

下層社會出身の今一人の國事犯マアケル・コンドラテ・エフは又別な型の男であつた。彼は十五の時から勞働者になつて、漠然たる癖癪を紛らす爲めに酒も煙草も其頃から飲み始めた。はじめて彼がそんな癖癪を起したのは、工場の妻君の催したクリスマスの祭に他の子供達と一緒に招かれて行つた時で、その時彼は僅か一哥片克（コペエク）ぐらゐの竹笛と林檎と金箔を塗つた胡桃と無花果と夫れだけ貰つたきりであるのに、工場主の子供達は後で聞けば五十ルウブルも價したといふまるで夢の話のやうな見事な玩具を貰つたのであつた。彼が二十歳の時、その工場に或る知識階級の娘が女工として入つて來た、そして彼の秀でた才能を認めると種々の本だの雜誌だのを與へ、色々有益な事を云つて聞かせ、彼の居るやうな境涯に就いて、さういふ境涯の存在する原因に就いて、並びにそんな社會狀態を改良すべき方法に就いて、懇ろに彼の蒙を啓いてやつた。彼はさういふ社會改良の可能を認め得た、たゞ理想の實現が學問によつて何うして持來さる可きかは彼には不明であつた。併し學問によつて自分の境涯の不當な所以を知り得た彼は、矢張り又學問によつて改革の行はる可きものである事を信じたのである。又その事は別としても彼は學問によつて自分が他に秀でた事を思つた、それ故彼は酒や煙草を廢し、職工長になつて餘暇が多くなると愈々其方面の修養を勵んだ。

娘は絶えず彼に敎へ、彼が如何なる智識にも、ずん〳〵進境を見せて行く異常な天禀に目を瞠つた。二年の間に彼は代數も幾何も歷史も修めた、歷史は殊に彼の好む所であつた。藝術史思想論、取分け社會主義の書籍は最も多く讀んだ。

娘が拘引されると彼も拘引された。二人は獄に入れられ、後ヲロログダに送られた。そこで彼

はノヲド・ヲオロフと知合ひになり、なほ多くの本を讀んで腹に納ひ、愈々自分の考へを鞏固にして行つた。それから其處を逃げ出したが、又直ぐ捕はれ、一切の公權を剝脫されて西比利亞へ送られる事になつたのである。

彼は慣ひ性となつて禁慾生活の人となり、自分の生に求める所は極めて薄く、勞働には子供の時から慣れて筋肉もよく發達してゐる事とて、どんな骨折をも樂々と上手にやつてのけた。けれども彼がそれよりも尙ほ好んでゐるのは學問で、獄內でも今のやうな含營の中でも餘暇さへあれば修養を怠らなかつた。今彼が讀んでゐるのはマルクスの第一卷目で、彼はそれを無上の寶玉のやうに袋の中に大切にしまつてゐるのであつた。同志の者に對しては遠慮勝ちでありつ冷靜であり、ノヲド・ヲオロフに對してだけは例外として熱心な尊敬を捧げ、ノヲド・ヲオロフの意見は何事に關しても絕對の眞理として奉じてゐた。

女性には彼はあらゆる重大事に邪魔になるものとして極度の輕蔑を注いでゐた。たゞ併しカテュウシヤには同情を寄せ、上流社會に下層社會が虐げられた例として親切にしてやつた。同一理から彼はネクリュウドフを嫌つてゐた、ネクリュウドフに對しては默り勝ちであつた。それで今さきもネクリュウドフに握手を求められて始めて自分の手を出したのであつた。

一三

竈が焚き付いて茶も出來、コップや茶碗に注がれ、それに牛乳も加へられ、それから白パン、固く蒸した卵、バタ、犢の頭や、足そんな物が食卓代用の寢床の上に並べられると、一同は其處に行つて飲んだり食つたりしながら何やかと話をした。

ランツェワは箱に腰かけて茶を注いでやり、餘の者は其周りに並んだが、クリルツォフだけは濕氣のある毛皮混りの上衣を脫いで、乾いたプレイドを引かけ、自分の寢臺の上に橫になりながらネクリュウドフと話をした。

雨や雪に濡れて寒さを冒した一日の道中を終り、室の掃除をも濟まして、斯うして團欒して熱い茶を飲んだりしてみると、一同は靄々たる和氣を覺えるのであつた。壁の彼方の隣の室からは刑事囚等の叫び聲、罵り聲、さてはどたんばたんといふ音が響いて來たりするのは、尙一層此室の愉快な氣分を對照的に增す所以であつた。この暫くの間は一同は宛ら海上の離れ小島に來て、四周の迫害と其の與へる苦痛を他所にしてゐるかのやうに暢然と氣樂であつた。

一同は四方山の話をした、たゞ彼等自身の今の身の上の事と今後どうなつて行くといふ事に就いては誰も一言も云はなかつた。なほ又若い男女の例に洩れず、殊に斯うして一緒にされて

ゐる事とて、一同の間には特別な關係が出來てゐた。

大抵誰も殘らず戀したり戀されたりしてゐた。ノヲドゥヲオロフは美しいにこ〳〵したグラアベッツに惚れてゐた。グラアベッツは年若い女子大學生で、何事をも深く考へてゐるではなく、政治に對しては全く無頓着であつた、たゞ時代の風潮に支配されて何か一寸した不注意をしたために徒刑に處せられたのであつた。彼女は自由な身の時も男等の間にもてる事を生の第一義としてゐたので、法廷に出る時も獄窓に居る時も西比利亞に送られる途中も、それを求める事が彼女の唯一の仕事であつた。今度の道中にもノヲドゥヲオロフに惚れられたのが何よりの慰めであつたが、自分も亦彼に惚れたのである。

エエラ・エフレモフナは自分でよく惚れはするが、男に惚れられはしなかつた、併し惚れて貰ひ度い心はいつも休まなかつた。そしてナバアトフに惚れるかと思ふと、又ノヲドゥヲオロフに惚れたりした。

マリア・パウロフナに對するクリルツォフにも戀みたいなものがあつた。普通に男が女を愛するやうに、クルリツォフも彼女を愛してゐた、併し彼女が戀に對する考へを彼は知つてゐるので、たゞ彼女より特に優しくして貰ふ感謝と友情を示すに過ぎないかのやうにして、自分の本當の心持を隱してゐた。

ナバアトフとランツェエワとの間には複雜な戀愛關係があつた。マリア・パウロフナが純潔な處女であるやうに、ランツェエワは亦貞操堅固な人妻であつた。高等女學校にゐる時十六で彼女は彼得斯堡大學の一學生を戀し、十九になつてからまだ在學中の件の學生と結婚した。良人が第四學年生の時或る結社に關係して彼得斯堡を追放されると、彼女もそれ迄學んでゐた藥劑科を棄てゝ良人の後を追つた。彼女は自分良人を此世で一番立派な聰明な男と思はなかつたとしたら、それなら彼女は彼に惚れはしない積りであつた、惚れないとすれば結婚もしない積りであつた。併し彼を此世で一番美しい一番聰明な男と信じて惚れた以上、惚れて結婚をした以上、彼女は人生を觀るにも人生の目的を思ふにも、當然良人と全く同一の考へを抱くのであつた。良人は人生の主要な目的は知識を修める事にあるとしてゐた、それ故彼女も熱心に學んだ。又良人に倣つて彼女も現在の社會制度を不可とした、そのやうな制度に對しては誰も戰はねばならない、そして誰もが人格を立派に完成させる事の出來るやうな制度にしなければならない、さうする事に努力しなければならない、それが誰にもある苦の義務であると確信した、彼女は良人の意向をさうと知らなくとも、自分から全くさう考へ、さう感ずるのだと信じてゐた、併し實際は良人の思想であり感情であるが故に夫れが彼女に取つて絶對の眞實なのであつた。そして彼女は良人と自分の魂がたゞもう融合一致するやうそれをのみ願つてゐるのであつた。

良人に別れ、又子供をも自分の母親に托して別れて來なければならなかつた事は、彼女には少なからぬ辛さであつた。併し皆良人の爲めであり良人の盡瘁する絶對至眞の大事業の爲めであると思へば、その辛さにも健氣に耐へて來たのである。身は別れてゐても彼女の心はいつも良人の傍にあつた、そして今迄良人以外の誰をも愛した事のないやうに、今とても彼女は又他には誰をも愛する事は出來なかつた。けれどもたゞナバアトフの純潔な愛には彼女も感激しないわけには行かなかつた。彼女の良人の友人である道義心の高いナバアトフは彼女に對しては姉か妹に對するやうに親切にした。併し其態度には動ともすれば友情以上の或物が頭を擡げようとした。そして夫れには彼女も彼も自ら愕き怖れる事があつた、同時に其或物は二人の現在の陰慘な境涯を幾らか彩り飾る所以のものであつた。

で、戀の心を全く持つてゐないのはマリア・パウロフナとコンドラティエフだけであつた。

一四

ネクリュウドフはいつもの通り一同の夜食が濟んでから、カテュウシヤと二人つきりで話をする積りで、それまではクリルツォフの傍に腰かけて彼と話をした。何よりも彼はマカアル賴んだ事を話し、又マカアル自身の事をも話して聞かした。クルリツォフは目を輝かしてネクリュウドフの顏を見ながら、熱心に聞いた。

『さうなんです、』とクリルツォフは急に口を利いた、『私は時々かう思ひます、我々は彼等と運命を共にしてゐる、同じ道を歩いてゐる、——彼等つて誰かつて、そりや彼等でさ、我々が覺醒させる事に努めてゐる彼等の事でさ、——でありながら我々は彼等の性質を知らない、彼等に知られもしない、寧ろ彼等に嫌はれ、動もすれば敵視されてさへゐる、と斯う思ふんですよ。ね、これは實に怖る可き事ではありませんか。』

『ちつとも怖る可き事ぢやない。』と話を聞いてゐたノヲドゥヲオロフは言葉を挾んだ。『民衆といふものはいつも粗暴で蒙昧なものぢやないか。』鼻にかゝるやうな聲で彼はさう云ふのであつた。

その時壁の彼方には罵る聲騷ぐ聲、扨ては壁にどしんと突き當てた音などがした、鎖のぢやらぢやら鳴る音、喚く聲、ひい〳〵叫ぶ聲。誰れか撲られたと見えて、救ひを求めた叫び聲もあつた。

『それ、あれだ、野獸だからな。あんな連中と我々との間に何うして協同が成立たう。』とノヲドゥヲオロフは落着き拂つて云つた。

『君は彼等を野獸と云ふのか。』とクリルツォフは激昂した。『今我々は爰でマカアルといふ彼

等の中の一人の話をしてゐるがね、その男は自分の同郷の若者を救はうと思つて、罷り間違へば命を失ふ危險を冒してゐるんだぜ、これが野獸のやり口かね、堂々たる立派な實に見上げた行ひぢやないか。』

『感情的さ。』とノヲドゥヲオロフは皮肉に答へた。『我々には何うもあの連中の感情の動き具合と行爲の動機は理會めないね。併しその話は、そりや其の惡黨の強い奴に對する嫉妬だらう、恨みだらう。』

『あなたは何うして他人の美點を認めたくないのでせうね？』マリア・パウロフナも急に激昂して尋ねた。

『無い美點は認められませんよ。』

『どうして無いの？　死ぬる覺悟で他人の爲めに盡すといふではありませんか。』

『僕の考へは斯うなんです。』とノヲドゥヲオロフは云つた。『我々が我々の事業をするに第一心得て居なければならない事は、』（コンドラティエフは讀んでゐた本を傍に置いて、先生分の彼の言葉に熱心に傾聽するのであつた。）『物事を觀るに空想的であつてはならないと云ふ事です、あるが儘に現實的に見なければならないと云ふ事です。民衆は我々の事業の對境ではあるが、我々が共力して事を爲す可き相手ではありません、彼等に今のやうに自發的能力が無い限りはね。』演說口調で彼は云ふのであつた。『ですから彼等に助力を期待するのは幻想的といふものです。我々が今準備をさせつゝある彼等の進步の道程を經た上でなくては、そんな助力の期待は全く幻想的なのです。』

『どんな進步の道程なんだ？』とクリルツォフは顏に朱を濺いで詰問した。『我々は橫暴と專制に反抗するんだと主張してゐるではないか、だのに君の其考へは何といふ甚しい橫暴なんだ。』

『いや、決して橫暴ではない、』とノヲドゥヲオロフは落着き拂つて、『僕は民衆の當に辿る可き道を知つてゐる、そして其道を彼等民衆に示す事が出來る、それをたゞ主張するのだ。』

『しかし君の示さうとする其道の正しいといふ事を君は何うして保證し得るのだ。それは專制思想といふものぢやないか、異端審問や佛國革命の虐殺はさういふ專制思想から生れてゐるではないか。慘忍な彼等革命家連とても、彼等に云はすれば彼等の本當な道を心得てゐた積りではないか。』

『佛國革命の連中が邪路に落ちたからと云つて、それで僕も落ちるといふ證據にはなるまいぢやないか。それにさ、理想狂連の熱病に魘されたやうな空想と、確實な經濟的知識の結果との間には、大きな相違があるんだからね。』

ノヲドゥヲオロフの聲は室内一ぱいに響き渡つた。他は皆默つてゐるが、彼一人盛に喋つた。

『云ひ爭ひばつかしゝて。』とマリア・パウロフナは、彼が一寸語を途切らした時云つた。

『しかしあなた自身は何う思ふんです？』ネクリィウドフは彼女に尋ねた。

『私はアナトオルさんの仰しやるのが本當だと思ふわ、我々の意見を民衆に强ひるのはよくないと思ひますの。』

『我々の事業は妙な解釋に出會したもんだな。』と云つてノヲドゥヲオロフは憤然として押し默り、煙草をすぱすぱ吹かし出した。

『おれはもうあんな男と話をするのは厭だ。』クリルツォフはさう呟いて又默つた。

『云はない方が又遙かに優つてゐる。』とネクリュウドフも云つた。

一五

ノヲドゥヲオロフは國事犯一同に非常に尊敬され、學者だ、思想家だと云はれてゐたが、ネクリュウドフの目から見れば、水平線以下の道義心しかない官公吏など〻同一であつて、ネクリュウドフの方が遙かに高い人物なのであつた。なるほどノヲドゥヲオロフの精神力は小さくはなかつた、併し夫れを分子として其分母たる彼の自負心は更に計られない位に大きかつた、割るとすれば答はコンマ以下になるのであつた。

彼はシモンソンとは全く精神的根本を異にした男で、シモンソンは多くの男性的人格者によくある率直徑行の男で、その成す事はすべて自分の肺腑より出で理想によつて定められたものであつたが、ノヲドゥヲオロフは女性的なタイプの一人で、その思想の作用は一部は自分の感情の課した仕事を達する爲めに、又一部はさうした感情による行爲を辯解するために働くのであつた。

彼がいつも十分の確信を置き、出來るだけの美しい言葉で飾つてゐる彼自身の仕事全部はネクリュウドフに云はすれば虚榮心に過ぎなかつた、他のすべての人よりも偉いといふ地位を得たい努力に過ぎなかつた。始めの頃は彼は他の思想を受入れて夫れを巧みに再現させる能力によつて、他の多くの者よりも優越な地歩を占め、そして滿足してゐたのである。それは教師や同窓生の間にあつて學を修めてゐた時で、そこではさういふ能力が高く評價されてゐたのである。高等學校でも大學でも學位を得てからもさうであつた。併し學校を卒業して修學をやめると、さうした優越が得られなかつたので、彼を嫌ひなクリルツォフが云ふやうに、彼は急に意見を變じて他方面に又優越な地歩を占むべく志した。彼には疑惑や躊躇の本

たる道義心や審美感が全く缺けてゐたので、彼は直ぐ或る黨派の首領たる地位を贏ち得て利己心を滿足させた。

彼は一旦方針をきめて其道に就いてからは、彼には少しも疑惑や躊躇がなかつた、それで彼は自分は少しも過つてはゐないのだと確信してゐた。彼には一切萬事が非常に簡單明瞭に見えた、そして彼の考への狹隘な爲めのみならず、實際に萬事が簡單であり明瞭であり、そして彼の云ふやうに、人はいつも論理的でなくてはならないのであつた。彼の自負心は非常に大きく、彼は誰をも自分の配下としないならば排斥するといふ方であつた。幸ひ彼は極く若い人々の中に立つて仕事をしたので、彼の飽く無き利己心は却つて非常に深遠な知識のやうに思はれ、青年一同の歸依を得て、大きな成功を見たのである。

彼の同志は彼の大膽と決斷との爲めに彼を尊敬した、併し彼を愛しはしなかつた。彼も又誰をも愛する事はなかつた、のみならず優れた凡ての人々を彼は不倶戴天の仇敵のやうに見た、出來る事なら彼は自分以外のすべての人の精神力を沒收してやりたかつた、さうなると彼一人その領域にあつて威を揮ふ事が出來るわけであつた。

たゞ自分に推服してゐる若干の者に對してだけは、彼も親切に振舞つた。即ち今度の道中でもコンドラティエフ、エエラ・エフレモフナ、及び美しいグラアベッツの三人には親密であつた。エエラとグラアベッツは共に彼に戀してゐたのである。又彼は主義としては婦人問題に好意を寄せてゐるのであるが、心では女は皆つまらないもの何の役にも立たないものとしてゐた。例外としては、それも珍らしくはなかつたが自分が知らず識らず誇張した熱愛を寄せてゐる女、例へばグラアベッツの如きに對しては彼は非凡な女性といふ評價を與へてゐたそして其女の眞價は自分にだけしか分らないとしてゐた。

性に關する問題も、他の一切の問題と同じく、彼には極めて簡單明瞭なものであつた。自由戀愛を認める事によつて一切の兩性問題は殘りなく解決されてゐるのだと考へてゐた。

彼には正妻の外に隱し女があつた、そして正妻と自分との間には本當の愛は成立たないからといつて、彼は正妻とは離れたのであつた、そして今は又グラアベッツと新たに自由な結婚をなすべく企てゝゐるのである。

ネクリュウドフに對しては、あれはカテュウシャに氣前を見せてゐるのだと云つて、彼は輕蔑の矢を注ぎかけてゐた。併し其輕蔑はたゞ夫れだけの理由からではなかつた、現代社會の缺陷に關し其改善の方法に關しネクリュウドフが僭越にも自分と同一ならぬ意見を持つてゐる事、『貴族流』なたわいない考を持つてゐる事、夫が彼の輕蔑の最も主要な理由であつた。

ネクリュウドフも自分に對する彼のさういふ心を知つてゐるので、不愉快ながらも對抗的

の憎悪と輕蔑を持たないではゐられなかつた。折角今度の旅行中は愉快な氣持で來てゐるのであるが、彼に對すれば強い嫌忌を抑制してゐる事が出來なかつた。

一六

隣の室に役人の聲がした。そして一體にひつそりとなつた、と思ふと間もなく下士が兵卒を二人從へて入つて來た。點呼なのである。下士は一同を一人々々指さしして數へた。ネクリュウドフの番に廻つてくると、下士は馴々しげに、『さ、公爵閣下、點呼が終りますともう長くおいでになるわけには參りませんが。』

ネクリュウドフは下士のさう云ふ意味を知つてゐるので、つか〳〵と傍に行つて、かねて用意してゐた三ルウブルを握らした。

『さうですね、公爵閣下には何もおとめする譯もありませんから。今少し許りお殘りになつても構ひません。』

その下士が出て行かうとすると、又一人別の下士が、髭の薄い目の凹んだ脊の高い痩せぎすの囚人を一人從へて入つて來た。

『手前は娘を見に來やしただ。』と其囚人は云つた。

『やあ、父ちやんが來た。』と出し抜けに冴々しい聲が喚いて、ブロンドな縮れ髮の小さい頭がランツェエワの後ろから擡つた。ランツェエワはマリア・パウロフナとカテュウシヤと三人で自分の上衣を出して夫れで子供に服を拵へてやつてゐる所であつた。

『おらだよ、おらが來ただあ、娘や。』と囚人のブウゾフキンは優しげに云つた。

『この娘はね、生々して悦んでゐますわ。』とマリア・パウロフナは、ブウゾフキンの病氣らしい窶れた顏を傷々しげに見ながら云つた。『此室に置いてはどう？』

『叔母樣達がね、私に新しい着物をね、拵へて呉れるのよ。』と娘はランツェエワの縫つてゐるのを見たりして云つた。『そりや綺麗よ、綺麗な服なのよ。』

『此室にゐるわね、ね、いゝ娘だから。』とランツェエワは云つて、娘をさも可愛らしさうに抱きしめた。

『えゝ、居るわ、だけど父ちやんも、ね。』

ランツェエワは爽やかに微笑んで、

『父ちやんは此室に居られないの。』と云つてからブウゾフキンに向ひ、『ね、いゝでせう、此室に置いても。』

『それぢや夫れでもいゝ。』と下士が代つて答へ乍ら、今一人の下士と共に室を出て行つた。

兵士等が行つてしまふと、ナバアトフはブウゾフキンの傍に行つて、その肩に手をやりながら尋ねた。『本當かね、君、カルマアノフと云ふのが身代りをさせようとしてゐるつて話ぢやないか。』

ブウゾフキンの正直さうな溫和な顏は直ぐ搔き曇つた、目には傷々しげな色が出た。

『そねえな事聞きやしねえがな、ひでえ事だあ。』と云つてから娘に向ひ、『夫ぢや、アクシュウツカ、汝や好え叔母樣達ん所へ入り込んだだあな。』そして急いで出て行つた。

『あの男何でも知つてゐるわい、身代りをさせようとしてゐるのは本當だな。』とナバアトフは半ば獨語のやうに云つてから、ネクリュウドフに向ひ、『で、あなたは何うなさる積りなんです？』

『市の役所にさう云つて置く積りです、身代りをさせようといふ方もさせられようといふ方も、二人とも私は顏を知つてゐますから。』とネクリュウドフは答へた。

一同は又何か云ひ出して爭論せねばならなくなつては困ると思つて默つてゐた。

シモンソンは其間ずつと默りつゞけて、兩手を頭の下に敷いて寢床の上に横たはつてゐたが、急に身を起して、其邊に寢てゐる者や腰かけてゐる者の間を用心して拔けて、ネクリュウドフの傍に行つた。

『あなたに今私少し話がありますが、あなたは御都合はいゝんですか。』

『いゝんですとも。』と答へて、ネクリュウドフも立上り、シモンソンの方へ行つた。

その時カテュウシャの視線とネクリュウドフのそれと行合つたので、カテュウシャは顏を眞赤にした、そして不審にでも思ふかのやうに頭を一寸打振つた。

『あなたに私が用があるといふのは斯ういふ事です。』と、シモンソンはネクリュウドフと共に廊下に出てから云つた。併し廊下は騷々しくつて、刑事囚等の叫び聲などが殊にひどく聞えた。ネクリュウドフは顏を顰めた、併しシモンソンはそんな事には頓着しないらしかつた。

『私はあなたとカタリイナ・ミハイロフナさんとの間のことを知つてゐるのですから、』と彼は、正直な溫和な目でネクリュウドフの顏を正面に見ながら、丁寧に云つた。『ですから私は此事をあなたに……』そこ迄云つた時、隣室の入口で喧嘩するらしい二人の聲が八ケ間しく響いたので、おのづから途切らされた。

『この野郎、おれのぢやねえんだぞ。』と一人が怒鳴り、

『ほざくない、くたばつちまやがれ。』と一人が喚くのであつた。

その時、マリア・パウロフナは廊下に出て來たのであつた。

『こんな處でお話なんか出來ないでせう。』と、彼女は云つた。『此方へいらつしやい。エロ

チュカさんが一人居るきりなの。』さう云つて自分が先きに立つて、國事犯の婦人室にしてある小さい室に入つた。そこにはエエラ・エフレモフナが夜着を額の上まで引被つて寢床の上に寢てゐた。

『エロチュカさんは頭痛がするのよ、そして眠つてゐるから何も聞えやしないわ、そして私は行くんだから。』

『いや、それよりも居て下さつた方がいゝんです。』とシモンソンは云つた。『私は誰の前にも祕密はありません、殊にあなたの前には尙更です。』

『さう、ぢや居るわ。』とマリア・パウロフナはさう云つて、子供がよくやるやうに、半身を寢床の上に乘せて、右に傾いたり左を下にしたりしながら、仔羊のやうな美しい目で向うを見やりつゝ聞く事にした。

『用事は斯ういふ事なんです。』とシモンソンは、更に始めから云ひ出した。『私はあなたとカタリイナ・ミハイロフナさんとの間の事を知つてゐますから、私とカタリイナさんとの間の事をあなたにすつかり申上げる義務があると思ふのです。』

『それはどんな事なんです。』とネクリュウドフは尋ねた、シモンソンの話し振りの簡明で眞實な調子がネクリュウドフには快い心持であつた。

『私はカタリイナ・ミハイロフナさんと結婚したいと思つてゐるのです、で夫れをあなたに云ひ度いと思つたのです。』

『まあ。』とマリア・パウロフナは愕いてシモンソンをぢつと見詰めた。

『それですから、私はあの女に私の妻になつて呉れるやうに云はうと決心してゐます。』

『それで私にどうしろと云ふんです。それは、あの女の心一つぢやありませんか。』とネクリュウドフも答へた。

『さうです、併しあの女はあなたに默つては決定しないでせう。』

『どうして？』

『だつてあなたとの關係がすつかり解決されない間は、あの女は何事も決める事が出來ないんですから。』

『私の方ではすつかり解決はつけてゐるのです。私は私の義務と思ふ事をする積りです、そして彼女の境涯を出來るだけ樂にしてやり度いと思つてゐます、けれども決して彼女を束縛はしません、窮屈な目に逢はせはしない積りです。』

『そりやさうでせう。併しあの人はあなたの犧牲を受入れようとは思つて居りません。』

『ちつとも犧牲ぢやないんですよ。』

『そして其決心をあの人はどんな事があつても變更はしないんです、それを私は知つてゐます。』

『それではあなたと私と話したつて何にもならないぢやありませんか。』

『あなたからも此事を彼女に云つて下さるのが必要なのです。』

『私が自分で義務と信じてゐる事を爲ねばならないと思つてゐる傍らに、其事に贊成だの何だのとどうして云へませう。私が云へる事はたゞ一つあります、卽ち私は自由ぢやないが彼女は自由だといふ事です。』

シモンソンは默つて考へた。

『よろしい、私があの人に云ひませう。あの人は、私があの人を戀してゐるといふ事は知つてゐないのです。私はあの人を非常に苦しい目にあつた珍らしい勝れた人として戀してゐます。私はあの人に何も求めません、たゞ私は少しでもあの人の境涯を樂にしてやり度くて堪らないのです。』

さう云つてシモンソンが聲を慄はしてゐるのにネクリュウドフは心を留めた。

『あの人があなたの手傳ひを受入れたくないなら、』とシモンソンは云ひ續けた。『それなら私の手傳ひなりと受入れて呉れるでせう。あの人が承諾して呉れるなら、私はあの人の遣られて入れられる監獄のある地に私も遣られるやうに願ひます。四年の月日は何んでもありません。私はあの人の傍に暮します、そしてあの人の不運を輕くしてやる事が出來さうなものと思ひます……。』そこまで云つたが昂奮に驅られて言葉が出なかつた。

『それに私が何うして反對なんぞ出來ませう。』とネクリュウドフは言つた、『あの人があなたのやうな立派な保護者を得た事は、私にどれほど愉快だか分りません。』

『それが私の聞き度いと思つてゐた事なのです。あの人を愛してあの人の爲めに十分盡していらつしやるあなたが、あの人と私との結婚に贊成して下さるかどうか、それを私は知り度いと思つてゐたのです。』

『贊成しますとも。』とネクリュウドフはきつぱり云つた。

『一切あの人の心次第です。私はたゞあの非常な試錬を經た魂に休養と安息の與へられるやうに願ふのです。』さう云つたシモンソンの目つきには、こんな陰氣らしい顏つきをしてゐる人に何うしてだらうと不思議に思へるくらゐな子供らしい優しさが出た。

シモンソンは立上つてネクリュウドフの手を執つた、そして少し極り惡げに微笑しながら彼に近く顏を持つて行つて接吻をした。

『ではあの人にさう云ひますから。』と云つてシモンソンは出て行つた。

一七

『まあ、本當に何うしたのでせう。』とマリア・パウロフナは怪しんだ。『全く戀してるわね、すつかり戀してゐるわね。私あのシモンソンさんが、あんなに單純な子供みたいな戀に落ちようとは些とも思やしなかつたわ。不思議だわねえ。そして本當云ふと氣の毒ねえ。』

『それでカテュウシヤの方では何うでせう、どう考へるとあなたは思ひます。』とネクリュウドフは尋ねた。

『あの人？』と云つてマリア・パウロフナは一寸躊躇した、それは出來るだけ十分な答へをしようと思つたからであつた。『あの人？　あの人はね、そりや昔は昔だつたでせうけれど、今はそりや立派な道義心の高い人なのよ、そして上品な綿密な感じを持つてゐますの。あの人はあなたを本當に愛してゐますわ、消極的にでもあなたの爲めになれるといゝと思つてゐますわ、あなたを自分の事に係り合はしてあなたにまで辛い目を見せるのが厭さにね、どうかしてあなたが身を退いて呉れるやうにと思つてゐますのよ。あなたと結婚などするのは昔の罪よりも惡い事だと思つてゐますの、ですから迚もあなたと一緒にはなりませんわ。あなたが傍に居るだけさへ、あの人には不安なのよ。』

『では私はどうすればいゝでせう。消えてしまはなけりやなりませんかね。』

マリア・パウロフナは子供じみた可愛い微笑を浮べた。

『さうねえ、……少し許り。』

『だつて少し許り消える事が出來ますか。』

『そりや嘘よ。でもね、あの人はシモンソンさんの戀とは反對な考を持つてゐるでせうよ、それを私云ふ積りでしたの。シモンソンさんに何もまだ聞いちやゐないでせうけれど、聞いたら一寸心持よいと思ふかも知れませんけれど、又屹度それを怖れてよ。私はこんな事は知りませんから何も云ふ資格はありませんけれどね、シモンソンさんの方にはやつぱし普通の男の感情があると思ひますの、さうでないやうに表面を取繕つてはゐたつてもね。この戀は自分の高尚な精力の元だとか理想的だとか云ふのでせうけれどね、よしんば例外な戀だとしたつてさ、私はやつぱし忌々しい物が底にはあると思ふわ、ノヲド・ヲオロフさんとグラアベッツさんの仲のやうなものが。』

話が戀の問題になつたので、マリア・パウロフナはそのさきを云ふのを避けた。

『それは私はどうすればいゝんでせうね。』とネクリュドフウは尋ねた。

『あなたカテュウシヤさんにすつかりお話しなさるがいゝと私思ひますわ。すつかり分つた

方が優しぢやありませんか。お話しなさいな、ね、私呼んであげませうか。』

『どうぞ。』とネクリュウドフが云ふと、彼安は直ぐ出て行つた。

その狹い室に一人殘つて、エエラ・エフレモフナの靜かな寢息を聞いたり、時々呻く聲を立てて途切らすのに耳を留めたり、又刑事犯人等の騷ぎが二つの戸口から聞えて來るのに注意してゐたりすると、ネクリュウドフは變な氣持になるのであつた。

自分で自分に課した義務ではあれ、ともすれば氣が弱くなつて辛いと思つたり怖ろしいと思つたりしてゐたのであるのに、今シモンソンの言葉によつて其義務を解除されようといふ場合になりながら、彼は又不愉快な、のみならず悲痛な感じさへも覺えずにはゐられなかつた。と云ふのは自分の折角の立派な行ひはシモンソンの提議によつて光を失ふ事になり、折角自分の捧げた犧牲の價値が自分の目にも人の目にも減少して見える事になるのであつた。彼女と全く何の關係もない立派な一人前の男が彼女と運命を共にする事になれば、ネクリュウドフの犧牲の如きは、もはや何等の値打もないものになるのであつた。

又恐らくはそれは全く嫉妬であつたかも知れない。彼が彼女に愛されてゐると思ふ心は決して單純な己惚ではなかつたので、彼女が他の男を愛するといふ事は彼の承認し得ない所であつた。それとも又、彼女の刑期が過ぎたら彼女と一緒に棲ふ事にきめてゐた計畫が、シモンソンの申出によつて破られるからの悲痛であつた。シモンソンと彼女と結婚するならば、彼は餘計者であつた、不要な人物なのであつた、それならば彼は又新たな生涯の計を立てねばならないのであつた。

彼は自分の感じをまだ統める事が出來ないで居ると、其時刑事犯人等の騷々しさが、何か特別な事でもしたと見えて、開いた方の戸口から特に強くがんがん響いて來た。同時にカテウシヤが又入つて來た。

急ぎ足に彼女は彼の前へ來た。

『私にあなたの用があるつて、マリア・パウロフナさんが云ひましたの。』と言つて彼女は直ぐ彼の前に立止つた。

『さうです、あなたと話さなければならない事があるんです。おかけなさい。』

彼女は腰かけて兩手を膝の上に重ねた。そして極く平靜のやうに見えたが、ネクリュウドフがシモンソンの名を云ふと、彼女は顏を眞赤にした。

『あの人があなたに何と云ひまして？』

『あなたと結婚したいと云つたのです。』

彼女は急に顏を曇らした、何だか悲痛な色が出た、そして默つて目を伏せてゐた。

『そして私に賛成を求めたのです、賛成といふよりも相談をかけたのです。で私は、一切あなたの心次第であると答へておきました。あなたが決定すればいゝんです。』

『まあ、どうしてですの？　何の爲め？』と彼女は云つて、そしていつも彼に妙に強い或る特殊な印象を與へる斜の視線を彼の目に投げた。少しの間二人は默つて見合つてゐた、その目と目との間にはいろいろな意味が自ら語られた。

『あなたが決定せねばならない。』とネクリュウドフは繰返した。

『どうして私がきめなければなりませんの？　何事も疾うにきまつてゐるぢやありませんか。いゝえ、あなたがおきめにならなければなりませんわ、あの人の云ひ出した事にあなたが御賛成だかどうだか。』さう云つて彼女の顏は又曇つた。

『賛成です、あなたの爲めになるのなら。』とネクリュウドフは云つた。

『まあ、私の爲めだなんて、そんな事はもう云はないで下さいまし、何にもなりませんわ。』さう云つて彼女は立上つた、そして出て行つた。

一八

カテュウシヤに續いてネクリュウドフが男子部の室に來てみると、一同はひどく昂奮してゐた。よく方々を歩き廻つて何事にも氣を付けるナバアトフが、或る報告を齎らして一同を愕かしてゐたのである。それは前に懲役徒刑に處せられたペエトリンといふ國事犯が、小さい紙片に或事を書いて壁に貼つて置いたのをナバアトフが見たのであつた。一同はペエトリンは疾うにカアラに着いてゐたものと思つてゐたのであるが、その紙片に書いてあるのによると、つい少し前に同じ其道を刑事犯の一團にたゞ彼一人加へられて送られて行つたことが分つた。

「八月十七日。余は刑事犯の一群と共に送らる。ネエエロフも余と共にありしかど、カザンの精神病院にて縊死を遂げたり。余は健康なり、前途の多幸を望む。」

一同はペエトリンの事を話し合ひ、又ネエエロフの自殺の原因について話し合つた。クリルツォフは考に沈んで默つてゐた、そして目ばかり光らしながら見るともなく向うを見てゐた。

『良人が私に話しましたがね、ネエエロフさんはずつと前に幽靈を見た事があるんですつて。』とランツェエワは云つた。

『なる程ね、あの男は詩人でしてね、空想家でしてね、あんな性質の者は寂しさには堪へきれないんですよ。』ノヲドゥヲオロフは云つた、『僕はね、獨房の中に入れられた時は、空想を

働かさないやうに時間を秩序的に區分して物事をやるのだ。だからいつも何事にもよく耐へる事が出來るんだよ。』

『又何だつて耐へきれない事があるものかい。おれは監獄に打ち込まれる度に、どんなに悦んだか知れやしない。』とナバアトフは景氣よく云つた。それは其室に漲つた陰氣な氣分を追ひ拂はう爲めの言葉である事はありありと分つた。『だつて婆婆に居れば、自分の事や他人の事で心配が絶えやしない、自分が失策をしやしないか他人に迷惑をかけはしないかと、そりや一通りの苦勞ぢやないんだからね、併し一旦打ち込まれるとなれあ、もう安心だ、責任といふものが無くなるからな、で緩り休んで煙草でも一ぷくといふ段になるんだて。』

『あなたはネエエロフさんをよく知つておいでなの？』とマリア・パウロフナは、クリルツォフを不安さうに見ながら尋ねた。クリルツォフの顏つきが急に變つたのである。

『空想家のネエエロフだと？』とクリルツォフは、長いこと叫びか歌ひかした後のやうに息を切らし乍ら眞赤な顏をして口早に云つた。それからひどく咳き入つてかつと血を咯いた。

ナバアトフは雪を取りに外へ走り、マリア・パウロフナはバルドリアン水を持つて來た。けれどもクリルツォフは目を瞑つて、痩せ細つた白い手で拒んだ、そして辛さうにせつせと息をついた。それから雪や冷い藥でやつとクリルツォフが鎭靜すると、ネクリュウドフは一同に

別れを告げて、疾うに待つてゐた下士を先きにして出て行つた。

刑事犯の室も其時ははや靜かになつてゐた。大抵は眠つてゐた。その室々では、寢床の上にも下にも、又間にも寢てゐたが、それでもまだ皆が皆其處には寢られないので、一部分は廊下に寢てゐた。皆袋を枕にして、濕々する獄衣を夜着として掛けてゐた。

室内にも廊下にも鼾の聲や呻る聲がした、寢言を云つてゐるのもあつた。見渡す限り獄衣を掛けた人間の姿がごろごろ横になつてゐるのであつた。たゞ獨身者の室では、隅の方に蠟燭の火を中にして腰かけてゐるのが二三人あつたが、兵卒が來たのを見ると吹き消した。廊下でも老人が一人ランプの下で裸になつて起きてゐたが、それは肌着の蝨を取つてゐるのであつた。

國事犯の室での厭な匂ひも、其處のそれに比べれば清新なものであつた。ランプの焰のちらちら搖れるのが、靄の中にあるやうに茫と見えた。息をつくのは苦しい程であつた。寢てゐる者に觸らないやうに廊下を拔けて行くには、一足毎に餘地を探して爪立つやうにして行かなければならなかつた。廊下にも寢る場所がなかつたと見えて、入口の間に、加之惡臭の桶の傍に寢てゐるのも三人あつた。一人はネクリュウドフが道中で屢々見かけた老耄した爺で、一人は十歳許りの男の子であつた。その子供は二人の間になつて、一人の足を枕にして

手を頰に當てて寢てゐた。

ネリクゥウドフは門を出ると立止り、新鮮な冷い空氣を幾度も深く深く吸ひ込んだ。

一九

外は星の光の明るい夜であつた。道の泥濘も凍りかけ、たゞ稀に柔い所が殘つてゐた。ネクリュウドフは宿に歸つて暗い窓をこつこつ叩くと、頑丈さうな男が靴も穿かないで出て來て戸をあけ、彼を入れた。玄關に入ると右手の下男部屋の方からは馭者や馬方等の高い鼾聲が聞え、稍廣い土間の戸口の彼方では一群の馬が燕麥を食つてゐる音がしてゐた。左の方が綺麗な客間に入る方であつた。

客間では苦蓬と汗の匂ひがして、仕切の彼方には肺の丈夫らしい整つた鼾の聲が聞え、ホヤの赤いランプは聖像の前に點されてゐた。

ネクリュウドフは服を脱ぎ、油布張りの長椅子にブレイトを布き、その上に革の枕をのせて寢に就いた。そして今日見たり聞いたりした事を尙一度思ひ出して考へてみた。

シモンソンとカテュウシヤに思ひ掛けもない話をしなければならなかつた事は、非常に重大な事であつたにも拘らず、今は彼の心を支配しなかつた。その事に對する彼の關係は餘りに複雜しても居り、又不定でもあつたので、彼は夫れを思ふ事は避けたのである。あの厭な空氣の中に息づき、あの惡臭を嗅ぎながら濕々した中に寢てゐる不運な人々のこと、殊に或る囚徒の足を枕にしてゐた無邪氣な顏の男の子のことなどが、愈々切に思ひやられるのであつた。

翌日ネクリュウドフは目を覺ますと、馬方等ははや出て行つた後であつた。女主人は茶を注いで、汗ばんだ太つた首を拭き拭き入つて來て。護送兵の一人が彼に手紙を持つて來た由を知らした。

それはマリア・パウロフナからの手紙で、クリルツォフの今度の發病は、思つてゐたよりも重い由を書き、なほ「ですから今少し此地に殘して置いて貰はうと思ひましたの、さうして私どもも傍に附いて殘つてゐたいと思ひましたの、ですけれど許されませんでした。それで一緒に又立つて行くのですけれど、萬一の事になりやしないかと心配してゐますわ。次の町に行きましたら、我々の中の誰かゞ患者に附いて一緒に殘して置いて貰へるやうに、どうぞお取り計らひを願ひます。必要でしたら私あの人と結婚してもよろしうございます、勿論その覺悟もして居りますの。」と述べてあつた。

ネクリュウドフは宿屋の若者を馬車の立場へ馬を雇はせに遣り、自分は急いで旅支度をし

た。さうしてまだ彼が二杯目の茶を飲み終らない前に、鋪石のやうに凍つて固くなつた道に車輪の音をがらがら響かせながら三頭立の郵便馬車は、馬につけた鈴の音と共に宿屋の前にやつて來た。彼は女主人に勘定を拂ふと、直ぐ表に出て馬車に打乘り、囚人の道中に追ひつく可く出來るだけ速力を出して行くやうに云ひつけた。

すると或る廣い牧場の垣を圍らしてある所の近くで、袋を積んで病人の囚徒等を乘せた車が泥濘の凍つた道の上を軋り乍ら行つてゐるのに追ひついた。士官が見えないのは、もつと先きに行つてゐるのであつた。兵卒等は酒を飲んだらしく、車に從いて行きながら陽氣に騷いで喋つてゐた。

車は長く續いてゐた。先きの方の車には刑事犯の病囚徒が六人づつ窮屈に載せられ、その後の三臺には國事犯の者が三人づつ分乘させられてゐた。その三臺の中の最後のには、ノヲドゥヲオロフ、グラアベッツ、コンドラティエフ、次の車にはランツェワ、ナバアトフ、それからマリア・パウロフナが代つてやつてゐる僂麻質斯に惱んでゐる女が乘つてゐた。三番目の車にはクリルツォフが藁と褥の上に寢かされて居り、その端にマリア・パウロフナが乘つてゐた。

ネクリュウドフは自分の馬車をクリルツォフの前で止めさせて、彼の方へ歩いて行つた。醉つぱらつた兵卒の一人はネクリュウドフに後へ退るやうに手眞似をした。けれどもネクリュウドフはそれには頓着せず、クリルツォフの車の傍に行つて其端の材に手をかけながら從いて行つた。羊の毛皮を着て矢張り仔羊の毛皮の帽を被り、口に布を當ててゐるクリルツォフは、前よりも一層痩せて蒼白い顏色になつてゐた。彼の美しい目は、殊に大きく開いて輝いてゐた。彼は力無げに車に搖られながら、絶えずネクリュウドフを見てゐたが、容態はと問はれると、默つて目を閉ぢてたゞ頭を打振つた。彼は車に搖られるのを辛抱する事に氣力を全部注いでゐた。マリア・パウロフナはネクリュウドフと、クリルツォフの容態を心配してゐる事を目と目で語り合つてから、一段と聲を高く快濶にして、車輪の音に妨げられないやうに云つた。

『あのね、士官さんも良心に恥ぢたと見えましてね、ブウゾフキンの手錠を除つてやりましたのよ、それでブウゾフキンが自身であの娘の子は抱いて行つてますの、カテュウシヤさんとシモンソンさんと、それから私の代りにエロオチュカさんも一緒になつて歩いて行つてますよ。』

クリルツォフは何やら少し云つたが、聞き取れなかつた。さうしてマリア・パウロフナを指して彼は、咳をすまいと努めつゝ顏を歪めながら頭を打振つた。ネクリュウドフがよく聞き

取らうと思つて傍に近く寄ると、クリルツォフは口に當ててゐた布を取り除けて、

『今は大變氣分がいゝんです。たゞ風さへ引かないといゝんだけれど。』

ネクリュウドフは肯いた、そして又マリア・パウロフナと視線を交へた。

『どうですか、あの三體の問題は？』とクリルツォフは又低い聲で云つて、大儀さうに微笑んだ。『解決がつきましたか。』

何の事だかネクリュウドフは分らずにゐると、それは數學上の有名な太陽、太陰、地球の三體關係の問題を、ネクリュウドフ、カテュウシヤ、シモンソン三人鼎立の關係に譬へて云つたものだと、マリア・パウロフナが說明して聞かした。クリルツォフは其說明を聞きながら、相違ないと云ふかのやうに肯いた。

『その解決は私がつけるべき事ぢやないんです。』とネクリュウドフは答へた。

『私が上げた手紙はお手に入りまして？　さうして書いて置きました通りに取計らつて貰へますか。』とマリア パウロフナは尋ねた。

『やりますとも。』とネクリュウドフは答へた、そしてクリルツォフの顏に不滿らしい調子の出たのに氣付くと、自分の馬車の方に行つて又打乘り、鼠色の獄衣や毛皮混りの上衣を着た囚徒行列の一エルスト以上も續いてゐるのを追ひ越した。道の反對な側にネクリュウドフはカテゥウシヤの青い布、エエラ・エフレモフナの黑い外套、シモンソンの上衣と帽子と白い木綿の靴下を見た。その靴下をシモンソンは草鞋を穿いた時のやうに紐で下部を締めてゐた。彼は女達と並んで、盛に何やら話しながら歩いた。

二〇

女達はネクリュウドフを見ると挨拶した、シモンソンは快濶に帽子を高く差上げた。ネクリュウドフは何も云ふ事がないので、馬車を止めさせもせずに通り過ぎた。それから平たい道になると、馬車は尙一層速く走り、たゞ往つたり來たりする他の車を避けるために、ちよいちよい脇へ寄らねばならなかつた。

道は轍の痕を深く印して薄暗く茂つた森中を向うへずつと行つて居り、兩側にはまだ落葉に隱れない黃色い砂地が鮮かに見えてゐた。しかし間もなく森が盡きると、廣々と遠くを見渡せる畑の中に來て、都會の金十字架や圓屋根が向うに現はれた。

雲が消えて空はすつかり晴れ、日は森の上にかゝつて露を持つてゐる草木の葉や、水溜りや、都會の十字架や、圓屋根を照らした。右の方には遠い薄藍色の空の下に山の姿が見えてゐた。

馬車は大きい村に入つた。往來は人通りが多く、露西亞人も居れば外國人も居て、異樣な風俗の帽や長い上衣を着てゐた。男や、女や、醉つたのや、しらふのや、店先きだの居酒屋だのの前を、用なささうにぶらぶらしてゐるもあれば、騷々しげに歩き廻つてゐるもあつた。町に近くなつたといふ感じが一體に著しかつた。

馭者は右手の馬に鞭を呉れ、手綱を引締めて自分は馭者臺の上に輕快に腰かけ直した。そして一寸も車を止めないで得意さうに其通りを向うへ、川の渡し場までさつさと走らして行つた。

渡し場に着くと、向ひ岸からやつて來る渡し船は、今その急流の中程に來てゐる所だつた。此方の岸には二十臺餘りの車が待つてゐた。ネクリュウドフは殆ど待たなくてもよかつた、と云ふのは川の中程迄は少し流れに逆つてやつて來た船は、中程から此方は下り氣味に流れに押されて直ぐ乘り場に着いたからであつた。

毛皮混りの上衣を着て西比利亞靴を穿いた肩幅の廣い筋肉のよく發達した口數少い大男揃ひの船夫等は、慣れた事とて巧みに綱を此方の陸の柱に投げかけて結んだり、岸邊に立つてゐる圍ひの杙を引き寄せたり、載せて來た車などを上げたりして、それから今度は持つて居た車や嘶く馬などを載せにかゝつた。流れが速いので綱は直ぐぴんと張り、船縁にはぴちぴちやぴちやと水の音がした。乘れるだけ乘せ、ネクリュウドフの馬車も轅より外した馬と一緒に窮屈ながら乘せられると、船夫等は乘れなかつた人々が尙ほ乘せて呉れと云ふのには頓着なく、綱を陸の柱より解き、岸邊の杙を押して船を出した。船の上は靜かだつた。たゞ船夫の歩く足音と、ことことといふ馬の蹄の音がする許りであつた。

ネクリュウドフは船縁に立つて廣い池面を眺めやりながら、二つの姿を代る代る胸に浮べた、車の上に寢て搖られてゐたクリルツォフと、道の片側をシモンソンと並んで元氣よく歩いてゐたカテュウシヤと。まだ死ぬる積りではないらしいが死ぬに違ひないクリルツォフの姿は、當然ネクリュウドフの心を傷ましめたが、シモンソンのやうな立派な男の戀を得てこれから本當の道を踏んで行かうとしてゐるカテュウシヤの甲斐々々しい姿を思ひ出しても、彼は悅ばねばならないとは思ひ乍ら、矢張また辛かつた、重苦しい自分の心を何うする事も出來なかつた。

町の方からは川の面を傳うて寺院の大きい鐘の音が殷々と鈍く響いて來た。乘客も船夫等も皆帽子を脫いで十字を切つた。船縁に近い所に立つてゐた襤褸を着た小柄の老人にはネクリュウドフは初めは氣が付かなかつたが、その老人だけは十字を切る事をしなかつた、そして顏を上げてネクリュウドフを眞向合ひに見た。繼ぎ綴ぎした上衣やズボンを着て、磨

り減つた西比利亞靴を穿いた其老人は、背には小さい袋を負ひ、磨りきれた高い毛皮の帽子を被つてゐた。

『何方ですか、行く先きは？』とネクリュウドフは尋ねた。

『神様の思召す處へ行きますわな。私あ働くでな、仕事がありや仕事をするだし、なけりや乞食して廻りまするだ。』と老人は答へた。船はだんだん向ひの岸に近くなつた。

船が着いた時ネクリュウドフは衣嚢から錢を出して老人に遣らうとした、けれども老人は受けなかつた。

『そねえな物は貰えましねえだ、貰ふのはパンだけでさあ。』

『どうも失禮しました。』

『何も詫りなさる事ねえだ、失禮をさしやつたでは無えからな、又誰にしろ私に失禮をする事は出來ましねえだ。』さう云つて老人は、一旦下ろしてゐた袋を又背に負つた。その間に馬車も陸に上げられて、馬も轅につけられた。

二

馬車が小高い丘の上に來ると、馭者は振り返つて尋ねた。

『旅館は何處に致しやせう？』

『何といふのが一等良いかね？』

『一等良えのは西比利亞ホテルだけれど、デュウコフ館も悪くねえで、へえ。』

『どれでもいゝ、お前の好いところへ連れてつて呉れ。』

馭者は向き直つて、馬を走らした。その町は矢張今迄のすべての町と同様で、屋根窓のある家があり、青い家根の家があり、何處も同じやうな教會があり、本通りには同じやうな店が並び、同じやうな巡査が立つてゐた。たゞどの家も大抵木造であるのと、道に鋪石がしてないのとだけが違つてゐた。

一等賑かな通りの一つに來て馭者は或る旅館の前に馬車を止めたが、生憎室が一つも空いてゐなかつたので、又さきへ行かねばならなかつた。次の宿屋には空いた室が一つあつたので、ネクリュウドフは二月目にやつと比較的清潔な便利な起居の出來る事になつたのを悦んだ。上等な立派な室に通されたわけではなかつたが、それでも郵便馬車や中次ぎ場の安宿や囚徒の宿舍に慣れて來た後とて、彼はひどく氣が清々した。

何よりも先づ彼は蝨を除り盡さねばならなかつた。囚徒の宿舍に行つたので、今迄は除つても除つても盡せないでゐたのである。そんな事をしてしまふと、彼は直ぐ浴室に入り、そ

れから鞄の中に襞も亂れないやうに丁寧に入れて持つて來た糊を入れた許りの肌衣を着け、ズボンも上衣も外套も皆新たに取り出して、よろづ都會風に着込み、そして其地の最高官衙へ行く事にした。旅館の門番は、營養のよく行屆いたキルギス產の馬をつけた馬車を呼んで來た。ネクリュウドフは直ぐそれに打乘つて、番兵と巡査の立つてゐる大きい美しい建物の前に來た。

建物の前後には庭があつて、葉の落ちた白楊や樺の間には、松や樅や檜が靑々と茂つてゐた。

長官の將軍は氣分が勝れないから面會しないとの事であつたが、ネクリュウドフは玄關番に、兎も角も名刺を將軍に取次いで呉れるように賴んだ。すると玄關番は首尾よい返事を齎して來た。

『御面會になります、どうぞ此方へ。』

玄關の室、玄關番、番兵、階段、見事な寄木細工の廣間、――さういふもの一切が彼得斯堡を思はせた。たゞ彼得斯堡ほどに淸潔でないのと、その辯いやに威張つたものである事だけが違つてゐた。ネクリュウドフは官房に通された。

將軍はでぶでぶに肥つた多血質らしい男で、鼻は馬鈴薯のやうに鈍く丸く、頭はてらてらに禿げ、額には瘤があり目の下には肉が著しく弛んでゐた。鞣革絹の寢卷きを着け、卷莨を手にしながら、銀皿にのせた茶碗を前にして腰かけてゐた。

『や、今日は。失禮ながら寢卷のままでお會ひしますぢや。だが、お會ひしないより優しですからな。』さう云つて彼は寢卷の襟を、でぶでぶに太つた首に尙ほ深く引きかけ乍ら、『少し氣分が惡いので外出はしませんのです。時に、こんな偏鄙な土地に何の御用でおいでになつたのですか。』

『私は囚徒の一行に從いて來たのです、私に近い關係のある者が一人其中に居りますので。』とネクリュウドフは答へた。『そして只今お訪ねしましたのは、その關係者の事と、今一つ他の用件とに就いてお願ひしたい事がありますので。』

將軍は茶をぐいと一息飲んで、持つて居た卷莨を孔雀石の灰皿に入れて消し、ぼんやりした小さい目で絕えずネクリュウドフを見ながら、注意して聞いた。たゞネクリュウドフに卷莨をすゝめたのだけが彼の話の間に一寸語を挾んだ事であつた。

將軍は教育のある軍人によくある、自由主義と人道主義とが軍人の職務と調和し得ると信じてゐる部類の男であつた。けれども、天性悧巧で溫良な人間として、彼はそんな調和のある可きものでないことを直ぐ覺て取り、それで絕えず自分が陷つてゐる其矛盾を忘れるため